
日常 → 非日常

ゴウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常↓非日常

【Nコード】

N2178I

【作者名】

ゴウ

【あらすじ】

ここは、平凡な日常を迎えている地球での話。そして、主人公、小倉隼人はいつも通りの平凡な日常を送っていた。が、それも下校時にはそれが崩れることとなる……。人間に最も近いロボット、アヤメとその周りの人々との話。

ただ今、初めから大添削会実施中。どんどん新しくなっていきます。

p r o g r a m 0 平凡な日常（前書き）

新小説です。

楽しく読んでくれたら幸いです。

program 0 平凡な日常

「ふわ……。」

間の抜けた欠伸をしつつ起き上がったのは、一人の高校生。
そして、洗面台に行き、顔を洗い終えてから、

「……さて、朝飯を食わなければ……。」

そう言っ、階段で一階に下りようとしたのだ。しかし、

ズルッ！

「いつ！？」

一体何に転んだのか、階段を下り始めて一段目で滑って、そのまま一階へと痛みと共に連れてかれた。

「ち、畜生……。何で毎朝こうなるんだ？」

因みに、毎朝やっている。だったら、寝るところを一階にしろ、と言いたくもなるのだが、なぜか二階から変えない。頑固、というわけではないのだが。

「まあ、いいや……。とりあえず朝飯……。」

そして、さっきの足を痛めたらしく、這って動く羽目に。無様な姿で、台所までできるだけ急いだ。

「ふう、ごちそうさま。」

その男子は、朝食を食べ終え、歯も磨き、今制服に着替えている。バッグに入れたものを確認し、玄関に行って靴を履いた。

「じゃ、行ってきます、母さん、父さん。」

その男子は、写真に写っている自分の両親に挨拶をした。となると、今この男子の両親はいないらしい。

「……………しかし、痛いな……………」

そう言って、足を引きずりながら出て行くのだった。

そして、『惑星高校』に到着。彼の通う高校だ。
因みに、彼の家から徒歩で十分程度で着く。それほど近いのだ。
そして、『2年2組』の教室に入り、

「おはよ、賢。」

「ああ……、ってまた階段から落ちたのか、隼人？」

そう言い、今朝階段から落ちたての生徒、そして本作の主人公、『
小倉 隼人』は自分の友人である、『太田 賢』に頷いて答えた。
隼人が階段から落ちたのが分かったのは、足を引きずっているから
だ。これなら、誰でも分かる。

「お前、生まれてから何回階段から落ちたよ？」

「千回じゃね？」

「俺に聞くな。」

そうやって賢が隼人に突っ込んだ。

「あ、そっぴや今何時？」

「……分からない。」

「時計があるのに？」

「読めないって何度言ったら分かる？」

そう、賢は名前の文字通り、物凄く賢いのだが、なぜか唯一時計が
読めない。よって、自分の人生から、時計を省かなければならない
のだ。

「ああ、そうだったな。」

隼人がそう返した時、

「おっはよー！隼人ー！」

教室に元気よく入ってきたのは、一人の女子生徒だった。

明らかに隼人を呼んでいる。

「なあ、ちよつとうるさいんだけど……、唯。」

「何よ！せつかく挨拶してるのに！」

「それによ、その抱きつくの、やめてくれない？」

「いいじゃん、楽しいし！」

自分で原因を作りながらも、少し顔を赤らめる隼人にことごとく反論する女子生徒、『鈴木 唯』は、とにかく元気で無邪気。その明るさからか、友人も多い。

「まあまあ、お二人さん……。」

「うっさいわね！黙ってなさいよ！」

「うん、まずお前が黙れ。」

賢は唯に少し怒りを覚えつつ、笑顔で言った。それが怖い。唯もこれには少し引いた。

しかし、いくらなんでも、朝っぱらからこの大声はないだろう。その時。

「はい、席に着いた着いた！」

そう言い入ってきたのは、先生と思しき男性だった。しかも、柔道着を着ている。

「よし、今日も全員いるな？では、早速授業を始める。」

その時、一人の男子生徒が、

「兄ちゃんよお、朝の会は？」

「……ああ、そうだった。というより、まずお前は服装を直せ。」
「……やなことだ。」

反論している男子生徒は、不良であった。しかし、この生徒、ただ
気取っているだけで何も問題は起こさない。つまらない野郎だ……
……まあ、一応喧嘩は強い。

因みに、その不良の名前は『近藤 こんどう 大助 だいすけ』で、その兄であり、先生
でもある人物は『近藤 ききょう 桔梗』だ。

「……まあ、いい。では、朝の会を始める。」

そう言っつて、静まり返った教室で、今日も学校生活がスタートした。

平凡な日常を過ごしているところとは遥か離れた宇宙。
その中に、隕石の如く地球に接近している物体がいた。そして、そ
れはどんどん地球に近づいていた。

そして、作者自らが省略して、省略して、省略しまくった結果、午
後四時になりました♪

「省略しすぎだぞ、お前。」

はいはい、聞こえませうん♪賢君のツツコミは聞こえません♪
さて、今は授業も終わり、部活動の時間。読者の皆様が今日知った人物、隼人、賢、唯、大助はどんな部活に所属しているのか？

「……安西先生。出来ました。」

「……おい、材料手渡してからまだ十分しかたってないぞ？てか、何造ったんだ、お前。」

まず隼人は、まあ簡単に言えば、『機械類製造部』に所属している。その、機械のあれこれを造る部だ。そこ、説明が適当とか言わない！とにかく、隼人はその出来たものを顧問の女性の先生、『安西あんさい裕ゆ子うこ』に見せた。

8

「ああ、目覚まし時計です。」

「……時計？」

「はい、ここをこつすると……。」

そう言い、隼人は持っている『時計』の上にあるスイッチを押した。すると、

『ギイイイイイイイ！……！！……！！』

……物凄い金属音が。

「……おい、何だこれ？凄い音だけど。てか、こんなの近所迷惑だ

よな？朝、絶対苦情を浴びながら、嫌な一日がスタートするよな？」

「でも、このくらいあったほうがいいじゃないですか。」

「いや、よくない。」

「チツ、即答かよ……。」

「先生に向かって舌打ちとは何だ！」

ここまで来ると、口喧嘩だ。そこで、賢が言った……、っていたの？

「いたよ！」

あゝ、はいはい、苦情は後でいくらでも聞くから。じゃないと、今まずいよ？

「オラア！」

「うおっ！？」

ほら、安西先生が得意の『少林拳（因みに、『少林寺拳法』とは別物）』で、隼人を殴りにかかってるけど？

「なっ！ちよつと、安西先生、ストップ……！」

「うるせえ！」

「がはっっ！？」

あゝ、賢、見事に飛んだな……。君の事は、二秒くらいは忘れないぞ、賢……。

「生きとるわ！勝手に殺すな！」

チツ、生きてたか……。

「……ひどいよ作者さん……。」

「賢、お前誰と話してるんだ？」

「オラァ！」

「うおっと！」

「げほっ！」

あ、賢また飛んだよ（隼人が避けた安西の鉄拳によって）。
そんなこんなで、この部は賑やかです。

他二人は、どうでもいいか。

「ちよっと！？どういうことよ！！」

いや、正直物語を進めたい。

あ、言っておくが、唯は『美術部』、大助は『柔道部』である。
よし、おしまい！

「いや、ちよっ」

はい、強制終了。

そして、隼人は部活を終え、家に帰ることに。
元々、隼人と賢は住んでいるところがちょうど真逆の位置なので、
学校を出たら別れなければならない。

「んじゃ、また明日な。」

「ああ。」

そして、隼人は『傷だらけの』賢と別れ、家へと向かった。が、

ガッ！ ビターン！

「……痛え~~~~~！！」

今度は、石に躓^{つまず}いて転んだ。学校生活がほぼ省略されていたので読者の皆様に教えるが、本日、三十回目。

そして、鼻を押さえて立ち上がり、治療のために急いで家へと帰った。

全ては、平凡なはずだった。はずだったが……。

この日を境に、それも崩れる。

program 0 平凡な日常（後書き）

ロボットは、次回から出てきます。先に言っておきませんが、登場の仕方が派手です。

program 1 殺人兵器、アヤメ参上！（前書き）

今回から、ロボット出現です。

隼人「おい、殺人兵器って何だ、殺人兵器って。」

もういっそのこと、これにしようぜ、ってなったから。

隼人「……。」

program 1 殺人兵器、アヤメ参上！

家にあるところに帰ってきた。

そう、いつも通りの家のところまで、隼人は帰ってきた、はずだった。人もたくさんいる。

人目を縫ってようやく見つけたが、目の前は、焦土と化している。

「……何故？有り得ない！hahaha！I'm lovin' it！」

少し壊れ気味になりつつも、とりあえず『全壊した家』へ入った。周りの人々も、その壊れように引いてしまい、止めなかった。そして、数秒も経たないうちに、原因を見つけた。

「……何だこれ？」

目線の先にあつたのは、人間にとてもよく似ている『ロボット』。しかも、女性のようだ。

茶色く、長く、綺麗な髪をしていて、顔立ちも可愛い。服も着ているようで、どこかの高校生を思わせるような制服を着ていた。

しかし、どこことなく人間でない要素を漂わせていた。

まず、これだけの衝撃で、身体が全くの無傷。もちろん、制服も。次に、手が剣と化しているところ。

そして、生気のないような様子。

それらから、人間ではないと予想は出来た。

と、次の瞬間、そのロボットは目をゆっくりと見開いた。目の色は、黒のようだ。そして、その起きている姿は、まるで人間そのものだ。今までに無かった生気が、今になって出ている不思議な感じもあり、人間により一層近く見えた。

しかし、後に分かるがただ1つ、人間にはない特徴が。

『……。』

「……な、何だ？」

正体不明の、そして美形のロボットに見つめられ、どう対応しているのか分からず戸惑う隼人。
そして、そのロボットは、

『……はっ！』

「へ？」

突然上空へと飛び上がる。

さらに、突如手を銃器に変えた。

ロボットは、その銃で隼人をめがけて発砲。

「のわあああああああ！！？」

素っ頓狂な声だが、確実に身の危険を感じているわけで、隼人はすぐさま逃げの態勢に入る。

半秒前まで自分がいた場所は、道路が銃弾によって挟られた。

「ななな、何なんだよあれ！！」

ふわりと地上に足をつけるロボットは、今の隼人にとって恐怖対象でしかない。

が、脱兎の如く逃げる隼人に、ものの一刹那で間を詰めたロボット。その手は、今度はチェーンソーに変わっていた。

「んなあああああつ!？」

しかし、人生の終わりを迎える前に、隼人はいつものように転び、その上をチェーンソーが通過する。

大振りな行為に対して隙が出来たのだが、当然転んでしまった身では、逃げ出すのに時間がかかる。

「くそっ!」

隼人は逃げ出そうとするも、アヤメはチェーンソーを隼人の心臓めがけて突き刺す。

今度こそ、隼人の短い生涯が終わろうとしていた。

「……はは、今日は災難だらけだな……。」

乾いた笑いを浮かべて、迫り来る死に覚悟を決めた隼人。しかし。

『……そうだな。』

突然、ロボットが口を開いた。

同時に、死を与えることもやめた。

『おい、貴様。』

「は、はいいいっ!」

がたがたぶるぶる震えて次の返答を待つ隼人。
が、その返答は意外にもシンプルだった。

『貴様の家には、充電器とやらはあるか？』

「……はい？」

……逆にあまりに普遍的過ぎて、今度は言葉の意味が理解できなかった。

理解できずに、沈黙が数秒間続く。
その沈黙を破ったのは。

パン。

乾いた、しかし軽快な音だった。

隼人はその音の正体を確かめるべく、恐る恐る目の前の光景を見る。
そこには、音を出した主である小型の銃が。

『もう一度聞く。貴様の家に、充電器とやらはあるか？』

目の前の黒い笑顔に、今度は、返答する。

「ハイ……。」

とてつもない恐怖丸出しだったが。

そのまま、崩壊した家へと向かう隼人。

しかし、家には幸い地下があり、そこに連れこんで充電をさせた。
今は、コンセントを頭に刺している少女が目の前にいるという、大
変シユールな光景と面面向かっていた。

「……しかし、とんでもない奴だな。」

隼人はつぶやく。

確かにとんでもない。あれだけの落下の衝撃にも拘らず傷は1つも
無いし、腕を武器に自在に変えるし……。

とにかく、このロボットの正体が知りたくなってきた。
が、意外にも早く、その時間はやってきた。

『……MG-564 システム起動。……完了。これより殺しを実
行せよ。』

……何か物騒なことを言ったのは気のせいだな。うん。

そう思いたかった隼人だが、その願いも空しく散り、目の前にまで
レイピアが迫ってきた。

しかし、そのレイピアはすぐに動きを止めた。

良く見ると、その先端には、スズメバチが刺さっている。

『……殺した。』

「……。」

『危険動物を殺したといっている。感謝くらいしろ。』

「あ、ああ。どうも……。」

と、そのままレイピアを口に運び、

蜂を食った。

「……え？」

『ん？どうした？食いたいのか？』

「んなわけないだろ！！」

『じゃあ、何だ、この光景についていけないのか？』

「はい。」

即答。

『悪いが、これもエネルギーを溜めるための行為だ。』

「は？さっき充電したろうが。」

『が、この武器変形は結構エネルギーを喰う。だから、こうしてやるのがいいのだ。』

殺した蜂を少々租借してから、こう言った。

『……まあ、助けてくれた事には礼を言う。』

「あ、ああ。でも、困った奴は助けるのが一番だろ？」

『貴様の命を狙った奴をか？』

「ま、まあな。」

と、ここで隼人は気付く。

「そついや、お前、名前は？」

『名前？名前はM G - 5 6 4だ。』

「いや、そうじゃなくて、もっと呼びやすい名前はないのか？」
『あるわけないだろ。』

「……そうか。」

だったら、と隼人は続ける。

「俺が名前を決めるか？」

『断固拒否する。』

「……うつ、何故……？」

『名前など、自らで決める。』

と、そんなに考えもせずに言う。

『豊臣秀吉。』

「俺が却下する。何か色々ややこしくなる。」

『だったら天草四郎時貞。』

「だったらって何だ、だったらって。」

結局隼人がつけることに。

「じゃあ、アヤメ、なんてのはどうだ？」

『アヤメ？』

「ああ、お前、なんか殺すっぽいし、『殺める』で、アヤメだ。」

『……ふむ。』

ロボットは少し考える。

『まあ、いいだろう。今日からアヤメと呼べ。』

「俺が名づけたのに、その名で呼べて命令されるってちょっと違和感が……。」

まあ、いいか、と話題を変える隼人。

「あ、そういえば、お前、どこから来たの？」

『……宇宙のどこかの星から。』

「はあ！？」

宇宙とはまたスケールのでかい話だ。
空から落ちてきたのだから当然だが。

『私は、誰かに造られ、戦争に駆り出され、様々な命を奪ってきた。
まあ、これが私の目的そのものだけだな。』

「殺すことが、目的か……。」

なんと恐ろしい、目的で作られたロボットだろうか。
まさに『殺人兵器』だ。

『そして、私より優れたロボットが生まれ、捨てられて、そのまま
こちらに落ちてきたという訳だ。』
「なるほど……。」

そして、こんなことを言ってきた。

『だから、住む場所もない。という訳で、ここに住ませてもらう。』
「ん？ああ……。あ？」

住ませてもらうの意味が理解できなかったが、今度は前よりは早く
理解できた。

「ええええええええ！？」

『黙れ。さもないと、次はこの地下室をふっ飛ばすぞ?』

「一生住んでもらっても構いません。」

……てな訳で、殺人兵器の、殺人兵器による殺人兵器（何のこつちや）、アヤメが、俺の家（というより地下室）に住むことになった。

そして、これから始まるのは、こいつと俺と、さらに非日常的な奴らの織り成す、非日常な生活である。

program 1 殺人兵器、アヤメ参上！（後書き）

アヤメ『私がアヤメだ。』

かなり変なロボットですけど（笑）

アヤメ『……グレネードランチャー。』

チュドオオオンー！

……痛い……。

アヤメ『では、これで失礼。』

program 2 アヤメの手料理（前書き）

タイトル通り、アヤメが料理をしますが……。果たしてどうなりま
すかね？

program 2 アヤメの手料理

少し薄暗い地下室で、隼人がアヤメに色々と尋ねていた。詳細が分からない以上、聞くしかないからだ。

「……それで、アヤメって基本何するの？」

『殺人だ。』

「それは分かったから……。後は？」

『あとは、ロボットと言えども、お前達とほとんど同じだ。食事をしたり、寝たり、とかな。』

その言葉を聞き、隼人の頭はフリーズした。

「……おいおい、待て待て待て待て。眠る、は分かるけどよ、『食事』ってどういうことだ？」

『そのままの意味だ。食べ物を取り入れること、人間もしているだろう？』

ロボットが食事？まず考えられない。

そもそも、ロボットがそんなことをして大丈夫なのか？それを聞くと、

『食べ物、全てエネルギーに変換されて、動力源となる。全く問題はない。』

「なるほどな……。って、どうやって変換するんだよ！？」

『企業秘密。』

「そんな返答されたの人生初めてだよ！」

隼人は突っ込む。

『どうした？具合が悪いのか？』

「違う……。でもよ、何で破壊したの！？」

『むしゃくしゃしたからやっただけだ。』

「そんな理由で星を壊すなアアアア！！」

『むしゃくしゃしたら物壊すのは当然の行動ではないのか？』

「そうだけでも！規模が違うから！！」

しかし、相当の力の持ち主だと分かった。

普通の人間と同じように生活し、とんでもない力を持ち……。あとは頭脳だ。

「おまえさ、どのくらい頭がいいの？」

『……強いて言うならば、この星のスパコン（スーパーコンピュータ）のこと。〽の一億倍は処理力が高いな。ロボットだから、検索も出来るし、語彙力の不足も無いはずだが、基本は簡単な言葉で話している。』

「そう、なのか……。って、スパコンの1億倍ってどれだけ頭良いんだよ！？」

『知らん。だが、その〽算数』の問題集を解くことならできる。』

アヤメがある本を指差す。

そこには。

『数学オリンピック。ク問題集』

「おい、お前、これ出来るのか？」

『ああ。でも面倒だから止めておこう。』

「……。」

なんだこのロボットは……。？つか、ロボットじゃない。隼人は即

座にそう思った。

『さて、私は何をすれば良い？』

「何かもうここに居候する気満々だな、オイ！」

『居候とは人聞きの悪い。そうだな、殺人をするために拠点にする、
と言ってくれ。』

「あああああああ！？」

隼人、絶叫中。

落ち着くまで、あと数秒。

その要因、銃声。

結局、アヤメはここに居候することにしたらしい。

どこかのマフィアのボスよろしく、ソファにふんぞり返っている。

「お前、何様だよ……。」

『アヤメだが？おかしい質問をするな。』

しかし、アヤメの少し薄汚れた服を見て、隼人が言った。

「……で、お前さ。」

『何だ？』

「服……、着替えないか？妹の奴あるし。」

そう、隼人には実は妹がいる。

名前は和美と言い、年齢は十四歳。現在は、語学の得意さを活かして、アメリカにいる。
因みに弱点は算数、数学。足し算が出来ないほどの致命的なものであるが。

そんなこんなで、着替えをすることになった。

『……サイズは合うのか?』

「多分。俺の妹もそんな感じだったし。ちょっと待ってる。」

数分後、上が黒い服に、下が青いジーンパンのようなものを持って隼人が戻ってきた。

それを受け取ると、早速その場で服を脱ぎ始めた。

「ま、待て待て待て待て!」

『何だ?』

しかし、アヤメは制止を無視してその場でどんどん脱ぎ始める。隼人は服を脱ぎ始めた辺りでアヤメに背を向けた。

『どうしたんだ?』

「いや、お前、着替えるときぐらい別室行ってやってくれ……。」

アヤメは疑問を浮かべながら、渋々トイレに行って着替え始めた。

数分後。

「ん。いいんじゃない？」

『そうだな。悪くはない。』

「ならいいか。」

隼人はこの時、ふと時計を見た。
すると、午後七時。

「やべ！料理作らないと！」

隼人が急いで、キッチンの方へと向かうが、アヤメに止められた。

『何をするつもりだ？』

「何って、料」

『解剖だと？私にもやらせる。』

「まだ何も言っていないよ！？」

『じゃあ、何だ。その準備に包丁でも研ぐのか？奇妙な笑い声付で。』

『

「俺何だと思われてるんだよ！？」

死に値する存在
『変人爺。』

「わーい、酷い言われよう！しかも酷い漢字を酷い読み方にされたー！！って、違う違う！」

『違う？じゃあ虐殺？』

「しねーよ！！てか、話を逸らすな元に戻させろー！！！！」

『何を虐殺するんだ？』

「何もしねーよ！」

『まさか、お前、奴隷がいるのか……？なるほど、それなら虐殺しても』

「やめー！！！！い！！！」

隼人が息絶え絶えに、話を戻す。

「料理、だっつーの……。」

「なるほど、人間を食うのか。」

「カニバリズム！？ってかまだそんなこ」

「そうか……。人間とは、堕ちたものだな。」

「勝手な自己解釈するな！」

「は？ということとは、違うのか？」

「違うに決まってるんだろ！普通に魚を料理をするんだよ！」

隼人がようやく自分の意見を言い切った。

今まで1人暮らしたたのも手伝って、自炊はある程度できる。

「なるほど、面白そうだな。で、魚は釣ってくるのか？」

「冷凍したのがあるよ！」

「それとも養殖か？」

「話し聞けよ！」

「却下。」

「一瞬！？ってか、料理するから大人しく……！？」

その時、アヤメが隼人の服の襟を掴んで、後ろへと投げ飛ばした。

「ぎゃああああああ！？」

アヤメはそのまま後ろに振り向かず、キッチンへ向かう。

「私が作る。覗くなよ。」

何か意味有り気な笑みを浮かべてキッチンへと消えていくアヤメ。

そして、投げ飛ばされて、ソファに受け止められ無事だった隼人は、キッチンをじっと見る。

「……………しかし、大丈夫か……………」

やはり、隼人にはそんな不安が募った。

という訳で、キッチンをこっそりと覗いてみると……………。

『……………』

今の状況は……………。

右腕：チェーンソー

左腕：おそらく、レーザー銃

今日の料理は、おそらくハンバーグだが（魚料理を予定していたのに）、そのやり方も雑、というより、有り得ない。

- 1 ・チェーンソーで肉、たまねぎを切る。この時、壁も一緒に切る。
- 2 ・右腕を元の手に戻し、『砕いた壁ごと』こねて形を作る。
- 3 ・まな板へと叩きつけ、まな板を砕きつつ、塊に『木屑』を入れて、空気を抜く。
- 4 ・左腕のレーザー銃で、キッチン台もろとも塊を焼き切る。
- 5 ・完成。

全く作り方が違う。それに、あの『黒い物体』はハンバーグと呼べるのか？隼人はそう思った。

「……………」

『さあ、出来たぞ。』

そして、目の前に出されたのは、ハンバーグではなく、『なにやら堅いもののたくさん入った黒焦げの物体』である。

こんなもの、食える訳がない。

『いただきます。』

「……………」

アヤメが黙々と食べていく中で、隼人は黙って見ているしかなかった。

隼人は、敬語を使って尋ねてみる。

「あの、これ、何ですか？」

『ハンバーグだ。それ以外に何がある？』

「これハンバーグじゃねえだろ！なんだよこれ、志。妙のか。いそうな卵か！？」

『なんだそれは。』

苦笑したアヤメ。

しかし、そのままアヤメは言葉を続ける。

『それより、このハンバーグの作り方、合ってるよな……………？海王星のレシピだけど……………』

「……………」

アヤメは、意味ありげなことを、最後に呟いた。
不穏ワード、発見。

「お前、海王星のレシピって言ったか？」

『言っていない。……………カイ・オーセイのレシピだ。』

「絶対嘘だろ！今考えたら！しかも誰だよそいつ！それ以前にそいつをここに連れて来い！料理を教える！！」

『……………あの人は、もう……………』

「遠い目をするなー！まるで死んだみたいに！！」

『死んだみたいじゃない、殺した。』

「もつと駄目だった！！つか、そんな奴いないだろ元から！？話作るな！」

そんなこんなで時間は過ぎていく。

が、隼人はこんなものに手を付けられるほどの勇者ではない。それを見たアヤメは、

『食べ。』

「……嫌です。」

『ホラ、口を開ける。』

「や、やめ！顎が外れる！！」

アヤメは、隼人の両唇を掴んで口を開くように引っ張る。

『食べ。』

「ひゃっは（却下）。」

『食わなきゃ顎外す。』

「ほうほん（拷問）！？」

『じゃ、食わなきゃ人類滅亡するぞ？』

「ほんはひひゅーへ（どんな理由で）！？ひはほ、はほふへひはひよーひ（しかも、後付けしたように）！！」

『ほら、たとえ食べ』

無理矢理食べさせられた。

そして、一生に一度のこの世のものとは思えない触感、味を別の意味で楽しんだ後、救急箱が必要になったのはまた別の話。

カップラーメンが出来る時間×60分後。
つまり、三時間後。

『さて……。寝るか。』

「ああ、寝てる寝てる。」

隼人は、今日だけでも散々だった。

一日に三十回転ぶ以上に壮絶だった。

が、これがまだまだ続くのは、隼人も薄々感じていた。

「……………は……………」

その感情からため息をついた。
すると、

『おい。』

「何だよ？」

『……………どこで寝るんだ？』

「床で寝てる。」

『よし殺害。』

「待て待て待て待て！おいどんが悪かったでござする！」

『ござする？……………まあ、いい。とにかく、お前が床で寝ろ。さもな
くば……………』

「さもなくば？」

隼人は恐る恐る聞く。

『お前の明日は無い。』

「……………」

遠回しに「死ね」って言われた。

仕方が無いので、本当に床で寝ることにした隼人なのであった。

『そうそう、明日が無いとは具体的にはな、首切断か、四肢切断か、硫酸がけか、目玉焼きか、解剖のいずれかだからな。』

「うわあああああああああああ！！！」

……その夜は、（隼人にとっては）人生至上最も恐ろしいものとなった。

program 2 アヤメの手料理（後書き）

隼人「おい、何だあのハンバーグは？」

お、どうだった？美味しい？

隼人「んなわけあるか（怒）」

そりゃそうだよね（汗）

アヤメ「これ、食べて。」

え？……これって……。

アヤメ「ハンバーグ。食べて。」

いらないから！

アヤメ「……照準セット。」

分かった分かったから（汗）

……！！！！ゲホッ！ゴホッ！？

隼人「あ、終わったな。」

p r o g r a m 3 地球への来訪者 P a r t 2 (前書き)

やっとファンタジーの世界らしい奴が登場します。
因みに、今回は初のバトルシーンがあったり。

program 3 地球への来訪者 Part 2

翌朝。

隼人は、朝は早く起きるタイプだが、前の日が大変だったため、いつもより三十分遅れての起床だった。

そして、隼人がベッドから降りて歩こうとして、ベッドからはみ出していた布団で足を滑らせて本日一回目の転びを見せたのはご愛嬌。

さて、キッチンに来て朝食兼昼食となる弁当のおかずの料理をし、それらを終えて一人で食べていると、

『私の分は？』

後ろから声がした。飲んでいた牛乳を盛大に口から噴出す寸前だった。

後ろを向くと、散々騒ぎを起こした拳句、結局住まわせなくてはならなくなった今現在、髪がぼさぼさになっている殺人ロボットがいた。

「……自分で作れや。」

ぶつきらばずに言い返すと、突然テーブルが動き、自分に向かってきた。

作った料理——その内熱いスープがテーブルが動いたことによ

り零れて、隼人の身体に大ダメージを負わせた。

「熱いーーーーッ!!」

そして、その主犯はやはりこいつしかない。

「アヤメ!」

「……分かったらとつと作れ。」

「……住まわせておいてその口」

ずどん。

四十口径の弾丸が隼人の皮膚を少し切り裂いた。

アヤメの手は、「次に言うことを聞かなきゃ、ふっ飛ばすよ!」と言わんばかりに、右手をガトリング砲に変えて楽しそうに立っていた。

『作れ。』

「はいそうしますちよつと待ってで。」

笑顔で頼まれ、いや脅迫され、少し泣きつつもそそくさとキッチンに消える隼人だった。

「……んじゃ、学校行ってくるわ。」

食事と言える食事を終えた後制服に着替え、スクールバッグを片手に持った隼人が、靴を履きながら言った。

『学校……?』

アヤメが不思議そうな顔して首を傾げる。

「ああ、学校知らないんだな。」

その言葉に、アヤメは素直にこくと頷く。

「学校って言うのは、俺達子供がちゃんとした大人になるために行つて、勉強したり、友達と喋ったりする場所だ。」

『……楽しそうだな。』

「おっと、お前を外に出したら駄目だからな。」

『何故?』

「何故って……。昨日の騒ぎを起こしたから分かるだろ。」

^{もって}
尤もな理由だ。

アヤメもさすがにこれには納得したのか、分かった、と一言残してリビングに消えた。

「あ、あと、家では大人しく待つてろよ!」

隼人のその声は聞こえたかどうか分からないが、アヤメに言った。が、この声が聞こえていなかったことが後に判明するのを、隼人が知るはずもなかった。

学校内。

「……イテ……。」

一体教室に来るまで何回転んだのか想像できないほどに、隼人の制服は薄汚れていた。

そして、教室へ入り、その数秒後。

「隼人ーーーーー!!」

唯が、隼人めがけて飛んできた。

が、昨日と同じ手はやられない。隼人はそれを見事に避けて、唯はその先にあつた壁に口付けする羽目に。

「……痛いよ……。」

口を押さえつつ、そして恨めしそうな目を隼人に向けた後、すぐさま保健室へと飛んでいった。

「おはよ。時計が読めない高校生。」

「名前で呼べ。せめて名前で呼べ。」

同じことを二回繰り返して言っているのは、隼人の呼んだ名の通り、『時計が読めない高校生』、賢だった。

「……しかし、酷くないか？」

「何がだよ？」

「あの唯に対してだ。」

「ああ、別に大丈夫じゃね？昨日はこっちなんか真面目に何度か殺されそうになつたんだからな。」

「????」

合ってるっちゃ合ってる。だが、信じてもらえないのも重々承知の……。

「まじで？」

あ、一応信じた。

「ああ。今は俺の家にいる。」

「おい、何でお前を殺しかけた奴が今、お前の家にいるんだよ？」

「……………頼まれた？」

「何故に疑問系だ。」

まさか、『脅された』などとは言えまい。

「まあ、いい。今日そっちに行っていいいか？」

「……………は？」

家に来る…………、アヤメにどうされても俺は知らんぞ…………、隼人はそう思った。

「いや、やめておいた方が」

「じゃ、お前に勉強面では何も教えてやらねえからな。」

「……………分かったよ。」

賢は学校一頭が良い。それを絶たれてしまつては困つてしまうので、それをよく使つて脅したりする。

まあ、あまり使いたくない、と本人も思っているようだが。しかし、隼人になら大丈夫だろ、そう思っているのかもしれない。

その時、教室の扉が開いた。

入ってきたのはもちろん桔梗先生だ。

「おし、全員座れ！」

この一喝で、全員は席に着き、学校生活がスタートした。

一方、アヤメはというと。

『………………。』

ソファに寝転んでいた。そして、

『…………暇だ。』

そう言った。

しかし、暇だからといって今何か壊そうとすると、おそらく地球が
消滅するのでやめておいた。

そして、もう一度言った。

『暇だ。』

しかし、ロボットにも暇だと思うような気持ちがあるのだろうか、
それが分かるような気もする瞬間だった。

その暇が潰すことが出来ると知るまで、後数分。

その頃。

そこら中で溶岩が煮えたぎり、何かの生き物の骨が転がっており、空気も澱んでいて、日の光も無い、一言で表すなら不気味な世界である『魔界』で、

「暇だね〜。」

ある頭蓋骨の上に座っている少女——短いストレートの金髪で、黒一色のワンピースと云ういでたちの少女——がそう呟いた。と言っても人間年齢で言えばもう成人に近い年齢だが。

「……………う……………ん……………。」

と、背伸びしてみたものの、暇は解消されるわけもなく、

「……………はあ……………」

大きく一つ、ため息をついた。

しばらく寝てみようかとも考えたが、そうやって時間を過ごすのはもったいない、むしろ眠くもないしと思いやめた。

しばらく、何をしようかと、少女の緑色の目でマグマを見つめながら悩んだが、数十分考えてある名案が浮かんだ。が、それは同時に、この魔界に二度と戻ってこれない、と言うリスクもあるが。

「……地上に行く。」

魔族は滅びる寸前であり、現在魔人は数百人しかない。だったら話し相手もないような退屈な魔界から抜けてしまおう。そういう考えから生まれた結論だった。そして、

「地上への扉よ！開けー！ー！！」

そう大声で言うと、少女の周りを光が包み、その光は空へと向かって行った。

昼。

隼人たちはとりあえず授業を終え、昼食の時間となった。皆が弁当をバッグから出し始め、誰と食べるか等で賑やかになってきた頃、

「ねえ、隼人。朝のあれ、避けること無かったじゃん！」

唯が隼人に開口一番に言った。

「いや、いきなり自分が扉開けてお前が襲い掛かってきたら、誰だって避けるだろ。」

「私だって分かってたなら、避ける必要も無いでしょ！」

「何故そういうことが言えるんだよ？道理にかなってないし。」
「うわああああん！」

唯が泣きまねをしたが、いつものことなのでスルー。

賢と一緒に食べることにしたが、教室で食べるか、食堂（ただ単に何かを食べるために作られた場所。以前は何か料理が頼めたが、食中毒で見事に二百人が病院送りとなり、廃止された。）で食べるか、はたまた屋上へ行くか。三つに一つである。

「食堂で食うか。」

「別にいいけど。」

と、弁当箱を持って立ち上がろうとした時。

ドオオオオオオオオン……………。

「……………今の何の音だ？」

そんな会話で満たされ始めた教室で、一人こうだろうと確信した人物が。

隼人だった。

それもそのはず。聞こえてきたのはちょうど隼人の家の方向だったのだ。

しかし、腹も減っていて、さすがに二日連続でこれは無いだろうと思ひ直し、弁当を食べることにした。

さて、隼人の一瞬よぎった悪い予感は的中するのだが、それまでの経緯を言っておくと……。

遡ること一時間前。

アヤメは、テレビをつけたり、冷蔵庫の中の物を使って食えない料理を作ったりしていたが、とうとう家にいること自体が飽きてきたので、外に出ることを決心した。

『……久しぶり、って感じだな。』

外にでて、首をゴキゴキ鳴らしながら少しは面白そうなものがないか、探してみた。

その時、魔界から人間世界へとやってきた少女は、何もないのに空を浮遊していた。

そして、見慣れない世界を見て、

（……見たところ、平凡そうね。まあ、魔界よりは退屈しないかな。）

そんなことを思っていた。と、下の辺りに、外に出てきよろきよろしている女が一人。

（……遊んでもらおっと）

もちろん、『戦闘』の意味で、だが。

『……一人、生体反応。空から。』

簡単にそんなことを言っ、アヤメが空を見上げると、成る程、一人の少女がアヤメの方へ飛んできたではないか。
そして、早速尋ねてきた。

「ねえ、一緒に遊ぼう。」

『嫌だ。』

「えー、即答？」

『もちろんだ。』

と、ここで、話し方が人間と違うことに気付いた少女が、アヤメに聞いてみる。

「……あんた、もしかして人間じゃないでしょ？ 気で分かるよ？」

『そうだが。』

「あ、意外にあっさり認めるのね。」

『別に隠すほどのことじゃない。何なら、お前は何者だ。』

「私？ 私はただの暇な『魔女』よ。」

そして、手にエネルギーを集めて、

「魔界術・二十二 かえんけん 火炎巻！」

そして、螺旋状の炎がアヤメを襲う。

普通なら逃げ出すところだが、アヤメは人間とは違う行動をとる。
攻撃を——真に受けた。

「…………え？」

こんなにもあっさりやられるの、と思いきや、

『…………これだけしか芸がないのか？』

炎の中、平然と立っているアヤメの姿が。そして、
炎を、吸った。

「はいいい！？」

さすがに魔女も驚きだ。

しかし、アヤメにとつては『エネルギーのあるものは全て自分の動力源にする』ということが出来るのだ。

『…………こんなものでは、腹は膨れないしな。返すぞ。』

そして、腕を何か細い大砲のようなものに変え、

『火炎放射！』

その筒から火を噴いた。火炎放射器だ。

「いやいやいやいや、人間じゃないって！」

『さっきから言っているだろ。そして、お前もだろ。』
「ま、そうだけどね…………。」

そして、またもエネルギーを溜め、

「魔界術・五十七 だくすいりゅう 濁水流！」

そのエネルギーを、濁った水に変換し、炎を消した。

……何故濁っているのかは聞かないでほしい。

「んじゃ、行きますか!」

と、何か異世界に通じそうな穴を自ら作り、そこから黒色の釜……失礼、窯を取り出した。

「どつちも間違ってる!」

はいはい、分かってますよ。鎌でしょ。

「そう! その名も『黒色鎌』!」

『そのまんまだな。』

「仕方ないじゃない! 私がつけたんじゃないんだから!」

『……まあ、どうでもいい。』

アヤメも対抗すべく、両手をチェーンソーに変えた。

幸い、平日の昼近くなので、どこにも人はおらず、どこかで仕事に行ったり、食事を作ったり、リンチを受けていたりと様々だった。

「いや、最後のはまずいでしょ……。」

……いちいちここに返答するなよ。さもないと……。

「ん? ……うわっ!」

ほら。アヤメに殺されるよ?

『……この程度なのか？』
「まさか！」

そして、鎌をふりかざして、突っ込んでいった。
が、攻撃をしたは良いものの、チェーンソーにふさがれて、もう一方のチェーンソーで切られそうに。

「くっ！」

後退して何とか避けたが、このままだとやられかねない。

「だったら……。」

と、突如、黒い鎌を光が包み、そのまま剣の形になった。
剣、と言ってもサーベルに近いが。

「切殺死滅刻絶剣！！」
せつさつしめつこくぜつけん

『長い名前だな。』

「うるさいな！名前が長いほど威力が強いだよ！」

そう、この少女のいた魔界では、技名は長いほど強いのだ。

理由は不明。恐らく生み出した奴が、『長いほうが強そうじゃね？』
とか何とか言っただけなのだろう。

「特にこれなんて、この世で切れぬものはないからね……。」
『……で？』

「あんたを切るんだよっ！」

そして、少女は目の前にいたアヤメに横薙ぎで攻撃。が、ジャンプして上に避けられる。

「逃がさないよ！剣技・其ノ三 疾風切！」
しっふうぎり

真空波を剣で出し、アヤメに攻撃する。が、身体を捻って見事に避けた。そして、そのまま地面に着地。

「この時を待つてたよ！ハッ！！」

そして、絶対無敵の剣がアヤメを襲った……。
……襲ったが、

『この程度か？』
「……嘘……。」

なんと、『切れていない』。

『……興ざめだな。』

そして、手を超巨大なグレネードランチャーに変え、

『吹っ飛べ。』

直後、大爆発が起きた。（昼時に隼人達が聞いたのはこの音）

そこから何時間か後。

『……あゝ、やってしまったな。』

そこには、平然と立ちつつ、がしがしと頭を掻くアヤメと、あの後
気絶したが、目を覚まして今は座っている状態の魔女。そして、半
径500メートルは吹き飛んだであろう民家の数々。（警察も吹き
飛んだので、誰も助けられない♪）

「イテテ……。ねえ、これどうするの？さすがにまずいんじゃない
？」

『ああ……。』

と、そこに、

「やっぱりな——！！！！大人しくしろって言ったのに！！！！って、
うわっ！」

「またかよ！」

大声で叫びながら来たが、そのまま面白いように転び、顔面を地面
に打ち、それに対して賢からツツコミを受けている隼人が来たのだ
った。

「ハア……。ハア……。痛いし……。てか、どうすんだよ、これ！」
『知らん。』

「知らんって……。」

「あゝあ、俺の家も吹き飛んだな、この状態じゃ。」

賢も呑気に言っているようだが、それでも気が動転している。
どうしようもない状態の廃墟で、

「大丈夫♪戻す方法はあるよ。成功するかどうかは分からないけど。

「

魔女が言った。

もちろん、男性二人はこの少女が魔女だということを知らない。

「……どうすんだよ？」

「簡単簡単♪『時猫^{ときねこ}』を呼び出せば良いんだよ♪」

『……はい？』

男性二人、訳が分かっていない様子。無論、アヤメもだが。

「ま、百聞は一見にしかずだから、っと。」

その少女は軽く何か言った後、

「……出でよ！時の神よ……。『時猫』！……」

瞬間、紋章のようなものが地面に現れ、そこから光が。光が完全に地上に出たとき、紋章は消えた。
そして、そこから出てきたのは……。

「……ミャーオ。」

体毛が白、柄が茶色で時計になっていることを除けば、ほとんど普通の猫だった。しかも可愛い。

「あゝ、やっぱり可愛い！！」

「ミャオ！？」

少女は時猫に抱きついた。嫌がつてるが。

「……おい、それでどうするんだよ？」

「あ、そうだった……。」

「忘れてたのかよ。」

突っ込みを入れたのはもちろん賢。

「さて、時猫！この一帯の被害を、時間を戻して直して！」
「ミャオ。」

時猫は『分かった』というように頷くと、目を閉じた。
そして、

「……ミャオオオオオオ！！！」

目を見開いた。その目は青に光っていた。そして、時猫の体から光が発せられ、全員目を瞑ってしまった。

……数秒後。

住宅地はいつもの賑やかさを取り戻していたのだった。
そして、そこには二人の人間と、一人の魔女と、一体のロボットと、一匹の猫が道の上で座っていた。

p r o g r a m 3 地球への来訪者 P a r t 2 (後書き)

魔女「ねえ、私の名前は!？」

それは次回で。

program 4 魔界で食べていた物は？

（隼人視点？）

「何故にクエスチョンマークをつける。」

お、賢。鋭い。

さて、俺達は家に入ったわけだが、そのメンバーは、俺、アヤメ、誰だか分からない女の子に、なぜか賢まで。

因みに、さっきの『時猫』とやらはもといた世界に戻させたらしいが……。全く意味が分からない。この少女は何者だ？

「……さて、早速聞くが……。」

おれは、少女に向かって言った。

「お前、何者だよ？」

「私？私は魔女だよ。」

……自分であっけなくそう言ったので、俺はおろか、賢もビックリ。これで驚かない奴は、そうだな……。……わかんねえな。

「じゃ言つなや。」

「だから、思考読むなんての。てか、読めるのか、思考。」
「いいや。」

ま、それはともかく……。

「……魔女ってどういうことだ？—から説明しろ。」

「はーい」

無邪気にそう返事した。正直、可愛い……。
って、何を考えてるんだ、俺は！？

「……私はさつきも言ったとおり魔女よ。魔界から来たの。」
「名前は」

そこまで俺が言うと、アヤメが目からレーザー！
横にあつた壁に穴が開いた。

「ななな、何すんだよ！」

「私にも喋らせる。」

「それだけ！？」

「ああ。」

「ふざけるなよ！」

「うるさい。今度は本当に体中に穴を開けるぞ。」

「……はい。」

賢は、アヤメの行動ですら不思議に思えてならない。
そりゃそうか。ロボットだって知らないんだもん。
つか、ロボットじゃないよな、こいつ。

それ以前に、自分が質問したいからという訳の分からない理由で殺
されかけてもな……。

「……それで、名前は？」

「マホメット・オールドランよ、マホって呼んでね」

魔女、マホメット・オールドラン、愛称マホが言った。

「それで、マホ。何しに来たのさ？」

賢が尤もな質問をした。
すると、

「暇だったから。」

たったこれだけで片付けられてしまった。
文字にして7文字。

「……え？」

「……それだけ？」

「うん。」

『考えられんな。』

アヤメも少し呆れ気味に言った。
ここでマホが反論する。

「だって、魔界にいてもつまらないしさ、遊び相手もないんだよ
！」

マホが訴えるように言った。少し、怒りの感情も交えながら。

「……それは、確かに退屈だな。」

「ああ……。」

俺達はただ、これしか言えなかった。
そして、

「それで、あんたの家に住むことにしたからねっ」

可愛く言いながら、指を指したのは、……間違いなく俺だ。

「な、何だよ!？」

「いや、アヤメって面白いしさ。いいかな、と思って。」

『面白いか……？私。』

アヤメも少し首を捻っている様子。

『……ま、いいんじゃないのか。楽しそうだし。』

「……今回ばかりは無」

と、そこで、

「魔界術・四十九 針波^{しんは}！」

突如、針状の物質を出現させ、四方八方に飛ばし始めた。

俺は何とか全弾避けられたが、賢は数本服に刺さってるし、アヤメはさも当然と言った感じで、来た針を剣で切るし、家には穴が開くし、穴を開けた針が天井を突き抜けて、放物線を描いて落ちたところにいたチンピラの頭に当たって、そいつが急にリンボーダンスを始めたし……。

こいつもアヤメと同じか。しかも、アヤメより派手だ。外にいる一名の頭、おかしくなっちゃってるし。

「で？」

「……どうぞお好きなように……。」

結局、渋々承諾するしかない俺だった。
もうなるようになれ、だ。

その十分後。

（アヤメ視点）

ん。私か。

今はハヤトは飯を作って、マホは家の様々なものを物珍しそうに物色して、賢はなぜか顔を青ざめながら帰って行ったし、そして、私は……。

『え、今日午後六時過ぎに道に穴があいているのが見つかりました。何かの爆発痕のようで、警察は原因を調べています……。』

……映像もここだし、うん、これは私だな。

「え？これ何！？」

マホが飛び掛るようにして私の方へ来た。
テレビは初めて見る物らしく、目を輝かせている。

『……これはテレビと言って、遠くでやっていることを伝える機械だ。』

「ふん……。」

マホは食い入るようにしてテレビを緑色の目で見つめた。
というか、近いぞ。目悪くなるぞ？それはそれでいいが。
そして、

「よく分かんない。」

そうか。それならそれで私は構わないが。
さてと、

『……そろそろ離れろ。撃つぞ。』

「嫌だ。」

『間の抜けた声を出すな。とりあえずどけ。』

「嫌だ。」

『……お前、それしか喋れないのか？』

「イエッサー。」

何故『イエッサー』を知っているんだ。どこで学んできた。
まさか、ハヤトが教えたわけではないし……。

『どこで覚えてきたそんな言葉。』

「これ。」

そうやって見せたのは、分厚い本。俗に言う『辞書』だ。
これが語句が幅広いらしく、使いやすい。私も情報収集のために無
断で使わせてもらった。数ページかめくるときに破ってしまったが、
問題ないだろう。

『ああ、なるほどな。』

「……そういや、さっき私があ劍で切ったところ……。」

『……このことか？』

私は、『さっきのやたら名前の長い劍』でやられた腕を見せた。
まあ……。

「……傷一つ無い……。」

『当たり前だ。』

痕も残ってないがな。

「……あんた何者？」

『私は、アヤメだ。』

「うん、わかったから。そうじゃなくてね。え……。あんた、人間じゃないとしたら、何？」

『ロボットだ。』

「絶対有り得ない。あの剣で切れないものは無かったんだよ？何で切れないのさ？」

『知らん。』

「……。」

私の体が頑丈だからかな？

まあ、どちらにしろ私はそんなことではやられないと言うことだ。

『……ああ、それと……。』

「な、何？」

『『あんた』じゃなくて、私の名前で呼んでくれ。』

「じゃ……、アヤちゃん？」

『よし、これで頭にでかい穴でも』

「本当にすみませんでした。」

……お前本当に魔人か？

しかも、頭に穴が開くどころじゃないほどの大きさのレーザー銃を見せて怯えるなんて……。

はい、そこで何かしら突っ込んだ奴。チェーンソーで首を切り落としてやるから今すぐこっち来い。

今なら両手両足も切り落とすサービス付だ。

「……ねえ、今何かに対して凄い殺気を放ったのは気のせい？」
『気のせいだろ。』

「いや、でも」

『少し黙ってくれ。』

「……ひゃい。」

もう言葉になってないぞ、マホ。

〈隼人視点〉

ころころ視点変わるな。

さて、夕食も作り終わったし、

「できたぞ。」

『お、やつとか。』

「わーい」

俺は二人を食卓のあるところに呼び出し、椅子に座らせた。

「んー。いい匂い」私のいつも食べたのとは全く違うね」

……魔界でいつも食べていたもの……。

どんなんだろ？気になるな。

「なあ、マホ。いつも食べてるものって何だ？」

「え？本当に知りたい？」

……何でいきなり意外そうな顔をする？

「ああ、まあな……。」

「じゃ、ちよつとこつち来て……。」

「?????。」

頭の中がハテナでいっぱい俺に、小声で囁くようにして教えられた。

えゝと、……………何?……嘘でしょ?……。

……………。

「……………ごちそうさま。」

『何故?』

「……………聞かなきゃよかった。」

「だから言ったのに。」

……………もう、何も食う気しなくなった……。

だって、（ズギューン）とか（バギューン）とか、（グツシャンバツシントンチンカン）とか言われたら、常人はもう一日は何も口に入れないかもな……。あははゝ、本当に聞かなきゃよかった……。

今、何か変な規制音あったけど、気のせいだよな。うん、きっとそうだ。それは俺の頭が今おかしいせいだ、うん。

……………グアアアアアアアアッ！知らないや良かった知識に頭が汚染されるウウウウウウウー！！

その次の日、腹が死ぬほど減っていたが、やはり食う気になれなかった。

食欲不振が回復したのは、それから一日半のことだった。

program 4 魔界で食べていた物は？（後書き）

アヤメ『……しかし、魔界で食べているものは何だったんだ？』

答えはWebに

アヤメ『載ってる訳が無いだろ。』

……もしあつたら？

アヤメ『そのサイトごと切り捨てる。』

……。

では、次回もよろしくお願いします。

program 5 魔界式双六で遊ぼう！（前書き）

ものの見事に遅れました（汗）

そして、今更ですがこの小説名と話がもうかみ合っていないせん。

アヤメ『じゃ、変えりやいいだろ。』

それだと色々問題が、ね。

アヤメ『……マシンガン。』

ギヤアアアアアアアアア！！！！！！！

マホ「じゃ、どぞぞぞ」

program 5 魔界式双六で遊ぼう！

〈隼人視点〉

……自称『げろげろ事件』で一日半は飯が食えなかった隼人だ。……ネーミングセンスがないのは、自分でも重々承知の上だ。言わないでくれ、頼むから。

さて、今日は学校も無い休日、土曜日、明日は日曜日。いつもなら、適当に休んでいるはずが……。

「ね、あそぼよ！」

『……いつまで寝ている？さっさと起きろ。』

……現在の状況。

マホには身体は揺すられるし、アヤメに至っては、容赦なく蹴りを入れてきてるし。これがまた痛いわ痛いわ。

「……分かったよ。起きるよ。」

「やった！バトルしようよ！」

……マホ、無類のバトル好き？

『それいいな。』

「でしょ？」

「こらこら、ついこの前も暴れたんだから、少しは大人しく……。」「うるさい。切り刻むぞ。』

「……何で？」

『もちろん、このチェインソーだ。』

「どうぞ、好きなようにバトルしてください。……でも、何とか

町を壊さずにしてほしい。」

それが第一だ。そうでなきゃ、今度は町が吹っ飛びかねない。

「じゃ、やめよ。」

マホが言った。判断するのも早い。……言っならばこいつは自由人か。

『……じゃ、何するんだよ?』

「……そうだな、……………」

ここまで考えていると、レイピアが頭上すれすれ通った。

「ななな……、今度は何だよ!?」

『考えるのが遅い。』

「そう簡単に浮かぶか!」

何故にすぐ攻撃してくるのかなあ? そんな時、マホがアヤメに聞いた。

「……アヤメは、どんな遊びでも対応できる?」

『脳内に、昨夜にインターネットにつなぐプログラムを作った。それで検索すれば、一発だ。』

そら凄いな。

てか、どうやって作ったんだろ?俺は尋ねた。

『お前のパソコンのデータを奪った。』

そうか、奪ったのか。

ん？……『奪った』？

まさか……、そう思いつつパソコンを起動し、初期画面を見ると、見事に『インターネット エクスプローラ』のアイコンだけ消えている。

「アヤメ！」

『うるさい。これ以上文句言つと首が吹っ飛ぶぞ。5、4』

「この度は誠にすみませんでした。」

「アハハ！これ冗談でしょ？」

そう思われても仕方ないか、こんな会話。
しかし、

『冗談ではないぞ？さもなくばお前を切り刻む。』

「うわ。怖い。」

ぜんぜん怖がつているように見えない。

それを見かねたのか、両手のチェンソーでマホの顔面すれすれを攻撃した。

『……最後に何か言い残すことはないか？』

「え！？いやいやまだ死にたくないですアヤメ様！」

様付けかよ……。

『そうか。聞くだけ聞いたからな。それでは、レッツゴー。』

ドルドルルン！！

「え！？本当にちょっと待っててあ~~~~~~~~!!!!」

……マホ、お前のことは忘れん

「勝手に殺さないでよー!」

「げほっ!」

腹に蹴りいれてきやがった……。

『ほう。まだ生きてたか。』

「あ……。」

それでまた追いかけてこ始まるわ、壁には穴が開くわ……。もういや。

騒動がおさまって、64億年後……。嘘。ごめんごめん麺ゴメーン……お願いだから殺さないで、この発言聞いても。知らん振りしといて。

実際には3分後。

「で、何する?」

俺が聞いた。と、ここでマホが言う。

「じゃ、魔界での遊びをしようよ!」

「はい?」『何?』

俺もアヤメもどんな遊びなのか想像つかない。
そこに、マホが言った。

「これだよ。」

どこから取り出したのか、ボードゲームを取り出した。それは、この星にもあるものだった。

「……これ、もしかして……。」

「うん、この世界じゃ、『双六』って言うらしいね。」

そう、双六。

と言っても、解読不能な文字ばかりだ。マホが訳さなくても遊べる、と言うが、これは地上の文字、言葉で遊べるようにしてあると言う。しかし、よく双六なんて言葉知ってるな。第一、地上の言葉がそんなに分かるのか？

そんなことを言うと、

「さっき、この辞書で全部覚えさせてもらったから」その中に双六もあつたんだよ。」

は？全部？

この辞書、まず相当な単語数あるぞ？一万はあるぞ？

「私の記憶力は魔界一だよ」地上の言葉も、魔界では少しは習ったし、理解は出来るよ」

……そりゃ凄いな。

俺なんて中学校の初めの一ヶ月間は、アルファベット覚えんのに精

一杯だったぞ？……比べるものが明らかにおかしいけど。

「じゃ、やるつか！これ持つて！」

渡されたのは、なにやら粘土状の物。

『おい、これで何を』

「いいからいいから、自分の持つてる粘土を見て！」

ズガン！

アヤメが撃った。もちろん銃で、そんなでもって人の頭は吹っ飛ばせるほどの威力のあるやつだし。

「ななななあ……。」

『人の話は最後まで聞けごみ屑。』

「わあい、見事に罵倒されたよ……。」

……頼むから、鳴きそうな声でそんなこと言わないでくれ。
え？誤字？そんなの知るか（ちよつと後でこつち来い。 by 作者）。

まあ、見ておくかということで、マホに言われた通りそれを見てみると、突如粘土が動き始めた！

「んなつ！」

「あ、落としちゃ駄目だよ。」

そう言われ、何とか落とさずにしたが粘土は動き続け、最終的に、

「……これ、俺そっくりだ。」

「ピンポン♪駒は自分そっくりになるよ!」

マホはそこで言葉を切った。そして、

「それで、この駒にもう少しで吸い込まれるから♪」

「『へ?』」

そう言った瞬間、目の前が真っ黒になった。

「………………。ここは…………?」

俺は目を開けた。

何も変わった様子はなさそうだ。が、周りを見ると、すぐ気づいた。

「…………んなあ!」

そう、『周りのものが大きい』。

いや、『自分が小さい』。

今じゃあの某文具メーカーの消しゴムより小さい。どこのメーカーかは想像に任せる!

「どどど、どういうことだよ!?」

俺は驚きつつも、さらに辺りを見回すと、マホが立っていた。

「おい、マホ!これどういうことだよ!?って、うわっ!」

マホに聞くために近づいたつもりが、どうやらあったらしい巨大なサイコロに引っ掛かり転んだ。うわあ、自分で言っちゃうけどこれ奇跡だ……。絶対引っ掛からないのに。
この癖、直らないかな……。

「……なんで転ぶのさ？」

「いてて……。知らないよ……。それよりっ！これはどういうことだ！？」

俺は、声を荒げて聞いた。

「だから、言ってるじゃん。駒に吸い込まれたって。」

『どうやら、そうらしいな。』

アヤメも言った。『超』巨大なハンマーを構えて。しかも、にっこりと笑って。明らかに作り笑顔だが。

『よくもこんな目に遭わせたな。では……。スラッシュ！』

「いやそれクラッシュの間違いじゃへべス！」

いやそこ突っ込むところかってゴギャツ！とばっちり喰らったし！
てか暴れるなアアアアアアアア！！！！！

皆が落ち着いた数分後。ふう、やれやれ。さてさて、俺は最も聞き
たかった質問をした。

「これ、どうやったら戻れるんだ？」

「決まってるじゃん、この双六をクリアすればいいんだよ！」

明るい声で言ったが、

『……いや、今しがた、マスに書いてある文字見たら凄いのが書いてあったぞ。』

アヤメがこんなことを言い出した。

「何だよ、凄いことって。」

『まあ、見てろ。今からその双六実際にやって見せてやるから。』

アヤメはそういうと、大きなサイコロを片手で持ち……、

マホに向かって投げた。

「ひぎゃー！」

避け切れなかったマホは、その攻撃を喰らう。

「な、何すんのよー！」

『さあ、何のことやら。というより、お前誰だ？……さて、うだな。』

「……うええん……。」

マホ、泣いちゃったぞ。どうすんの。

『さて、書いてあるのは……。』

って、完全無視？ひどすぎっしょ。

「うわああああん！！」

「うわっ！」

と思ったら、急にマホが正面から抱きついてきた。そのまま後ろに倒れる。痛いし、恥ずかしいし……。

「……お、おい、離れろよ……。」

そんな俺の悲痛（？）な声も泣き声でかき消された。
その時、

『……《猛獣に襲われる。勝ったら3マス進む》か……。』

アヤメがマス目に書いてある文字を読んだ。すると、アヤメの止まっていたマスの周りに檻が出来、いつの間にやら猛獣がその中に。猛獣は、ライオンの姿をしているが、全身真っ黒。怖い……。

だって、目を爛々と赤く光らせてこっち見ようとしてるって、すみません、食わないでください……。

……今、ばっちり目が合ったわ……。

『ほう。面白いな。』

アヤメ、良くそんなと言えるな。俺、もう気絶寸前と言うより昇天寸前。

そう思った直後、真っ黒ライオンは、アヤメに一気に迫った。しかし、

ドルルルン！

いつの間にか変形させたチェーンソーの起動音になり、

ザシュツ！

そのままライオンを横一文字で切った。

その軌道に沿うようにライオンの身体は綺麗に割れ、一瞬にして消えた。

《おめでとうございます。3マスお進みください。》

どこからか声が出て、アヤメは指示に従い3マス進んだ。次は、マホの番だが……。

「うつ……。ヒック……。」

大丈夫か？

てか、いつ泣き止むんだ？

「……………ヒック……。……よし、やるか！えい！」

うん、元気になった。立ち直りが早くてよろしい。さすが自由人。もう意味が違うと思うが問題なし。

そして、出た目は、2。

サイコロの目の数の少なさに不満を抱きつつマホが指示通りに進むと、

「《魔界生物が襲い掛かる。倒した数だけ先に進める》、か。面白そう」

すると、やはり檻で囲まれ、その中に五体の魔界生物が。全員が真っ白などろどろに溶けたスライムの形状をしている。正直、牛乳みたいだ。

「……中くらいの強さの部類の奴だね」。

マホが呑気にそんなことを言っていると、白スライム軍団（たった五匹だが）が襲い掛かってきた。てか、中級レベルなんだ、牛乳軍団（おいコラ。 by 作者）。

しかし、怯えることもなく、

「魔界術・十一 かざきり 風切！」

すると、マホの周りに不規則に吹く風が出来て、その風がスライムに襲いかかった。

風がナイフの如く、スライム五匹をプロの料理人顔負けの速さで（ま、スライムを料理する料理人など聞いたことないが）何等分にも分け、スライムと一緒に消えた。

《おめでとうございます。5マスお進みください。》

「……後で食べよっかな、と思ったのに……。」

……何か言いながらマホがマス進み、いよいよ俺の番に。マホが言ってたような言葉は忘れよ。てか、食えんの？
そう思っていると、

《人間には、これを着てもらいます。》

と、なんだかんだで（超アバウト）鎧を着せられ、剣と盾を持たせられた。

……中々格好いい。しかも、鎧も剣も盾も軽いし。全然支障はない。

「じゃ……、よいしょっと！」

俺は、今まで指で軽々と持ち上げていたサイコロを、人生で初めて両手で持った。重い。んで、投げた。

出た目は、4。

指示通りに進むと、

《雷が落ちてくる。避けられれば、6マス進める。》

いやいや無理でしょ。だって、今着てるの金属製だよ？確実に落ちるよ？

そうこうしているうちに、暗雲が立ち込める。

やべ~~~~~。

「どどど、どうすりゃ!？」

そして、手に持っている剣を見た。

……………。

これだ！

俺は剣を、持つ方を地面に刺し、伏せた。
すると、

ピシャアアアアアン!!!!

雷が落ち、避雷針代わりの剣がそれを全て受けた。よく受け止められたな。命を救ってくれた剣に感謝。

《おめでとございます。どうぞお進みください。》

ふう、危ない危ない……。

俺はさらに進んだ。

さあ、いつもより多く飛ばしに飛ばして、十回目!……面倒くさかったなんて言わないで。これでもまだ八分の一なんだから。全部書いてたらこっちの体が持たないって、作者が言ってるんだから（おいコラPart 2。 by 作者）。

で、今は、アヤメが62、マホが50、俺が49のところにいる。そして、次はアヤメの番だ。

サイコロを転がし、その数に沿って進み、出た目の数字を読むと、

《最強の黒魔導士が現れる。勝てば10マス進めるが、負ければスタートに戻る。》

そして、檻が現れ、全身を黒い服で纏い、杖を持った男のような者が現れた。てか、今思ったけど、条件厳しいなあ。さらに、魔導士は現れるや否や、

「魔界術・六十 風神雷神砲。ふうじんらいじんぱう」

直後、風が吹き荒れ、言わば『風切』みたいにナイフの如く切り刻みにかかり、その中に雷も混じっている。

「アヤメ！」

俺は思わず叫んだ。
しかし、

『……ふん。こんなもので私を倒せるとでも？』

アヤメが息をすつと吸うと、その風やら雷やらを一瞬で飲み込んだ。すげ。

『腹もいくらか膨れたし……、お返した。』

すると、アヤメが一瞬にして消え、

『機械流剣技・攻式其の一 乱竜。らんりゅう』

超高速で、両手を刀に変形させ、技名どおり、狂った竜の如く相手を通りすがりざまに一瞬で何千もの斬撃を喰らわせた。攻撃が終わると、黒魔導士は消えていた。

《おめでとございます。10マスお進みください。》

……しかし、今のは何だ？『機械流剣技』？……今度聞いてみよ。

「さて、私の番ね。」

と、ここまで進めたところで、俺はマホに聞いた。

「……マホ。」

「なあに？」

「何で、こんなにバトルが多いんだ？」

すると、少し驚きつつも言った。

「あれ？言ってなかったっけ？これは、修行用の双六なんだよ。」

「……。」

アヤメも聞いていたようだ。

これで理解できた。

これは、『弱い奴を遊びで強くしようぜ！』と言う目的で作られたものらしい。それにしちゃ、結構危険だぜ？

「じゃ、いっくよー！」

と、片手でサイコロを持ち上げ、投げた。

出た数字通りに進むと、そのマスには、

《3体のトリプル・ボーン・ザウルスが出現。一匹倒すごとに4マス進める。》

そして、檻に囲まれ、出てきたのは、

全身骨格のみで出来ている、例えるなら、ト。カ（注：あの某メーカーの作るミニカー）10000000000個分？（超アバウトっ
つーか分かりにくすぎ。 by 作者）

格好いいけど、結構でかいし、強そう……。

「むむ、結構強い奴だね。しかも3体。」

現にマホも言ってるし。

しかし、3体の怪物はマホに容赦なく襲い掛かる！

「……地獄を見なよ」

が、マホが突然笑顔でそんなことをいい、

「……《炎よ、人を、地上を、空を、星を、宇宙を……全てを焼き
尽くせ》！」

詠唱を終えた後、合計九つの頭がマホに襲い掛かろうとしている。

が、マホは怯まなかった。

そして、両手に膨大なエネルギーを一瞬で溜め、

「こんなの、中々喰らえないよ？私を入れても数人しか使えないし。
いろんな意味で幸運だね！」

明るく言った後、そのエネルギー弾を地面に叩きつけた。

「いや待て待て待て待て。」

どうした、首チョンパ郎？

「違うだろ！？俺の名前が間違えて」

はい、今度からお前『首チョンパ郎』、略して『チョンパ君』な。

「何でだよ！？つーか、いつの間にこっちに来た！？」

ついさっき。

てか、愛着あるな、『チョンパ君』。賢に教えよつと。

『とつとと消える。機械流剣技・基本式其の五 速殺^{そくさつ}。』

ギヤアアアアア！

・作者は奇声を上げてUFOにぶつかり（コラ待て）そのまま宇宙へと大進出した♪

ま、ぶつちゃけ作者を倒した！（超アバウトだつーの。何度言わせる。）

アヤメは1の経験地を得た（弱いなオイ）。

アヤメは『謎の物体X』を拾った。すぐ捨てた。僕悲しい（泣）ちなみに、謎の物体の正体はwebで（ねーよ）。

……という訳で、休日の一日目は終わりを迎え、次回は二日目。お

楽しみに〜。

『それは後書きで言え。』

どこでもいいじゃん。

『…………レーザー。』

目が！目がアアアアアアア！！

「最後まで目障りだった作者さんでした〜」

……………僕悲しい（泣）。

『もう一発レーザー。』

てかもう棒読みじゃねえかってギャ（以下略&ここからはグロイの綺麗な画像を見ながらお楽しみくださって画像ねーよ。というより、今回は作者の裏の声が多かったような…………。）

program 5 魔界式双六で遊ぼう！（後書き）

マホ「ところで、休日編二日目は何するのさ？」

教えねえ。

マホ「えーーーーー！！」

教えたらネタバレだし。

マホ「……そっか。じゃ、いいや。」

うん、さすが即決女。

secret program 1 タイトル変更のお知らせ

えゝ、このたび、タイトルを変えさせていただきました。

隼人「何でまた？」

前も言ったでしょ？話とかみ合っていないって。

マホ「このタイトルもどうかと思うけどねゝ。」

……うん、そこは無視してくれ。

マホ「牛？」

違う。虫。

賢「それも違う。」

隼人「お、時計読めない君だ。」

賢「お、チヨンパ君だ。」

隼人「……作者、てめえ教えやがったな？」

いや？僕じゃないよ？

アヤメ『ああ、それなら私だ。』

隼人「お前か！」

マホ「うわゝ。意外にやるね。てか、いつ教えたの？」

アヤメ『十分くらい前。』

賢「そうそう、こいつに教えてもらったんだよ、チョンパ君。」

隼人「……賢。ちょっとこっち来ようか？」

賢「は？」

……さ、あの二人はほつといて。

賢「ほつとくのかよ。」

マホ「ツツコミ鋭いね。」

アヤメ『……それで、お前はお前で覚悟は出来ているな？』

は？

アヤメ『決めたタイトルで最後まで貫き通さないとはな……。』

いや、だから理由は前の話を見れば

アヤメ『発射。』

ズドン！ズドン！パパパパパン！

ちょっと、撃ち過ぎってギヤアア（以下略）

アヤメ『すつきりした。』

マホ「見てて楽しかった〜！」

……それでは読者の皆様、これから応援よろしくお願いします。

アヤメ『生きてたか。もう一回。』

ズドン！バゴン！ドンドンドンドン！パパパパパン！

g（以下略）

s e c r e t p r o g r a m 1 タイトル変更のお知らせ（後書き）

次回は、ちゃんと本編をやります。

program 6 町案内と幽霊 前編！（前書き）

今回は長めです。

ぜひぜひ読んでいただきたいと思います。

program 6 町案内と幽霊 前編！

（隼人視点）

日曜日。

今日も昨日同様晴れてる。『マホが開けてくれちゃった穴』からは良く見える。

そして、その綺麗な空は、俺にとってはほとんど悪夢の始まりを告げる空にしか見えない。けど、それ以外にも、何か日常では体験できないようなことを体験できるという楽しみを増幅させてもいたが、今はそんな事はどうでもいいのであつて。

『おい起きろ。』

「……あと5分〜」

で、現在マホを起こしに行っているわけだが、中々出ようとしないしかも、甘えるような声で言う。

しかし、感情のないアヤメが、そんな声は構わずにマホの腹を殴りつけた。しかも、相当力を強くしている。こら痛いわ……。

「げほっ！？」

『……さつさと起きろ次は首と体が離れる大イリュージョンをしてやろうか？もちろんお前で。』

「いえいえ、とんでもございませんぬ！ちゃんと起きますぬ！」

もう日本語乱れてるし。

まあ、朝からあんな脅しされた上で『もう既にスイッチがオンされてついでにあと数センチで本当の大イリュージョンの道具となるチエーンソー』を見せ付けられたらそうなるわな、普通。

『残念だ……。』

……今、何か聞こえようによっては物凄い恐ろしい言葉が聞こえた気がするけど……。ま、いいや。

それからあらゆることが済んだ一時間後。

「……。」

『……。』

「ふわ……。」

今黙っているのが俺とアヤメで、大きく口を開けて欠伸をしているのがマホである。
それにしても、

「暇だな。」

『……。何かすることがないのか？人殺しとか。』

「それはやるな。」

「わー！面白そー！」

一人のつかってきちゃったし、この話に。本当にやめろ。
……。さて、何するかな……。

『なあ。』

「ん？」

『この際、この町を見て回るのはどうだ？』

この際って……。

でも、それもいいかもな。

「おう。いいよ。」

「賛成〜」

という訳で、町を歩くことに決定。

くマホ視点く

お？私の視点？やったー！

で、今はハヤトとアヤメで町を歩いてるんだ。人間世界の町ってどんなんだろ？

私の世界は、もっとう、ところどころ赤い液体で染まって、爆撃は一日に数百回はどっかで起こるような町じゃないけど。それで、最初に着いたのは、

『店が乱立しているな。』

アヤメが言った。確かに〜。
でも、

「ああ、ここは『商店街』って言ってな。店がたくさんあるんだ。」

シヨウテンガイ？……………ああ、『商店街』のことが！
辞書に載ってたな。

「とりあえず、何があるか見てみるか。」

「イエッサー！」

最近覚えた、私の最も楽しい単語、『イエッサー』。
それを言いながら最初に入った店は……。

あら不思議。そこら中に剣とか、銃とか、刺叉とか、しまいには何かわかんない機械がたくさん。

確か、店の名前は……『道具屋』。

えっと……。もうこれ道具ってレベルじゃないよね？武器だよね？
てか、法律になかったっけ？六法全書を読んだときに確か『銃刀法違反』、載ってたような気がするんだけど。

「……………ねえ、法律違反じゃないの？」

私が聞いた。でもハヤトは、

「ああ、この町、七星市しちせいしには『銃刀法違反』、『傷害罪』に関連する
ような言葉は通用しないから。ま、殺人は通用するけどな。」

え……………。

『それでいいのか？』

「いいんじゃないの？そうなってるみたいだし。」

いいんだ。じゃ、いいか♪

けど、アヤメの声が少し楽しそうに聞こえたのは私だけ？

「お、いらつしゃい、隼人！」

「おっちゃん。どうも。」

今ハヤトと話をしていて、禿頭で、少し太ったひげをたくさん生やした男の人が店長らしいね。服装はタンクトップに半ズボン。

「おっ！ガールフレンドも一緒かい？」

「そんなんじゃないよ。」

「嘘つけ！顔真っ赤だぞ？」

「はい？」

「ハハハ！嘘だよ嘘！」

……とにかく元気があるな。いいよね、こういう人♪

「で、名前は何ていうんだ？」

「私は、マホメット・オールドラン！マホって呼んでください！」

『私はアヤメだ。』

「なるほど。マホちゃんにアヤメちゃんだね？覚えておくよ！」

『で、お前の名は？』

「ん。俺か？俺はな……。」

……あ、アヤメが笑みを浮かべた。殺す気満々じゃん……。何で？それで、手をレイピアに変えて……。おじさんが危ない！でも、このおじさん、普通じゃなかった。

アヤメの不意打ちをあろう事か避けて、しかも後ろにあつた刀を鞘から抜き取って、そのまま身体を回転させて刃をアヤメの首の辺りまで持つていき、あと数ミリで切れるかどうかでとところでぴたと止めた。

「……アヤメちゃん、不意打ちは良くないよ？」

にこつと笑っておじさんが言った。怖つ……。

『知ったことか。』

と、アヤメは首の近くに迫っていた刀を手で掴み、そのままおじさんごと投げ飛ばした！つて、ここは店の中だよ！？

「とっ！」

でも、何か上手いこと手を床について、さらに手で床を押してそのまま後方にジャンプして見事に着地というオリンピックでやったら金メダルでもとれそうな受身をしながら見事に着地しちゃった。凄いい……。

「ハハハ！ざつとこんなもんよ！」

『……何が何でも殺してやる。』

つて、アヤメがもう手を超巨大マシンガンに変形させちゃってるし！
まずい！？

『発射。』

「ああもう！魔界術・八十五 てんさくへき 添削壁！」

この魔法、壁を一時間の間だけ出したり消したり出来るんだ。出すところは、壁からだろうが、床からだろうが、空中でも出来るんだよ。

で、そのマシンガンの前に床から壁を出現させて、乱射攻撃を防いだの。ふー、危ない……。

『……そうか。まずは邪魔者から……。』

「はい、そこでストップだ。じゃないとアヤメ、お前刑務所行きだぞ？」

『……ちつ。』

いやいや、何で舌打ちしたのさ？

という訳で『道具屋の名を騙る武器屋』を後にした私たちでした♪

しかし、

「ねえ、何でさっきのおじさんといい……、って名前聞くの忘れてた。」

「ああ。本条^{ほんじょう}充^{みち}だ。」

「……で、ホンジョウさんって、何であんなに強いの？」

尤もな質問を、私はした。

「ああ、それはこの町、七星市が『戦闘の異常発達してる町』だからな。」

……。
えっと、それって、つまり……、

「この町の人って、皆あんな感じ？」

「皆が皆って訳じゃないけどな。とりあえず皆が何かしらの格闘技を習っていたり、何かしらの武器が上手に使えたりとちよつと変なんだよ。だから、仮に別の町の暴力団がこの町来ても、暴れるどころか脅しも出来ないって訳だ。逆に半殺しにされて終わりだ。」

「だから、さっきの本条とやはあんな咄嗟の判断が出来たんだな。」

「まあな。本条さんは、因みに言っておくと、この町では屈指の実力者だからな。」

そうなんだ。すつごいところ来ちゃったな（汗）

まあ、退屈しなくてすむかな。」

で、次に私達が向かったのは、食べ物がたくさん並んでいる店。店の名前が、『虫食われ屋』。

いや、だから、もっとましな名前付けようよ、ねえ？

「あらあら、いらっしやい。」

店に入って真っ先に私達に気づいたのは、この人がこの店の店主みたいだけど、和服を着て、長い艶のある黒髪を持っているおしとやかな美人さんだった。綺麗……。

「おう。平野さん。」

「あら、今日は誰を連れてきてるのかしら？」

「うーん、まあ、居候みたいな感じの奴らだ。」

居候？まあ、あながち間違いじゃないけど。

「それで、何の用かしら？」

「ああ。これを頼むよ。」

と、メモ用紙を取り出した。何か書いてある。

「ああ、はい。ちょっと待っててね。」

と、奥の方へ消えていった。きっと商品を取りにいつてるんだろうな。

『おい、あいつは強いのか？』

アヤメ、どれだけ人を殺したいのさ？さっきから異常行動連発してるし。

しかも久々に口を開いたと思ったたらそれだし。

「ああ、やめとけ。ああ見えて町に来た百人くらいの大暴走族グループを一つ、五分足らずで相手の骨を折るわ、顔面は原形を留めてないわ、おまけに全身傷だらけになるまで『右手だけ』で『一人』で『全滅させた』ほどの猛者だからな。しかも、戦い中もずっと笑顔だったとか……。」

こわ……。

というより、暴走族を一つ全滅させるって……。しかも百人。しかも五分。しかも右手のみ。

この町の住人って一体……？

「はい、おまちどうさま。」

にっこり笑顔で商品を渡すヒラノさん。でも、その笑顔が逆に怖くなっちゃった、私……。

そう簡単に殺せないであろう事を身をもって知らされたアヤメも、今回は諦めた様子。

「ところで、何買ったの？」

ああ、といって見せてくれたのは、食べ物だった。野菜とかチーズとかその他諸々。おいしそ〜」
もう冷蔵庫の中身がなくなったから買ったんだとか。何作るんだろ？でもそれ以前に、まずこの店の名前を変えたほうがいいと思った私でした〜……。

それで、三件目のお店」

何か、先端が黒色で先のとがった棒に、白い四角形のものが紙みたいなので包まれていたり、プラスチックの板に数字とかが書いてあったり……。そんなものがあるお店。何これ？

「これらは、総称して『文房具』っていう奴だ。」

ああ、じゃあこれは鉛筆に消しゴムに定規か。
でも、店の名前が『○×』ってどういうこと？うん、伏字じゃなくてこれが店の名前。読み方が『三つの図形』ってそのまんま。この町の人って、ネーミングセンス悪いね……。言っちゃ悪いけど、例によって店主を呼ぶハヤト。

「おい、菊池さん〜。いるか〜？」

「……はい……。」

「ひゃあああああああああ！！」

なななな、何この人！？てか、人なの！？

前髪を顔が覆われるほど伸ばして、全身を『赤い液体』のついた白い服で纏い、おまけに頭にあの死人のつける三角形のやつ（あれ何て言うんだろ？）をつけて……。もう叫んじゃったし……。

とにかくイメージは、日本の『幽霊』そのもの。

「……おい、離れてくんねーかな？」

へ……？はわわわわわ……！！！！

「ったく……。で、菊池さん。カッターナイフください。」

『……あいつでいい。クロス。』

アヤメ、壊れてる？怖いからやめて……。

「だから、この町にいる人は大体強いから止めとけて。」

「はい……。どうぞ。」

「おお。ありがとう。」

で、次の瞬間、

『……乱射。』

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダ！！！！！！！！！！

ひゃ~~~~！！！！

轟音が！轟音が！！

「……。」

……。でも、キクチさん、無言で定規を取り出して、弾丸を全部はじいちゃった！見かけによらず凄い！

「……私、昔はボクサー……。」

……なるほど。動体視力がいいわけだ。でも、ここまでの動体視力はかつて見たことはありません。

『なるほど。』

納得してるし。これでいいならいいや」

そして、その後も商店街を見て回り、散々この町の人々の凄さを実感させられ、それで商店街を出て別のところへ行くことになったんだけど……。

その時に通ったのが、

「……幽霊屋敷、か……。」
『幽霊？』

ああ、とハヤト。

確かに、幽霊屋敷と呼んでもおかしくはなかった。
薄汚れた壁に、割られた窓、ぼろぼろの屋根に、焼けたドアなどな

ぶ回数は少ない方らしい。
で、何に躓いたかというところ。

木切れでも、溝でも、石でもなく、

『人骨』だった。

「……ふえ……」

と情けない声を出しながら仰向けに倒れたのはマホだ。目をくるくる回し、顔は青ざめている。

「おい、マホ!？」

ハヤトが近寄るが、失神しているマホは当然返答せず。

『おい、どけ。』

アヤメの声が後ろから聞こえた。

彼女の手は、まさにロボット、という感じの手に変形している。

「……何するつもりでございますか？」

思わず敬語で聞いた隼人に、

『治療だ。』

といってその機械の手をマホの胸の辺りに当ててやる。
そして、

『電気ショック（1000000V）』

やばめの単位をアヤメが小声で言ったのと同時に、

「……………ギヤニヤ……………!!!!!!」

大声を上げて『少々荒い治療のおかげで復活を果たした』マホは飛び上がった。

冒険、強制再開。

「うっ……。痛い……。」

と、胸の辺りをいまだにさすっているマホ。よほどさっきの電気ショックが痛かったらしい。

『ああでもないとお前は起きないだろ？』
「そうけどさ……。」

で、今は建物の扉前。

錠前は、金属がさびて既に壊れていた。

『よし、突入するぞ。』

「おお。」

「……痛い……。」

『そんなに痛いなら今すぐ楽にしてやるぞ?』

「いや、いいです。ですからチェーンソーだけはしまってもらえませんか?」

アヤメは脅したい放題脅した後、二人を強引に引き連れて入った。で、扉は『開けるのが面倒だ』ということで蹴って扉を飛ばした。

内部は外観以上に不気味だった。

蜘蛛の巣はそこら中に張り付き、床はところどころ腐って落ちていて、窓ガラスが割れて床に散乱しており、そしてシャンデリアであったであろうものはもう原形を留めていないほど酷かった。

「……よし。」

何がよいのか、マホは軽く詠唱をした。

「出でよ、死の神よ……。死紙^{しにかみ}!」

すると、突然異次元の世界へ通じているであろう穴が現れ、そこか

らひらひらと大人の男の大きさくらいの紙がひらひらと床に向かって落ちた。

『……失敗作か。』

「違う！これがそうなの！」

「この紙が？」

《ケケケ、誰が紙だつて？》

と、突如どこからか声が聞こえた。
当然、その紙からだ。

「んなあ！……紙が、喋った……？」

《だから、おれっちは紙じゃねえっつの。》

『だったら、燃えないよな？』

と、火炎放射器で紙を焼き始めたアヤメ。
しかし、

《ケケケ、そんなもんじゃ、おれっちは燃やせませんか？》

と、『燃えているにもかかわらず、平然としている』。

《で、何の用だ、マホメツト。》

「……いや、見れば分かるでしょ？あなたにとっては穴場よ」

《……ケケケ、確かに、うまそうな魂の匂いだな……。》

と、ここでもうやく立った（どういう原理かは分からないが）死紙。
そこには、子供が描いてそうな骸骨の絵があり、人は軽くばっさり
切れそうなほどの巨大な鎌を持っており、手なのか、鎌をそれで支
えている長方形の紙のような物質が本体の横をふわふわと浮いてい

た。

今までの言葉を察すると、『ケケケ』が口癖な様子。

《ケケケ、じゃ、仕事だ。》

と、次の瞬間。

『ガアアアアアッ!!』

咆哮と共に現れたのは、右半分腐って、左半分生身のライオンだった。その腐っているか腐っていないかの分け目のラインがくつきりしている。それが3体。

《ほいじゃ、仕事だ。……ハッ!》

と、長方形の紙らしき手を地面にふわっと乗せた。が、次の瞬間、そこから黒い剣の形をしたオーラが数十本、床から突如出現し、

《ほな、さいなら!》

と、再び手をふわっと床から離すと同時に、黒い剣は3体のライオンへと刺さっていく。

……が、どういうわけか、それでも『死なない』。

『ガルルルル……。』

牙をむき出しにし、威嚇体制に入っている半身腐乱のライオン3体。そして、

『ウガアアアアッ!』

とうとう襲い掛かってきたライオン。しかし、

『……ふん。』

ここでアヤメが手を『透明な剣』に変形させた。そして、

『消え去れ。機械流剣技・攻式其の十二 肉砕き。』

一瞬前、形を保っていたライオン3体は、
一瞬後、その全てが細胞レベルまで粉々に。

『……こんなものか。』

「……おいおい、これはやりすぎじゃねーか？」

隼人が口を押さえながら言った。

《ケケッ、ご馳走》

そして、その細胞から出た3つの青白い光の球が、俗に言う『魂』らしい。

死紙はそれを、

《いただきます。》

吸った、らしい。

3つの魂はそれに答えるかのごとく紙に吸い込まれていった。

《ささ、次行こうぜ。》

と、自分ひとりふわふわと飛んでいった。

それを追う三人。

だが、なぜか『あらゆる手を使って』アヤメに打ち落とされたのは別の話ではなく、関係ない話。

その頃。この屋敷の二階にあるとある部屋では、一人の少女が古い椅子に座って本を読んでいた。

歳は十五、六といったところか。髪の毛も長く、黒い。顔立ちも整っていて、美人といえるだろう。が、肌は有り得ないほど白い。服は白色を際立たせるような、血の色、赤。

……因みに、本のタイトルはあまりにもおぞましいので伏せておこう。

「……ふふ、そろそろ侵入者どもを遊んであげますか。」

少女は間延びした声で言った。

そして、ドアを『抜けた』。

別にドアが開いているわけではない。『閉まっている』。

つまり、彼女は言うまでもなく『幽霊』なのだ。

が、足はしっかりあるようで、それを使ってぺたぺたと廊下を歩いていた。

三人は、二階に来ていた。
一階と同じく、結構古ぼけている。

「……今にもお化けが出そう……。」
「……人の袖掴むな。」
「だって怖いんだもん！」
「……ああ、そうですかい。」

マホが、隼人の袖を掴んで、周りをきよろきよろさせながら歩いている。

「……仲良いな。」
「なっ！アヤメ、いきなり何を……。」
「冗談だ。」

アヤメが珍しく笑みを浮かべながら答えた。
それも、嫌な感じの笑みではなく。

「ところで、アヤメ。」
「何だ？」
「あの透明な剣、何だったんだ？」

そう、あのライオン共を切り刻んだあの透明な剣のことだ。

『あれは、『幽霊殺し』^{ゴースト・キラー}といつてな。幽霊を撃退する力がある。ただ、ゾンビとかの類以外の『しつかりと生きている』奴には全く効果はない。逆に言えば、『一度死んで生き返った者や、幽霊』には効果抜群って訳だ。』

「へへ。で、どこで手に入れたんだよ？」

『とある星から奪ってきた。』

「はあ!？」

……とまあ、こんな感じで会話を進めつつ歩いている三人と『一枚』だった。

program 6 町案内と幽霊 前編！（後書き）

後編へ。

……幽霊とのバトルもあります。

program 7 町案内と幽霊 後編！（前書き）

後編です。

program 7 町案内と幽霊 後編！

（作者視点）

『私は、要らない人間……。』

ある少女の回想。

『皆からは無視され、』

苦しみの感情を。

『いじめられて、』

悲しみの感情を。

『もう、いや。』

この、高層ビルの屋上でしか言うことの出来ない少女。

『だから、』

そして、

『私は、』

その日課も、

今日で終わる。

『死ぬ。』

「……………嫌なことを思い出しました……………」

そして、有り得ないほど白い肌を持ち、赤い服を着た少女は、その廊下を歩いていた。

「……………おい、いつになったら離れてくれるんだよ？」
「……………」

怯えるだけで声も出せないマホは、さっきから隼人の袖にずっと掴まりっぱなしだ。

『……………緊張感、ゼロだな。』
《言っとうりだな。》

アヤメと死紙はそんな姿を見てあれこれ話していた。

その時、隼人の足が隣にいたマホの足にぶつかり、そのままぶつ倒れてしまった。
当然、マホも。

「痛っ！」

「ぎにゃ！」

そして、二人仲良く埃^{ほこり}だらけの床に顔面強打。これは痛い。

「げほっ！埃が肺に入った……。」

「それって、ダジャレ？」

「あ？何が？」

隼人は、全く気づいていない様子。

が、そんな会話を打ち消すものが現れた。

「……あなた達ですね。この屋敷の侵入者は。」

人間とは思えぬ白い肌に、血の色に染まった服。元は制服だったであろうその服は血の色だった。

『侵入者……？』

「はい。なぜならここは私の屋敷ですから。」

《……こいつ、かなり危険だ。》

死紙、もとい、死神が言うのだから間違いないだろう。

今、隼人たちの目の前にいるのは、れっきとした『危険人物』。

いや、人物？

「……お前、本当に人なのか？」

隼人が少女に聞く。そこで、隼人は考える。

それもそのはず。電気もなく、水道もなく、掃除もせず、食べ物もない。食べ物は買えば良いだろうが、扉前の草むらや腐った木を見れば、外に出ていないことは一目瞭然。

仮に、外に出るため一階の窓から行こうとしても、床は腐り落ち、ガラスの破片がたくさんある中で、裸足で歩いたら怪我をするはず。それがない。さらに二階から飛び降りようとも、下は人通りの多い道路だ。車もたくさん通ってるし、歩道もない。まず間違いなく轢かれるだろう。

そもそも、こんなところに住む必要があるのか？ここは、戦闘は異常発達しているが、商店街を見て回って分かったように人情が厚い人たちが多い。何とかしてくれるはずだ。そこまで考えると、一つの仮説が浮かび上がる。

こいつは、人間ではない。

「そうですよ。私は、人間ではありません。」

間延びした声で相変わらず答える少女。

しかも、隼人は、さっきの仮説は『言っていない』。人の思考を呼んだとは思えない。

「だって私、今『シンキング・リーダー』を使ってますから。」

《シンキング・リーダー……。聞いたことあるような……。》

「ほら、あれだよ、『思考読み取り能力』！」

《さすがは記憶力抜群少女だな。おいらには真似できねー。てか、それって魔術？》

「……うん。でも、私のとは種類が違いかも。」

「分かっていれば話が早くて助かります。では……。」

その瞬間、自らの手にエネルギーを溜め始めた。
溜め終わると同時に、

「ダーク・オーラです！」

あいもかわらずそんな声で言ったが、撃っているものはかなり凶暴だ。

とにかく、黒いオーラが隼人たちに迫る。
が、

「魔界術・四十二 じゅうちふつか 重直下！」

発動した途端に、オーラは急に真下へ移動。そのまま床を突き破った。

どうやら、重力を強めて、下に落下させるスピードを速めたり、無理矢理下に引き摺り下ろす魔法らしい、が。

真下に向かって攻撃したオーラのせいで、床は破壊され、二階は崩壊。当然、全員が一回の床へと叩きつけられることとなった。

「いった！」

マホ、自分でやるときながらそれはないだろう。

「こつちが痛いわ!」

『……後で、朝から引き伸ばしておいたイリユージョンを見せてやるから覚悟しなさい。』

《ケケケ、さすがに強いぜ……。》

そして、あの少女は。

「……………ク……………」

木や金属の瓦礫の中から、声がした。

「……………クク……………クククク……………」

それは、狂った笑い声だった。

「クククハハハハ……………ハハハハハハハハハハハハ!」

少女は、少し容姿が変わっていた。

黒だった髪が赤く染まり、瞳の色も、怪物の目のような、赤。

少女が、いつそう不気味に見えた。

「ここから出てけよ、侵入者。」

真面目な声での第一声はそれだった。

どうやら、勝手に人の家に入ったのだから、今すぐに出て行け、という腹なのだろうか。

「……………何だよ、お前、全くの別人じゃねえか……………」

「そうさ、俺は今は、カゲロウじゃないんだぜ！」

「カゲロウ……？」

隼人が首を傾げる。

「何だよ、聞いてねえのかよ。こいつの名前は『カゲロウ』って言うんだよ！」

さつきと様子がまるで違う。

間延びしていたはずの聲が、急にはきはきして、「です」、「ます」も使わなくなった。

一人称も、「俺」になっている。

「ハハハッ！俺こと『サクリファイス』はこいつの身体を借りてるだけさ！つまりは『二人で一つ』ってところかア！」

「二人で……。」

『一つ……？』

マホとアヤメも首を傾げていた。

「そうさ！普段俺は暴れないように意識の奥底にいるんだが、血が騒ぐと出てきちまうのサア！」

さつきとは打って変わった声で言い続ける。

「さて、お話もこのくらいにして、っと。」

少女カゲロウ、いや、『サクリファイス』は両手を空中へと翳した。

「終われ！ダーククレイン！」

サクリファイスが両手を振り下ろした瞬間、一気に数百本の槍状の闇エネルギーが上空から無差別に襲い掛かる。

それらは床に突き刺さっていき、当然隼人たちにも襲い掛かる。

『……私には問題ない。』

「ずるゝ！」

《同感だ！》

アヤメは直立不動のまま体だけで槍をはじき、マホは迫り来る槍を死紙と一緒に剣と鎌で一本つつ打ち落としていき、

「うわつと！」

隼人は為す術もなく避けているだけだ。

隼人は当然、戦闘に関しては何の特技も持たない。

避けて避けて、その後には床に槍がドスツと突き刺さる。が、とうとう何十本もの槍が一斉に襲い掛かってきた。

「やっぱ……。」

そこで、隼人は床にあった窪みに躓き、転んでしまった。

「なっ！」

が、幸運にもそのおかげで槍を全弾避けられたのだ。一ミリでも転ぶ位置を誤っていたら、終わっていたであろう。

周りには、なにか禍々しいエネルギーで形成された槍状の物質。こんなのに刺さったら、と思うと隼人は身震いが止まらなくなった。

「キヤハハ！隙だらけだぜ、少年！」

と、サクリファイスは隼人の右足を狙ってなぜか飾ってあった鎧から剣を抜き、刺した。

当然、隼人はそのまま皮を裂き、肉を裂き、骨を砕き、赤い鮮血をあちこち飛ばしながら足の貫通という激痛に苛まれることになる。

……はずだった。

「何故だ！どうして刺さっていない！？」

そう、剣は隼人の右足を避けるようにグニヤリと変形していた。しかし、サクリファイスより、刺されそうになった右足の所有者、小倉隼人のほうが驚いていた。

（何で刺さらなかったんだ？偶然にしちゃ出来すぎている。……何なんだ？）

だが、サクリファイスは容赦はしない。

「ははっ！そうなりや身体を真つ二つに……！」

と、剣をそのまま隼人の身体へと持っていったが、わずか0・1秒

で剣は粉々になった。

「……………何故だ！？何故……………」
「……………」

隼人の方は、初めて死に直面したためかそのまま凍り付いている。

「ハヤトから、」

マホは、『黒色鎌』をサクリファイスに向かって、

「離れてー！ー！」

振り下ろした。

「そう簡単にくたばるかよ！」

そう言い、本当に突然にサクリファイスの手の中に、刃が真っ黒に染め上げられた巨大なチェーンソーが出てきた。

「はっ！」

「ヒャッハア！」

二つの武器はその刃を交えたが、

チェーンソーがスパッと刃を切ってしまった。

「嘘!？」

「ほらほら!」

そついい、マホに向かってチェーンソーを振り下ろす。
もうだめだ、とマホが死を予感したその時、

ガガッ!

.....。

「..... ななな、なあ.....。」

『貴様のチェーンソーと言うのはこの程度か?』

アヤメが素手でチェーンソーの刃を掴み、そのまま無理矢理に回転を止めた。その手の外傷はゼロ。

「嘘だ!これはデスサイズだぞ!切れぬものはない!」

『またそれか。』

はあ、とため息を吐いたアヤメは、すぐさま手を日本刀に変え、

「そろそろ、終わりにするか。」

「はっ!終わりにするかよ!この戦いは、俺が犠牲になっているんだからな!勝手に死んだらカゲロウも死んじゃうぜ!」

sacrifice.....サクリファイス.....犠牲。

そう。これはカゲロウの『犠牲』に自らがなつて戦っているのだ。

彼女を、傷つけさせないために、自分の力で身を護り、

二度と、彼女が虐められないように、相手を自分の強さでねじ伏せ、少女を虐めて死に追いやったこの世界を相手にする。

そういつ、約束を……。

「……約束を交わしたんだア！」

『知るか。てか、何の約束だ。』

思わず声を出したサクリファイス。その目は『怒り』が宿っていた。そして、両者の剣がまた交える、はずだった。

『この刀が切られても仕方がないしな。機械流剣技・攻式其の四
致死斬。』

そして、一瞬で懐に入り込まれ、刀は右上から左下へと、カゲロウの身体を引き裂いた。

倒れながら、サクリファイスはカゲロウの口を借りて呟いていた。

「俺が、」

こいつを自殺に追い込んだ、

「こんな、」

そんな人間のいる世界。

「奴らに……。」

そんな世界から、俺は彼女を護ると決めたのだ。

「く、そ……。」

だから、わざわざ身体まで借りてもらったのに。

「それなのに……。」

勝てなかった。

俺は、駄目だな。最低だ。

「ごめんな、カゲロウ。やっぱ、死ぬみたいだわ。」

そっ、最後の言葉を呟いた。

はずだったが、

『いつまで寝てんだ、起きろ全身赤女。』

アヤメはサクリファイスの頬をべちべち叩いて起こした。

「……？死んでない……？」

『当たり前だ。殺したら法律とかで厄介なことになるらしいからな、
つたくこの国は面倒くさい。だから、峰で思いつきり肩を殴ってお
いた。』

そう、『刃』ではなく、『峰』で攻撃したのだ。

「まったく、そもそもお前らがこんなところに来ようぜ、とか言っただ方だろ。」

「お前ら、つて、私も!？」

『いいじゃないか。家族なんだから。』

「よくない!」

「てか、お前らを家族と認めた覚えはない!」

「住んでる時点で家族だもん!」

「それは居候って言うんだよ!」

膨れっ面に対抗しようとするマホに、『風船みたいに顔を割ってやるつか』と日本刀で脅しをかけるアヤメ。それを止めようとして、躓いて転んでしまう隼人。

そんな和やかな場面を見て、思わずサクリファイスは笑ってしまった。

「なあ、カゲロウ……。」

サクリファイスという、もう一つの人格は、

「世の中にはこんなに面白い奴らがいるんだぜ?」

カゲロウという、護ると決めた存在に、話しかけた。

「……でも、もう少し、お前が前を見て生きてたら、双方ともこんなに痛い思いはしないのにな。」

(……すみません……。)

カゲロウが、自分を護ってくれた存在、サクリファイスに話しかけ

た。

「ま、いいや。おかげで久々に楽しめたし。よしとしようや。」

(……でも)

「うるせえな。お前は『死ななかった』。お前の意識下ではこの身体は『傷も付けられなかった』。これ以外の何が不満なんだ？」

(……でも、サクリファイス、あなたは傷ついた。私が、弱いばかりに……。)

「……お、おいおい、泣くんじゃねえよ。こんなところで泣くから自殺なんてしちゃうんだよ。だから、お前も人生は前を向いて歩け。少なくとも、あんな連中とも会えるんだからな。自分が弱いとか、たわけた被害妄想言ってんじゃねえよ。本当は人間は皆弱い生き物なんだ。」

(皆、弱い……ですか?)

「ああ。だって虐めてきた奴らも自分より強い奴には絶対あたらない。極端な例だが、生まれて間もないただの赤ん坊が超巨大な怪獣にタイマンで勝負しかけるわけネーだろ？」

(確かに、そうですね……。)

「虐めてきたやるも皆同じ。こんな感じに弱い奴しか責められない『精神が弱い人間』なんだ。完璧に強い人間なんていねーんだよ。分かったら、人生を前見て歩け。分かったな？」

(……はい。)

「もっと元気な声で。」

（はい！）

「よろしい。」

そして、笑みを浮かべた後、

「んじゃ、おやすみ。」

そして、ぷつりと意識が入れ替わった。

「……あれ、あなた達何してるんですか？」

「………え？戻った？」

「はい。」

『よし、今から復讐のために殺すからちょっと待ってる。』

何だと！とサクリファイスは意識を入れ替えようとしたが、

「やめて下さいよ！」

『待て。』

……危険ながらも、そんな平和（？）な様子を見てたら、何故か馬鹿馬鹿しくなってきた。

はあ、とサクリファイスは意識の奥で一眠りすることにした。

「……で、」

『で？』

「これ、どうすんの？カゲロウの住処、消えちゃたよ？」

マホが言う。

そう、さっきのバトルで、二階はおろか、一階までもが壊滅状態。もはや人は愚か、人ならざる者も住める状態ではなかった。

「……いやゝな予感がするのは俺だけか？」

で、当然その予想は大当たり。

「……あなた達の責任ですから、住まわせてくださいゝ。」

「……また増えんのか？」

『入れてやれ。』

「何で命令口調！？そもそも壊したもとの原因となつたのはカゲロウだろ！？」

「でも、二階を破壊したあのオーラはバリアーなりで防げばよかったんじゃ？」

「……、逃げる！」

「あ、待て！マホ！ってうわっ！？」

『もう諦めろ。』

……という訳で、数分後になんだかんだで居候三人目決定。とりあえず、警察が来る前に家に帰ることにしたのだった。

program 7 町案内と幽霊 後編！（後書き）

という訳で、三人目の居候。

隼人「これ以上増やすと、金銭問題以前に問題が……。」

ま、同棲に等しいからね。しかも全てが強引に。

隼人「作者のせいだろうが！」

はいはい。

隼人「適当に受け流すな！」

はいはい。

隼人「……もういいや。」

さて、次回は学校生活……のはず。

隼人「しっかりしてくれ（汗）」

program 8 犬? (前書き)

アヤメ『……人を殺す。』

おい、初っ端から何を

アヤメ『マシンガン。』

ぎゃーーーーー！

program 8 犬？

（隼人視点）

幽霊屋敷騒動の夜。

また一人、居候が増えた。

「居候って言わないでくださいよ。」

「ああ、って何で思考が読めるんだよ？」

……そして、この間延びた声で話すのが、新居候、その名もカゲロウ。

「魔法ですよ、魔法。」

「魔法？」

そう、この能力も魔法によるものだというが……。

《ケケケ、それはおれっちが説明させてもらっぜ。》

「あ、まだ帰ってなかったんだ。」

《ああ。》

そして、明らかに紙そのものである死神、死紙は語り始めた。

《そもそも、魔法が大きく分けて二つの派閥に分かれてるのは知ってるか？》

『全く分らない。』

「俺も。」

《じゃ、言っけどさ……。『陽』の魔法と『陰』の魔法だ。》

「陽と陰？」

ああ、と死紙はそのまま言葉を続ける。

《で、『陽』も『陰』もそんなに変わりはないが、邪氣、って言うんかな、それが微妙に異なる。》

「それで、『陽』の魔法は『陰』の魔法よりは人を殺すような魔法はないって事。私が使っているのは、今から二百年前に現れた『中性』の魔法って奴だよ」

『中性？』

《まあ、『陽』と『陰』が合わさったような、ちょうど邪氣が打ち消されてるような感じた。陽の方は、邪氣とは逆の『氣』があるからな。まあ、数学で言えば、『陽』が+1、『陰』が-1って考えれば簡単だ。足せば0だからな。そのちょうど0になっている魔法が『中性』の魔法だ。ま、人を殺すような程度ではないというだけだな。》

マホも途中から加わり、説明を続ける。

「じゃ、『陽』の魔法ってどんなんだよ？『陰』は人を殺すようなもんだろ？」

「そう。でも『陽』は人に危害は加えるけど、人を殺すまではいかない、それが『陽』。」

『でも、それなら『陽』と『中性』は変わりないんじゃないか？』

《ケケケ、それは違うぜ。あくまで『中性』は『陽』と『陰』が混じってるからな。言い換えれば、『陰』の魔法の力だって宿ってるわけだ。だから、威力の問題さ。『中性』の方が『陽』よりは強いんだ。》

なるほど、とアヤメは納得しているが、俺は早くも知恵熱を起こし

そうだった。

「で、私が使っているのはさっきの説明にあった『陰』の魔法なんですよ。」

「で、でもよ、何でカゲロウは魔法が使えるんだ？」

《……サクリファイスが魔人だからだ。》

はい？と俺は聞き返す。

「だから、あのサクリファイスは魔人だったって事。確か、大陸を占領したかなんかで即刻死刑になった奴じゃなかったっけ？」

『……そんなに凶悪だったのか。』

《ケケケ、まあな。さて、一通り説明は終わりだな。》

「ちよつと待てよ。魔法を使うのに、何かこう、力みたいなのは使わないのか？」

《……それは、魔力のことか？確かに必要だ。魔力が多ければ多いほど魔法はたくさん使えるしな。だが、使いすぎると自らの身が破壊する。》

「で、魔力の補充に必要なのは大抵『食事』とか、あとは魔人とか魔女にもよるけど、例えば熱とか、光とか睡眠とか。私の場合は、

『室素』だね。」

「室素？」

「うん、私の体質は『室素』が魔力の補充源になるらしいんだ。最も、魔力を持つているだけで後は人間と同じだから食事、睡眠は必要なんだけどね。」

「……それって、お前は这个世界では常に魔力を補充しているって訳か？」

「うん。でも、魔界と地上はやっぱり全く違うから、自分の身を護るのには魔力が必要なんだ。でも、这个世界では私はいつも膨大な魔力を補充できるから問題なしだよ。」

……こうして、一通りの魔法の説明、終了。
死紙は帰っていったらしい。もう姿はなかった。

さて、この後は食事を取り、風呂に入り、睡眠をとった。
が、就寝時に俺はひとつ気に掛けていることがあった。そのせいで
今はまだ眠れていないのだが。
あの幽霊屋敷の一戦で、俺の右足に向かって剣がサクリファイスに
貫かれそうになった時。

どうして、あんなに剣が変形したのだろうか？
そもそも、身体を引き裂く前に剣が粉微塵になることなんて有り得
るのか？

「……………考えても仕方ねえ。明日も早いし、寝るか。」

でも、俺はそれは後で考えることにした。

翌日。

つまり、学校に久しぶりに行く日だ。
というわけで早速朝食を食べるなり、制服に着替えるなり、学校の
授業の用意をしたりした。

『…………おはよう。』
「おお。」

昨日の戦いでエネルギーを使ったのか、少し気だるそうなアヤメ。
てか、ロボットもこんな感じになるんだ……。

『…………後二人は？』
「まだ寝てるはずだけど？起こしてくれないか？」

ああ、とマホとカゲロウが寝ている場所へ行った。
……そこで、『銃声らしき音』がしたのは無視しよう。

「…………朝から酷いですよ、アヤメさん。」
『うるさい。』
「…………ふわ…………。」

カゲロウとマホは淒く眠たげだ。
……………「まったく、俺の方が眠いっつの。
さて、食つか…………。」

十分後。

「んじゃ、行ってくる。」
『ああ。』
「いってらっしゃい。」

という訳で学校に行くことになったが、今日の学校生活も楽ではな

いことをこの後知ることとなる、嫌でも。

くカゲロウ視点く

……暇ですわ。

本当にすること無いですわ。

「それで、何するんですか？」
「知るか。」

と、そこにマホちゃんが、

「……ねえ、いい考えがあるけど、カゲロウ、あなた『ノット・フ
アインド』使える？」
「もちろんですわ。」

何するんでしょう？

あ、因みに『ノット・フアインド』は、相手の視界から八時間の間
姿と声を消してしまう魔法ですわ。でも、足音や体の感触は残るの
で注意が必要ですわ。

そして、これを使っているもの同士、又はこの魔法の使用者が『姿
も声も見せていい』と思った他人に見られることが出来ますわ。

「じゃ、作戦決定わ」

『何だ、作戦つて。』

「ちよつと、こつち来て。」

と、マホちゃんが話し始めました。

.....。

『……いいな、それ。』

「面白そうです。」

「じゃ、早速やって！」

「はい。」

作戦、決行です！

そついや、テレビつけっぱなしで、大丈夫でしょうか？

『……繰り返します。昨日午後十二時、ある男から「道路とかが何者かに食われている」と通報があり、警察が駆けつけたところ、数百箇所にわたって何者かにりんご、枝、ベンチ、拳句は道路やガードレール、線路まで何者かの食いちぎられた後がついていました。警察は事件性があると見て現在も慎重に捜査を進めています。では、お天気です。今日の天気は……。」

〈隼人視点〉

……。

おいおい、何なんだよこれ。

道路も小さなクレーターみたいに穴が開いてるし、道案内の看板は四分の三ほど食われてるし、所々穴だらけだ。

「まったく、誰なんだよ……。」

と、言った瞬間。

ゴツ、と穴に引っ掛かり、見事に前のめりにすってんころりん。

「がつ!?!」

~~~~~!!!!

言葉で表現できない、コンクリートに顔面強打したこの痛さ。

……もうすでに嫌な予感がするんだが、って言ってるそばから!

ゴスッ!

「ぎゃっ!?!」

……学校着く前に死んでるかも、俺。ははは……。

惑星高校。

とうとう自分の学校生活で過ごす教室の前に来た。

……しかし、それ以前に体中傷だらけ。もういや……。でも、死ななかったからいいや。とつと入ろう。

ガララ。

「隼人くくく！」

「おっと。」

「ふぎゃ！」

……唯が飛び込んできたが、前にも同じようなことがあったと思うので説明はスルー。

「お、隼人……。ってか何だそりゃ？」

「転んだ。」

「何回転んだんだよ。」

「三十六回。」

「何で数えてんだよ。」

……覚えてるからじゃね？

てか、いつも数えてるからな。なぜか。

「……にしても、お前見たか？あの穴。」

「ああ。それで転んだ。」

そして、今日も平穏な一日が始まる。

と思ったその時、

「ギャアアアアアア！？」

……廊下から聞きなれた悲鳴が。  
無視無視。

「無視するなああああああああ……。」

……因みに、叫んでいるのは神月<sup>かみづき</sup>影士<sup>えいし</sup>。なぜか他人の思考が読めちゃう。

そして、言ってしまえば、今作の影薄。

「ふざけんなあああああ……！」

と、扉を壊して出現。普通に開けるよ戸くらい。

……一応、容姿を説明すると、癖毛のある黒の短髪を持ち、眼鏡をかけ、

犬が頭にかじりついてる………？？？？？

「……おい、影士。目立とうとして何も犬を頭につけることはないだろ？あ？」

聞いているのは近藤大助。

「これが目立つための変装に見えるか！？」

「ああ。」

「頭から血を出してて？」

「ああ。」

「……ひどい……。」

と、そのままベシッと嫌な音を立てて倒れた影士。  
さよなら。君のことは忘れない。五秒は。

「……しかし、どこから入ってきた、この犬？」

その犬は、全身に白い体毛を持ち、言うなれば柴犬みたいな感じの犬だ。

なんか赤いのついてるけど。

さつき『誰か』噛んでたけど。

「……本当に五秒で忘れてんじゃねえか、隼人……。」

「お？生きてたのか？」

「生きてるわ！勝手に殺すな！」

「じゃ、楽にしてやるから目を瞑っている。」

「……ちよつと、近藤さん？その拳は何でしょうか？」

背後から聞こえる悲鳴と殴られる音は無視して。いつものことだし。

「隼人、後ろのあれ、大丈夫なのか？」

「大丈夫だろ。」

「即答かよ。……で、この犬は……。」

次の瞬間、犬がダツシュ！

そのまま教室からエスケープ！

「……おい！待て！」

……数秒後、人を一人血塗れにした情報は先生にも伝えられ、結局学校中の生徒、先生全員でその犬を捕獲すべく出動決定。

……影士を教室に置き去りにして。

「置いてくあああああああああ……。」

悲痛な叫び声は全員がスル！。

くアヤメ視点く

……。

学校、と言われる所には来たが……。

『……この騒ぎは何だ？』

「知りません。」

『うるさい。殺すぞ？』

「でも、今その銃で発砲すると周りの人にも当たりますよ？」

「あまり迂闊には使えないねってグホッ！？」

『体術ならお構いなく。』

「ひどっ！」

……さて、すつきりしたところで、周りの状況を確認だ。

学校中の人が総動員で犬一匹を追いかけている。

『……これが学校か？』

「違いますよ？勉強して、友達と話して、遊ぶところが学校です。」

「これ、遊びだったりする？」

「絶対違います！」

しかし、異常だ。

でも、何だかこれはこれで面白そうだしな。

『私もやるか。』

「賛成〜〜！遊びたいし！」

「私もです〜。」

という訳で、私達も犬を『殺そう』計画、実行。  
せっかく来たのに、あの犬のせいで学校生活が見れなかったしな。

〜隼人視点〜

つたく、何ですかこの騒ぎは！

まず犬一匹に総動員させる方がおかしいっての！  
チクショー、……理科室にいねえかな？

ガララ。

「お、隼人君。」

ん？

理科室に入ると、そこには長めの黒髪を持ち、ほとんど黒に近い小麦色の肌、そして白衣を着ている『学校一のマッドサイエンティスト』、春本健哉がいた。

「何だよ、変人科学者。」

「まあまあ、そう言わずに。それよりさ、さっき発明したけどこれさえあれば犬なんてイチコロだよ?」

「……なんだそのスプレーは。」

「これは言うなれば『犬コロリ』。スプレーを吹きかけ、そのスプレーを吸うと内臓をただれさせる新兵器!」

「馬鹿かお前は! それじゃ人間にも有効じゃねえのか!?」

「ご心配なく。人間には無効というご都合主義だから。」

こいつは、こういう奴だ。

あらゆる発明品を生み出しては、ある時は科学実験室の爆破、またある時は薬品での体育館爆破など、オチが爆発のつくやつで前科は五、六犯。全く恐ろしい……。

「……って、こんなことしてる場合じゃねえ!」

「いや、だからこのスプレーを使」

「いらねえよ、そんな危ないもの!」

という訳で、脇目も振らずダッシュダッシュ。

さて、校庭に来たが……。

何か凄いよこの人数。占めて二百人。

「……しかし、凄いな。」

と。

俺の前をあの犬が横切り。

そして、アヤメとマホとカゲロウがその後を……？  
って！

「お前ら！何してんだ！」

『犬殺し。』

「はあ！？てか、何でここに……！」

『あんまり喋らない方が良くぞ。お前以外の人間は私達の姿が見えないからな。怪しまれるぞ。』

「……どういふこった？」

「魔法ですよ。隼人さんには見せてオーケーという設定にしてあるのであなただけにしかこの姿、そして私達の声は聞こえません」

」

ということらしい。

しかし、何で来たんだ？

『待て。』

ズガン！

「キャン！？」

ああ、とうとう発砲を……。  
他の生徒も少しビックリ。

「な、何すんだよ！」

……？

ちょっと待って、今、誰か喋った？

「「「「「.....」」」」」。

校庭にいる生徒、すぐさま全員沈黙。

……って事は……。

「喋った……？」

「アア、そうだが何かあのか？」

次の瞬間、

「……もういいや！魔界術・二十七 地没<sup>ちぼつ</sup>！」

と、マホが唱えた瞬間、どんどん犬の足が地面にめり込んでいく。  
でも、もういいや、は無いだろ……。

「……嘘だろ、ツと！」

が、犬も地面からなんとか離れたらしい。

「だったら、魔界術・六 岩砲<sup>がんほう</sup>！」

と、校庭にある小石を超能力者みたいに上空に集め、一つの大きな  
岩に固めた。

それを犬に飛ばす……！？

「やり過ぎだつて！」

しかし、その大きな岩は、なぜか犬の手前で止まった。

いや、犬が『止めている』。直径三十センチはあろうという生成した大きな岩を。

さらには、ガリッ！という音まで。まさか……。

「ンン、うまい。」

やっぱり食ってる。

……そうか。おそらくここら中の道路や看板とかを食い荒らしたのはこいつだな。

『機械流剣技・基礎其の一 十文字。じゅうもんじ』

いやいや、剣はまずい！  
しかし、

「……遅いなア……。」

いつの間にかアヤメの背後をとっていた。速い！

『何？』

「遅いッて言ッてンだよ！」

と、道路さえも噛み砕いたその牙でアヤメを襲った。

が、

「……か、噛み切れねエ！」

案の定、傷もつくわけがなく。

そして、アヤメは手をマシンガンに変え、その犬の腹に当てた。

『……この距離でマシンガンを放ったら、どうなるか?』

アヤメが、なぞなぞを出すように笑顔で問いかけた。

対して犬の顔は、おそらく恐怖でゆがんでいる。

そして、

『……答えは一つだ。』

次の瞬間、連続した銃声が鳴った。

「……………」

が、この犬、『二つ目の答え』を選んだ。

『……弾丸を、歯で…………?』

そう、とっさに腕の噛みつきをやめ、歯で噛む事で数十発もの弾丸を『全て』止めていたのだ。正直、もう犬じゃない。アヤメがロボットの域を超えてるのと同じく。

「ッたく、離せ!」

そして、アヤメの手からするりと抜けると、学校の外へと逃げ出し

た。

それを、学校中の人間とともに俺達が追っかける。

って、こんなに人が要るのか、犬如きに。

「……つたく、何なんだよあの犬！」

俺達は今、商店街近くを走っている。

犬一匹を捕まえるべく。

てか、人を一人傷つけた程度で、この人数はないと常々思う今日の頃。

「しつげエなア……。」

なぜか喋っちゃってるし。

後ろにいる生徒らは、あのスプレーを持ったり、ナイフを持ったり、刀を持ったり、拳銃はロケットランチャー。うん、さすが『銃刀法違反がない町』だ。褒められることじゃないけど。

「……ヒャッハア！俺にも暴れさせろ！」

しかも、いつの間にかカゲロウがサクリフェイスと変わってるし。

「とっとと死にな！シャドーメイク・ランス！」

すると、商店街にあった店の影が槍状に伸び始め、犬に向かって一直線。これも魔法らしい。

しかし、犬は上手いこと左右に動いてこれを難なく全て避ける。

「すばしっこいな！だったら、ダーク・バースト！」

と、右手と左手、両方でエネルギーを溜めて、黒い禍々しいオーラを発射した。

しかし、

「あらよツと！」

これも華麗に避けた。

なかなか避けるのが上手い。

「……あれ？でも、ちょっと待てよ？カゲロウ。」

「俺は今は『カゲロウの意識』じゃないっつーの！」

「面倒だな……。サクリファイス、その、ノットなんとかって今使ってるのか？」

「ノット・ファインドのことか？当たり前だろ？あの犬には見せようとも思っただけ……。ってあれ？」

……そう、おかしい。

ノット・ファインドは、一応マホに説明は聞いたが、『自分が相手に見せてもいいと思った相手か、この術を使ったもの同士でなければ姿を見ることは出来ない』とされている。

つまり、この犬には見えないはずのものが『見えている』。

「オラァ！」

なんて事を考えてると、あら不思議、目の前に電柱が数十本も降ってきたよ？

「避ける！！！」

皆は、持ち前の怪力で受け止めたり、刀や銃や魔法で薙ぎ払ったりしている。見事。

しかし、犬は忽然と姿を消していた。

「探せ！見つけるぞ！」

という誰かの号令とともに、二百人近くで搜索開始。因みに、まだ学校内にいる生徒はこちらへ来る模様……。

〈作者視点〉

「ちくしょ、食っても食っても満たされねエ……。」

その頃、犬は裏路地を歩いていた。

人目につきにくい最適な場所など、この犬にはお見通しなのだ。しかし、それ以前に問題がある。

「……腹が減った……。」

そう、この犬は生まれてこの方『満腹』というのを経験したことがない。

最初はちゃんとしたものを食べていたが、次第に尽きてきて、ダンボール、次にビニール、次に砂、次に泥、次に石、次に鉄、コンクリート、金、銀、水銀、アルミニウム、プラスチック……。次々とあらゆるものを食したが、それでも満たされることはなかった。次第に、この犬は邪の手段をとるようになる。

人の迷惑などいざ知らず、道路、ガードレール、線路、階段、手すり、車等、人々に必要なものまでも食し始めたのだ。しかし、それでも満腹にならず、今日まで食いまくっている。

そして、次第に強靱な胃と歯を手にいれ、現在に至る。

『見つけたぞ。』

その時、犬の後ろから声がした。

振り返ると、この人生の中で唯一食すことの出来なかった『もの』。

「テメエか……。」

『その諦めの悪い性格を根本から捻じ曲げてやる。』

瞬間、目の前にいたアヤメの姿が消えた。

「何ッ!？」

『こつちだ。馬鹿犬。』

そして、背後に回ったアヤメは思い切り回転蹴りを犬に決めた。

「ギャン！」

『機械流剣技・攻式其の八 咲き乱れ。』

そして、毎秒2000回という速さで、突きを始めた。しかし、犬も負けてはいない。

「……遅いぜ！」

また背後をとり、今度は落ちていた先の尖った鉄片をアヤメに投げつけた。

そして、それが『貫通した』。

「……やった、のか？」

と思った次の瞬間、腹の辺りから激痛が走る。

「ぐ、はッ!!」

涎と少量の血を吐き、その場につずくまった。  
そこには、

「お、お前……。」

そう、アヤメが立っていた。無傷で。

「な、何で……？」

『お前が当てたのは、ただの幻影だ。』

「げ、幻影、だと……？」

『ああ。陽炎、くらいは聞いたことがあるだろうっ。』

陽炎。

暖められた空気を見ると、歪んでいるのは見たことがあると思う。  
それを言うのだが、明らかにレベルが違いすぎる。

「そんなンじゃ、陽炎のレベルじゃねえじゃねえか……。」

『ああ。だが、蜃気楼というの聞いたことはあるだろ？ あれは、密度の異なる大気中で光が屈折して起こるらしい。つまり、冷たい空気に進む性質が光にあるらしい。』

だが、この蜃気楼は極めて稀である、鏡映（側方）蜃気楼と呼ばれるものである。蜃気楼にも、上位、下位、側方があり、計3パターンあるのだ。

「そういう、ことが……。」

そして、犬はふつと笑い、

「……殺すなら殺せよ……。どうせ生きててもs y」

ズガン。

間髪入れずに、アヤメは犬までぎりぎりのところに狙いを定め、一発発砲。

「な、何を……。」

『……死ぬ勇気もない奴に、死ぬ権利などない。この程度で怯えているようじゃ、死なせないからな。』

「……。」

……そうだ。死ぬ勇気もないのに何死のうとしてるんだ、俺は。大体、俺の目的すら達成できてないのに、死ぬなんておかしいだろ。犬は、意識の遠のく中、それだけを思った。

「……ン……。」

「お、目覚めたか。まったく、学校もお前探して終わっちまったし。ま、授業なかったしいいか。」

犬が目を覚ますと、そこは見知らぬところだった。

「ああ、ここ俺の家。って、地下室なんだけどな、家は吹き飛ばされてたし。」

そう、この少年は犬を『助けた』。

人に怪我させたのに。

皆に迷惑をかけたのに。

「どうしてだよ……。」

「あ？何言ってんだお前。助けるのに理由何ざいらねーよ。」  
「……。」

その少年の回答は、実に簡単なものだった。  
が、しっかり筋が通っていた。

「わーい♪犬だ〜♪」

「可愛いですね〜。」

『…… コロス、コロス。 まだまだ物足りない。 ククク。』

…… 一名が壊れているが、問題はない。はず。

「…… ったく、お前の場合は食費がいくらかるんだか。でも、こ

れ以上迷惑をかけられるのも御免だしな。」

犬は、その言葉を数秒考えてから理解した。

「ってなわけで、よろしくな。」

「……ああ……、よろしくな。」

「おう。」

『クロス!』

「ああ、ハヤト! アヤメが殺人鬼に目覚めた!」

「マホちゃん、それは『殺犬鬼』の間違いではないですか?」

「どうでもいいから、助けてくれー!ーッ!」

そんなこんなで、今日も終わっていく。

program 9 命名会（前書き）

更新遅れてすみませんでした……。

さてさて、あの犬は、この小説のキャラが決めるそうぞ。  
何になるのやら……。

## program 9 命名会

さてさて、犬を拾って（？）家にいる隼人達。

「……で、何するよ？」

隼人が言う。

正直、犬探しのおかげで体が限界に近づいていた。もう寝たい、とも思っている。

「あ、そういえば、」

と、マホが何かに気づく。

「名前は？」

そう、この犬、喋るくせに名前は言わない。

というより、言う暇がなかったのだろう。なにせ、あれほどの大騒動を起こしたのだから。

「ンあ？俺の名前だア？」

そういった後、犬は言う。

「そんなモンねーよ。あったらもうとっくに言ッてるッつの。」

確かに、と全員が頷く。

というわけで、

「じゃ、名前決めよつか。」

マホが提案したため、犬の命名会開催。

が、その時ドンドンと扉を叩く音が。インターホンが無いので、そうするしかないのだ。

「誰だ？」

「俺だよ。」

と、賢の声が。

とりあえず開けてやると、その後ろにさらに唯、健哉、そしてまだ血が出ている影士がいた。

「……なんだこのある意味での豪華パーティは。つか、何で来た？」

「いや、あの犬の様子を見に來ただけだ。おじゃまします。」

「本当に邪魔だよ。勝手に家に來られるこっちの身にもなれー！」

と絶叫すると、

「隼人ー！」

唯が隼人に抱きついてきた。

この癖、幼い頃からずっとこのまま。いつになったら直るんだか……

…、と内心ではこう思っている隼人。

だが、顔を真っ赤にしているのは隠せていない。実際唯は美人だし、そういった感情を抱くのも無理はないかと。

「その反応は正しいと思うけどね。」

「はい、変人科学者は黙ってる。ってかさっさと離れる唯。」

「やだ。」

まるで甘えている犬だ。

「……それより、どこかにいい病院はありません？」

その光景を見つつ、血を流しながら倒れる寸前になっている影士が言った。

その時、

『……誰だお前ら。』

アヤメが奥から出てきた。

「どしたの？」

「何かあったんですか？」

「おい、そろそろ始めネーか……って。」

その光景を見て、来た全員が凍りつく。

『……とりあえず、お前の身体を真つ二つに切ってやる。』  
「いや何で？」

とチェーンソーに変形させて言うアヤメ。

「ほほ。どういう仕組みだ？」

健哉が危険を顧みずにアヤメに近寄った。

『……恐らくこれは、地球の技術ではないな。』

「へ……。……。ん？」

健哉の口から何も言葉が出なくなる。

「地球の、技術？」

そう言われれば、と唯も首を傾げる。

『ああ、私はどこかの星から来たロボット、アヤメだ。』

「私はマホメット・オルドラン」。魔女だよ。マホって呼んでね。  
」。

「私はカゲロウです」。一応幽霊です」。

「で、俺が名も無き犬ッてワケだ。」

なぜか勝手に自己紹介を進めてしまう居候組。  
そして、全員が二の句が継げなくなった。

どこかの星から来た、魔女、幽霊。

ここまでの言葉が出て、不思議がらない方がおかしい。

「……。えつと、隼人？」

何だよ、と賢に返す。

「……。なんか、また増えたな？」

「ああ。幽霊に妙な犬だ。」

「妙な犬とは何だ、コラ。」

しかし、賢はまだ良い方だ。もう既に会ったことがあるから、少し

は免疫がある。

一方、唯や健哉はもはや何も言えない。

「……ねえ、隼人お。どういことなのよ、これ。」

「知りたきゃ俺の体から離れる。」

は、い、と渋々唯は隼人から離れた。

で、説明してやること十分。

「……………分かったか？」

「ああ、大体な。」

「うん、ばっちり。」

二人も納得（？）したようだ。

〈隼人視点〉

いきなりの訪問客だが、さすがにこの状況までできてしまっでは、さあ帰れ等も言えないので、家に入れることにした。

「……で、俺の名前は？」

ああ、と俺がまた説明をすると、

「そういうことなら参加するぜ。」

「面白そうやらせて！」

「……この僕がすばらしい名前をつけてやる。」

という訳で緊急参戦決定。

「じゃ、まずは候補を挙げる事からだな。ま、お前はそれについて何かコメントしてやれ。」

「ああ、いいぜ。」

「それじゃ、何か思いついた人？」

ここで真っ先に挙げたのが唯。

「ポチ！」

「……それ、犬につけるお決まりの名前みたいなもんじゃねエか。」

「で、これでオーケー？」

「駄目に決まッてンだろ。」

で、次にカゲロウ。

「うーん、ブチ？」

「ポチに似てるし、何かどうかで聞いたことあるぞ、その名前。却下！」

次にマホ。

「ドッグ！」

「まんまじゃねエか。」

「いや、ホットドッグのドッグだよ？」

「……噛むぞ？お前の身体を噛みつくすぞ？」

次にアヤメ。

『ペプ。マン。』

「何をしたらそういう名前になるんだヨ？」

『まあ、別にいいではないか。』

「ぜんぜん良くねエ！」

次に賢。

「じゃ、俺は」

「却下！」

「何で俺だけこうなんだよ？」

「知るか。」

という訳で次いつてみよー。

次に健哉。

「だったら、NH3で……。」

「アンモニアじゃねエか！」

「ほほう、良く分かったな、犬の癖に。」

「犬の癖には余計だ！」

「では、犬の分際で。」

「もっと言葉悪くなッてンじゃねエかア！」

次にマホ。

「じゃあ、アメリカンホットドッグ！」

「『じゃあ』ッて何だよ！てめえ、もう何でもいいかと思ッてンじゃねエか？」

「さあ？」

「しかも、前の発言にしろ何で食べ物の名前にされなきゃなんねエ  
ンだよ！」

「気分♪」

「……噛み殺すぞ？本気で。」

次に賢。

「却下！」

「早いよ！」

「知るか、悔しかったら俺よりも早く言ッて見やがれ！」

「だから、何で俺だけ！？」

次にカゲロウ。

「ヒトラーです〜。」

「何で俺があのおっさんになンなきゃならねェんだよ！」

「お、おっさんって……。」

ヒトラーさん、すみません。

では、次に影士。

「……う、きゅ、救急箱を……。」

「却下。」

続いて、アヤメ。

「てか、無視するなあああ……。」

『うるさい。切り刻むぞ？』

「……うぐ。」

バタ、と倒れたが、気にせずレッツゴー。

『ならば、もうドラ。もんでよくないか?』

「……お前は著作権というものを知ってるか?」

『別に関係ない。』

「でも、却下な!」

で、こんな問答が一时间ほど続いた挙句。

「もうええわア!」

何故に関西弁?

「お前ら、全員噛み殺す!」

「だから、暴力に走るな、すぐに。」

「うるせエもう我慢の限界だ!つか、真面目に決めやがれエ!せつかく名前をつける権限を持つてるのにさっきからお前らは食べ物やら著作権すれの名前やら大統領の名前やら!」

「はいはい、わかったから。」

「分かッてねエから言ッてンだろオがア!!!」

名も無き犬、大暴走。

「……救急箱……。」

「うるせエ、黙ってろ!!」

「……………」

一分前に意識を何とか取り戻した影士、死亡。

「ま、まだ死んではない……。」「

あ、生きてた。

「ッつか、いい加減決めやがれエ！」

そんなこんなで何になったのかというと、（あの問答がまた三十分くらい続いた拳句）

「じゃ、もう『ホリユウ』でいいや。どうせ決まんないし。」

その『ホリユウ』、もとい『保留』という名前に対しての感想は？

「……ふッざけんなアアアアアアアア！……！！！」

やはり駄目だった模様。しかし、いつの間にやらそれがそのまま定着してしまったのも事実。

というわけで、命名会終了。

program 9 命名会（後書き）

ホリユウ「おい、作者、これはどういうことだア!？」

いや、それもそれで良いじゃん（笑）

ホリユウ「……噛み殺す。お前の全てを喰らい尽くしてやる!！」

で、では次回も……。ギャアアアアア!!!

program 10 家漁り（前編）（前書き）

今回は家を漁ることに。

視点が変わりすぎて読みづらいかもしれません（汗）

program 10 家漁り（前編）

色んなことがあった昨日とはおさらばをし、翌日。

「……………」

隼人はいつも通りの早い時間に目覚めた。

朝食を準備し、仕度をする。

それが終わり、他の三人（ロボット、魔女、幽霊をそう数えていいのかわからないが）と一匹を起こしにいく。

因みに、アヤメは壁にもたれ、マホはソファで寝て、カゲロウは天井。二人は大丈夫そうだが、もう一人は無理そうだ。

ホリユウはテーブルの下にクッションを持ってきて、その上で寝ている。

まずは、誰から起こそうか……。と思った瞬間。

「……………朝、か……………」

と、眠たげな目をしながら最初に一人で目を覚ましたのはアヤメだ。人への情は向けないが、「眠い」といった感覚や、会話能力だけは本当に人に近い。

「あゝ、アヤメ。他の奴も起こしてくれ。」

「……………分かった。」

その数秒後、ぼろぼろになった二人を抱えてやってきたアヤメ。

「……………お願いだからもう少し優しく起こしてよ……………」

「お前の身体を揺らしても起きないからだ。」

とアヤメはマホとカゲロウを同時に片手で投げ飛ばした後、食卓についた。

朝食後、隼人は学校へ行き、案の定留守番組は暇になってしまった。留守の間は当然暇なのであって、何をするか一時間くらい話し合い、その結果、この家を色々と漁ることにした。

『それじゃ、開始。』

『お~~~~!!!!』

という訳で、アヤメは台所を、マホはリビングを、カゲロウが隼人の寝室を、ホリユウがトイレや風呂場などを搜索することにした。

「……あいつら、絶対妙なことでやがるな。」

そんなことが隼人の家で決定された頃、隼人は授業中にそんなことを呟いたそう。合ってるけど。というより勘が鋭いどすな。

「どこの方言だ。」

賢、ナイスツッコミ。てか聞こえるんだね、作者の声。  
さあ、視点を戻そうか。

（アヤメ視点）

さて、台所といったら……、私が来たときに一度料理を振るってやった場所のことだな。……料理出したときはハヤトは嫌そうな顔してたけどな。ついでに食後に顔がぼろぼろだったしな。

『……しかし、どこを探せばいいのやら。』

とりあえず、いくつか引き出しがあったので開けてみることに。縦に四つ。

白い色をしていて、取っ手は黒色。一番下だけ何故か大きいしな。まずは、一番上の引き出しからだな。

開けてみると、ごくごく普通のものが入っていた。

野菜の皮をむく道具……、ピーラーと、フォークとナイフとスプーンと箸と、それからなぜかカレーを入れる銀色のやつ……、グレイビーボートっていうらしいが……、が入っていた。インターネットって便利だな。ハヤトは相当困っていたが気にすることも無いだろ。

さ、次は二番目だ。

一体何が入っているんだろうな……。くだらなかつたら適当に切り刻んでおくか。

ここを終わったら……。次はどこにするか……。そんなことも考えつつ二番目の引き出しを開ける。

くマホ視点く

いつも見慣れてるし（といっても数日しか過ごしてないけど）、特に探すところはなさそうだけどね。

だから今はテーブルの裏側とか、ソファの下とか、地味なところを探しているのに面白そうなものは一個もないし。

……全部ひっくり返しちゃったからかなりリビングがぐちゃぐちゃだけど……。あははー……。

「……そうだ、テレビ台の下って……。」

ま、とことん地味なところを探そうつと。

魔法でも使えば簡単なんだけどね。八十三番目に『吸引』っていう物体を自分のところへ寄せ集めて即席の盾を作ったりとかする魔法があるんだけど、やるとこの家の全てを吸引しちゃうからね……

……。例えば家具とか部屋とか壁とか、この家全てを魔法を使わずに探すなんてね。正直面倒かも……。

「それはそうと、下下く」

ま、そんなこと考えても意味ないし、早く見てみよつと。

……テレビ台の下、1、2センチしかないけど。

「カゲロウ視点」

し、寝室って何があるんでしょうね……。私は女性なので、男性のところへ行くのはちよつと抵抗がありますけど……。

『中々面白そうなことやってんじゃねえか。俺にも探させる。ほら、『セパレート』ってのがあんだろ？』

「確かにあるけど、それって三十分しか持たないんでしょう？」  
『まあな。』

あ、因みにこの魔法は私の体から、サクリファイスの魂を外界へ放つものです。でも、魂は肉体から離れていると『成仏』みたいな感じになっていて、三十分経つと完全にさようなら、なのです。あまり考えたくは無いですけど。

『でもよ、十分くらいは自分の体で動きたいんだよ。』

「……あなた、体無いでしょう？第一、魂は自分の姿に具現化したら、それこそエネルギーを使って十分足らずで死滅しますからね？」

『ま、かく言うお前は特別な存在だよな。魂なのに死滅しねえし。』  
「それは幽霊だからですよ。」

この説明は話すと長くなるのでいつかさせてもらうことにして……。とりあえず、何か探しますか？。

まずは、寝室にあるもの。

ベッド、引き出し、ライト、鏡。そんなところですかね？。

じゃ、まずはベッドを探りますか？……。

……おゝ、ふかふか♪気持ちいい♪

『……寝るんじゃないぞ？』

「……ZZZ……。」

『って寝るの早いだろ！？』

……ムニャムニャ……。

（ホリユウ視点）

ツたくよオ……、この名前はいい加減改名して欲しいんだけどなア……。

（無理無理。と天の声が言ってみた。）

……作者だろ、絶対作者だろ。オイ、なめたまねしてツと頭蓋を噛み砕くからな？

（大丈夫。僕はお前らに絶対勝つように『何でも思い浮かべた技を使える』って設定にしてあるし。）

野郎……。

ま、いいや。とりあえず探索だ。何かねエかな……ツと。

とりあえず、便所はパスだな。あるわけねーし。その裏をかいてありそうな気はするけどな。

だッたら便所を探すか？いや、風呂場辺りも……。

「……………」。

どうすりゃいいんだよ……。どこから探せばいいんだよオ！

（まあ、せいぜいあがいてなさい。）

ふざけんな！それと作者、お前どこにいるンだア！

（新世界。）

……それは喧嘩を売ッてると見なしていいンだな？そうだな？

（別にどうとでも？一瞬で丸焼きにしてあげますよクズ野郎）

「……上等だ。下りて来いやアアアアアア！！」

（どこのヤクザだ（汗））

（アヤメ視点）

ふむ、何か便所の辺りが騒がしいな。いや、便所じゃなくて廁か？  
まあ、どっちでもいいが。

（現代は便所というんだよ。）

知ったことか。てか、お前誰だ？

（作者。）

さて、一番上から三つ開けても怪しいものは無かったし、で、見つけたものは手当たり次第細胞レベルに切り刻んでおいたし、今床は『ゴミ』だらけだ。

（って、無視？ま、いいけど。）

さて、一番最後のこの引き出しだな。

ガラッ。

『……これは……？』

そこにあっただのは、大量の茶色の袋。……なるほど、封筒か。手紙を出すときに使う奴だな。

『しかし、何でこんなに……？』

第一、台所に封筒がある時点でおかしい。

……何かあるな。

『全て開けてみるか。』

という訳で片っ端から開けていってるわけだが、中は空らしい。手紙など入ってもいなかった。そして、とうとう最後の封筒になった時、何かが入っているのを見つけた。

……手紙ではないらしい。大分小さいな。

何が入っているのやら……。くだらなかつたら土に返す気満々だが

な。

……どうやら何かの鍵みたいだな。

しかし、何でこんな回りくどいことを……。切り刻もうか……？

……。  
いや、とりあえず何に使うか探してみるか……。

くマホ視点く

んにゃー……。テレビ台の下って意外に狭いね……。何かあるけどぜんぜん届かないし……。

……どうしよう？

魔法を使う？いや、駄目でしょ。家を壊すわけにもいかないし。

いや、でも狭すぎてなんかあるみたいだけど届かないし……。

いや、でも、待って、どうしよう、やろうかな、いや、でも、いや……。

「……魔界術・七十二 馬鹿力！」

結局魔法を使うことにしました。って、本当は駄目だけどね。

この魔法は一定時間の間、身体能力を神の領域まで引き上げる奴なんだけど……。早くやめないと筋肉痛で動けなくなるし……。

「てい！」

それで、テレビを置いてから、テレビ台を投げた。

向こう側でガシャーン、パリン、ゴスツ、プシューとか音が鳴ってるけど、まあ、今はそんなの気にしてられないし。

（因みに、音は順に、『天井を突き破り、そのまま飛んでってどこかの家の窓ガラスを割って、住人にテレビ台ごと頭に当たって血の噴水ショーが行われた』って感じです。因みに、『お兄ちゃん！！』と誰かがどつかで叫んでたけど気にしてる場合じゃないので軽くスルー。by 作者）

さてつと、何があるのかな？

……本？でも、何か錠が付けられてる。

錠を開ける魔法はないし、そんなあったら便利だけだね。物を燃やす魔法もあるけど、嬢を溶かそうと思うと一緒に本が燃えるし。

……どうしよう？

……とりあえず、錠を探そうつと♪結局こうなる  
とは思ってたけどね。

因みに、テレビ台が刺さった不幸な人は、

「……………昨日は犬に噛まれて、今度はテレビ台かよ……………。ぐふっ……………」

ケガにより休んでいた影士だった。

～サクリファイス視点～

「……………むにゃ……………」

『おい、起きろー、朝だぞー!』

ぜんぜん朝じゃねえけどな。むしろ昼に近いけどな。

……………で、カゲロウが寝てるんで、何だかんだで俺が喋るらしい。

しかし、これじゃ何かを探そうにも探せねえや。ベッドで寝てるし。

……………というわけで何とか起こすことにした。

『さてつと……………。セパレート!』

魂を切り離して……………。あゝ、久々の外だ……………。

って浸ってる場合じゃねえ!こいつを起こさなきゃな。

『起きろー、朝だぞー。』

ぺちぺちと頬を叩いてみるが、たいそう幸せそうな顔をして寝ているカゲロウは起きそうに無い。

『起きろ』……。

へちへちへちへち。

『起きろ……。』

へちへちへちべちべちべちばちばちばちばち！

「……起きろっつってんだろ！！」

バキッ！と殴ってみる。

「ふにゆ」

……駄目だ、もう我慢の限界だ。

「シャドーメイク……、ヒドラ！」

もう実力行使だ！影をあの伝説上の竜の形に変えて……。

「起きろ——！！！！！！！！！」

一斉に襲えエエエエツ!!!!

スドガアアアアアアアアアッ！！！！

「……んや？ 私……？」

「やつと起きたか……。じゃ、戻るか。」

「さて……、つてええええええええ！？サクリファイス！何でこんなことにつ！？」

『…………』

「ちよつと、黙ってないでさつさと答えなさいっ！」

むぎーっ！と怒ったところでお前にや何もできねーよ。

さて、寝るか……。

「ちよつとーっ！」

無視無視。

（ホリユウ視点）

ツたくよ、便所を探したら流されそうになるわ、汚いから流そうと思ってシャワーをやッとの思いでつけたら五十度に設定されてて火傷するわ、しまいには騒いだせいでローションが床に撒かれて風呂場から一時間は出られなくなるわ……。

「…………あの馬鹿の不運がこっちに移ツてきやがツたかア？」

本気でそう思う俺だが、くよくよしてもしょうがないんで、行動を再開しますかね。

ツツー訳で今いるのは玄関に当たる部分。ここには靴が置いてある棚しかないわけだが……。

「棚に何かあるのか……？」

という訳で搜索開始だ。

program 10 家漁り（前編）（後書き）

ホリユウ「なア、本当にこの名前どうにかなンねエのか？」

なりません。何度も言わせるな。

ホリユウ「……名前変えろ。頭蓋を噛み砕くぞ？」

ほう。想像したものをそのまま具現化する能力を持つ僕に太刀打ちするの？

その気になれば……ククク（怪）

ホリユウ「……文字通り怪しいからやめやがれ。」

program 11 家漁り（後編）（前書き）

家を漁るだけでなく、何故か作者も乱入してアヤメとバトルしたりします。

……まあ、色々あるみたいですが、とりあえずどうぞ！

program 11 家漁り（後編）

物色を始めてから早3時間。

そろそろ昼食の時間なので、誰が作るか、ということを一旦集まって決めることにした。

「……私は？」

「だって、アヤメが作ったら凄い事になったってハヤトが言ってたよ？任せられないよ。」

「……確かに、そうかもしれないな。」

とりあえず、アヤメは納得したようだ。勿論、今怪我したらもう探そうにも探せなくなるかもしれないという点もあるが。

「で、誰が作るんだよ？」

ホリユウが聞く。

「私は料理はそんなに出来ないのでパスです。」

「当然、俺も無理だな。」

「私も無理だし……。」

「私が作ると瓦礫ハンバーグしか作れないしな。」

「俺だッて無理だ。」

……ここまで来て全員出来ないことが判明。

「……ねえ、作者さんが作ってよ。」

（……あまり料理は出来ない。ご飯炊いて、味噌汁作って、あとはおかずは軽く作れるけど。因みに、実話です。）

『じゃ、頼んだぞ。』

「お、よろしくな。」

「じゃ、私たちは待っていますか。」

『そうだな!』

(……へ?これって決定事項?)

『そうだ。』

という訳で、作者が作ることに。

〈作者視点〉

その間、探した成果を見せ合ったっぽい。  
まずはホリユウ。

「見つかるわけねエだろ、便所とか探してよオ！」

という訳で、収穫ゼロ。

……発砲音が聞こえてきたのは幻聴だ、うん。  
そして、カゲロウ。

「私もです。」

『お前は完璧寝てたからな。』

「ああっ、言わないで下さい!!!」

……何か大慌てで言い訳しているけど、スルーしてくれたようだ。  
次はマホ。

「私は日記帳みたいな奴が見つかったよ」

マホが手に持っているのは、少し埃かぶった赤い手帳のようなもの。おまけに、鎖に南京錠までついていて開かないらしい。そして、最後にアヤメ。

『こんな物が見つかったぞ。』

アヤメが茶封筒を取り出し、その中から小さな鍵を出した。

「……ねえ、もしかしてこれと会っくんじゃない？」

「やってみれば分かるだろ。」

という訳で、その鍵を錠に入れ、がちゃ、という音の後、鎖もろとも床に落ちた。

「あ、開きましたね……。」

『何が入ってたんだ？』

『分からない、とりあえず確認しないことには何にもならんだろう。』

『

さて、作り終えたし運ぶか。

「開いてみよつか」

パラ、という音がした。本当に家主に許可なく開いたみたいだ。そこに、何があったんだ？

『……。』

「……これは、ハヤト、だよな？」

『ああ。』

「それで、こっちの方は誰なんでしょう？」

『……待て、作者に似てないか？』

……ん？僕？

そこには、

確かに、幼き頃の隼人と、僕の写真が……！  
つて、何で、どうして！？

『……作者、どういうことだ？』

（いや、どういうことと言われましても覚えていないもので……。）

「嘘！絶対吐かせてやるんだから！」

（えー、そんな事言われても覚えていないものは覚えていません！）  
「アヤメ！」

『ああ、いい加減吐け、もしくは血を吐け手助けするから。』

（そんな優しい声で言わないで、逆に怖いから……！）

あー、もう、誰か助けて……！！！！

『よし、血を吐かせるぞ。』

（ま、待て、作者を殺すというのはどうかと思うぞ？）

「良いじゃん、作者ちゃんの家族が誰か書けば」

（……ちよつと待って、家族？）

そついや、これ、隼人が小さい頃の写真だけど、それだったら僕も  
小さいよな……。

でも、明らかにこの写真だと大きいって事は……。

（でも、僕、弟しかいないけど？）

「じゃあ、これ、誰なんでしょうね……？」

とりあえず、保留する事に。

そして、昼食を食べ終わり、調査は再開へと方針を進めていくそうです。

そして、何やかんやで4時間経過。

結局何も興味深いものは見つからないらしいし。

そろそろ隼人も部活を終えて帰ってくる頃だと思っけど？どうすんのこの家。ぐちゃぐちゃだよ？

『知ったことか。あいつの泣き顔を見ればそれでいい。』

……お前はいつの間にかそんなに心が真っ黒に？

『いつの間にかではない、元からだ。』

そっか、殺人兵器だもんね。

……じゃなくて！どうすんのこんな状況で！

もっと詳しく言うなら、机やソファなんかはひっくり返ってるし、テレビはどっかに飛んで行ってるしついでに悲鳴も聞こえるし、寝室の壁は壊れてるわ、台所は何故か黒焦げになってるし、便所は修理しなきゃならないほどの浸水ぶりだし、風呂にいたっては跡形も無く消え去ってるし！

挙げればキリが無いんですが！？

『「「「 知らない!!!」」」』

……そんなこと言わんでとっとと戻せ。  
さもなくば、お前ら全員ぶっ飛ばすよ？

『来るならかかって来い。』

おう。じゃ、普通に出てきますかね。

「つつーわけで、いくよ？」  
『来い。』

作者は足で地を踏みつけ、とんでもないスピードで突っ込む。

『……機械流剣技・守式其の八 連斬強止！』  
れんざんきやうじ

アヤメはそれに対して物凄いスピードで剣で突いて動きを止めようとする。  
が、

「リトルダメージ空気防壁。」

と剣の突きが、全て何かに阻まれ、攻撃が作者に届くことは無かった。

その間に、作者はバックステップで下がる。

『……お前、人間か？』

「いや、この世界じゃ設定がぶっ飛んでるからさ。あ、因みにさ

つきの技は、」

『空気中にある、あらゆる分子をがちがちに固めて壁にして防いだ。』

「正解。」

という訳で、戦闘続行。

「エアガン風力弾丸!!」

と、空気を固めて弾にしてアヤメに飛ばす。

しかし、アヤメは手を日本刀に変形させ、すべて薙ぎ払っていく。

『こんなものか?』

アヤメはすぐさま今度は日本刀からレーザー銃に変え、超高熱の一筋の光を放つ。

「いやいや、まだだよ? レーザービーム破壊光線!!」

作者も手から眩く太い光を迫り来る細い光に向けて放つ。

両方の光は激突し、小爆発を起こした。

………その爆発で、床に穴が開いてしまったが。

「ああっ! また開いた!」

作者は人の被害を考えて行動したいのだが、とそろそろ思い始めている。

しかし、ここで行動を緩めてしまうと、一気にアヤメに攻められてしまう。そうなっては困るので、やはり出来る限り本気でかかるしかない。

自分で売った喧嘩は自分で落とし前をつける。常識であるこのことが、この状況だと結構難しかったりもする。

『まだだ。』

変形したのは、今まで絶対に10000人は殺したであろうと思われるチエーンソーだ。

「死ぬ死ぬ！待ってストップ！」

と、チエーンソーを真剣白刃取りの要領で両手で取った。そのままチエーンソーを斜め下に思い切り下ろし、バックステップで避けた。

「つたく、これだったら！」

すると、見る見るうちに作者の腕と拳が大きくなっていく。

「ジャイアント巨人身体！！」

そのまま、巨大化した拳をアヤメにぶつける。  
が、当然アヤメは身体が硬いため、びくともしなかった。

『どうした？このままだと切り刻む羽目になるのだが？』

すぐさま右手をサーベルに変え、その腕を切り刻もうとした。  
が、

「エアガン風力弾丸！！」

作者がもう一方の手でアヤメに空気で作った弾丸を喰らわせた。

勿論効きはしないが、狙いはアヤメから遠ざかることである。そして、案の定成功した。

「……あがくな。」

「死にたくないんだよ！風力操作！」  
ウィンドマスター

すると、作者の周りのみならず、そこら中に強風が吹き荒れ始めた。そして、風速は一気に『最強』と呼べるレベルまで達する。この状況では、いくらダメージが少ないからと言って、アヤメも立つてられないだろう。

そう思ったのが甘かった。

アヤメは普通に走って、両腕を日本刀に変換させて襲い掛かる。

「なっ！……この、くたばれ！風力大砲！」  
プラズマガン

作者は強力な風からプラズマを生み出し、それを放った。

プラズマ、それは太陽の内部にもあるもの、つまり異常なほどに『熱い』。

それを容赦もなく次々に飛ばした。

が、常識を超えたアヤメの身体は全くその温度を受け付けない。むしろ、その温度を吸収して力にしているようだ。

「……うわ、これ勝ち目なし……？」

作者が少し諦めかけた声を出すと、扉の方から声がした。

「…………ただいま。」

また今日も大層な回数転んだようで、体中傷だらけであったが、そんな痛みを忘れてしまうような光景が。

「…………何だこれ!？」

家具という家具はひっくり返ってるか無くなっているか壊れているし、床や壁には穴があるし、そして、その中心部では2人がバトル展開中という、通常家庭では有り得ない光景を目にしている。

「…………死ね。」

「おわっ!」

その時、作者はアヤメのチェンソーでの突きを避け、避けたがために後ろにいた隼人に、正確には隼人の右足に迫った。

これから人間の足解体ショーが行われるかと誰もが思ったが、

その足は、ちゃんと稼動しているチェンソーを受け止めてしまった。

「…………。」

「…………は?」

アヤメも驚きだが、隼人の方が驚きだ。

しかし、この右足の『力』、どうも幽霊屋敷での一件と酷似してい

る。

「……ま、またこれかよ……。どうなってんだ俺の足は――――！！」

「ま、まあ、斬られなかったし良かったんじゃない？」

「そ、そうですよ。」

マホとカゲロウが隼人に言う。

「ま、不気味といえば不気味だが、そういう能力があって助かったなア。それはそれで良いんじゃないの。」

「ま、まあな……。」

とりあえず、チェーンソーから離れる隼人。

「で、どうすんだこの家――！」

『私は知らん。』

（ぼ、僕も。）

「お前らが原因だろうが！」

だーもう！と隼人が頭を掻き<sup>むし</sup>耄る。

と、ここでふと作戦が思い浮かんだ。

「……そうだ、あの猫、あいつを使えばいいんじゃないか？」

隼人は提案したが、マホは首を横に振る。

「いや、駄目だよ。多分今日はお休み中。」

「………どういことですか、それ？」

カゲロウが質問するが、

『簡単なことだ。そういった神様達にも休暇があるってことだ。ま、休む日にちは神によってまちまちらしいがな。』

そういうことらしい。

因みに、それと酷似したものと、『モーセの十戒』の『安息日を憶えて、これを聖とせよ。主は、六日のうちに、天と地と海とその中のすべてのものを造って七日目に休まれたからである』というものである。

しかし、これに則らない神もいるらしいが。

何はともあれ、時猫は呼び出せない。

「じゃあ、一生このまんまか？」

隼人が叫ぶが、

(……仕方ない。スタッフリカバリー物体再生。)

作者がそう言ってから損傷部分やぐちゃぐちゃに配置された家具に触れると、一瞬にして痕が無くなったり、元の位置に戻ったりした。全員は、呆然としてそれを眺めていた。

(んじゃ、帰りまゝす。)

そんな声と共に、作者はいつの間にか消えていった。

「……すげー、全部元通り。……って、あれ？テレビは？」

そういった途端、こっそりと逃げようとする犯人が1人。

「……マホ、ちょっと待て。」

「……はい。」

「全部説明してもらおうか。」

「……仰せのままに。」

と、説明をした後、すでに血に塗れたテレビを取り戻しに行った隼人とマホなのだった。

「うう、お前らのせいだ。呪う、呪ってみせる……。」

と、怖い顔をしながら（もとい、血が流れ、顔が変形しているからだ）言ったが、案の定無視された悲しき被害者の影士だった。

program 11 家漁り（後編）（後書き）

アヤメ『……お前、あの能力は反則だろ。』

ん？この小説での設定上、『異界』って所に住んでることになってるから。僕みたいなぶっ飛んだ能力を持つ奴ならたくさんいたりするよ？

マホ「むむつ、第3の世界？」

まあ、そうだけど、それについてはいつになるかは分からないけど、その内詳しく出るよ、うん。

隼人「……それより、この血塗れのテレビ、何とかしてくれないか？」

よし、強制終了、というわけでまた次回！

隼人「え、ちょ（略）」

## s e c r e t   p r o g r a m   2   人物紹介（1）（前書き）

さてさて、正直登場してくるキャラも多くなってきたところで、キ  
ヤラ紹介です！

今回は、隼人の家に住んでいる奴らの紹介。

## secret program 2 人物紹介(1)

さあ、今回は人物紹介です。

という訳で、まずは隼人から。主人公ですから。まあ、出番少なくなってきたですけど、これからはなるべく増やします(汗)

name: 小倉 隼人  
おくら はやと

age: 17

sex: 男

birthday: 5/20

detail: 惑星高校に通う2年生。父親譲りで機械面には強いが、良作を作るかどうかの確立は半々。

なぜかよく転ぶが、その代わりに右足には刃物で切れないという不思議な力が宿っている。

父は他界、母と妹は日本国にいないため、1人暮らしだったが、今は結構な人数がいる。

looks: 身長は168センチ、体重は59キロ。黒い短髪で、

瞳も黒。顔は中の上。

his favorite thing: タイヤキ

his hate thing: 蛇

his word: 「……誰か、俺の家の脅迫犯達を静めてくれ……」

……」

次はアヤメ。

……何故か、殺気を向けてきてるのは気のせいだと思いたい……。

隼人「気のせいじゃないと思うがな。これは本気だ、オーラで分か

る。」

……え!?

隼人「でも、お前結構チートなんだろう? やっちゃえば良いじゃないか。」

いや、ここで暴れるのもちよつとね……。では、紹介です。

name:アヤメ(MG-564)

age:17

sex:女

birthday:不明

detail:どこかの星より飛来してきた『最も人間に近い殺人ロボット』。男口調で、感情もほとんど無く、攻撃は一切効かなかったり、腕を武器に変形させたりとかなりイレギュラーな能力を持っている。また、これ以外にも力はあるようだが、今は伏せておくことにする。

常に誰かを殺すかダメージを与えないと気が済まないようプログラムのされているのか、確実にそれを毎日実行している。しかし、殺さなくなっただけでもかなりの進歩だろう。

looks:黒く綺麗な長髪に、スタイルの良い体を持ち、顔は上の中。しかし、瞳だけは何の感情も秘められていない漆黒のものである。

her favorite thing:虐殺

her hate thing:退屈な時間

her word:『……殺気は気のせいじゃないぞ、今すぐこつ

ちに来て殺される。』

お願い、にっこり笑顔で言わないで怖いから……（汗）

アヤメ『どういう殺され方が好みだ？言ってみろ。』

いやいやいやいや！

アヤメ『そうか、では（ピー）の後に（ピー）をして、（ズキューン）をするか。』

おい、今規制音入りまくったぞ？

もう、こいつには何にも効かないから逃げるが勝ち！！

さて、次はマホですってギヤアアアアアアアア！！！！？？

name:マホメット「オルドラン（愛称 マホ）

age:17（人間年齢）、347（魔族年齢）

sex:女

birthday:4/4

detail:魔界から来た少女。来た理由は「魔界が退屈だったから」。ある程度の全ての魔法は使うことが出来、そのため困ったことがあるとすぐに魔法や魔道具に頼ることが多い。性格は明るく、また、アヤメにはよく虐待（？）を受けている。基本は戦闘は強いらしい。また、記憶力も良く、地上に来て僅か数時間で辞書を全て覚えてしまった程。

looks:少々長めの金髪に、緑色の瞳を持つ。一口に言えば西洋美人である。顔は上の上。

her favorite thing: 時猫。

her hate thing: 幽霊らしい。

her word: 「ヤッホ」これからよろしきゅ!?!?.....おへはいひまふ(お願いします)(泣)「

あ、噛んだ(汗)

マホ「痛い~~~~(涙)「

大丈夫だって。それに、回復魔法も使えるんだから(汗)

マホ「あ、ひょうは(そうか)「

.....では次はカゲロウとサクリファイス。

name: カゲロウ

age: 享年17

sex: 女

birthday: 7/7

detail: 死んだ少女の霊だが、サクリファイスの力により現在にはほぼ実体化している。元々は普通の女子高生だったが、酷いじめにより飛び降り自殺をする。語尾は常に丁寧語で、間延びした声で話すため、おっとりしたイメージをもたれることが多い。また、幽霊屋敷編では本を読んでいたことから、趣味は読書だろうと思われるが、お気に入りの本は未だ幽霊屋敷の瓦礫の下。サクリファイスが憑依しているため、魔法が使える。

looks：黒い長髪で、赤色の瞳を持ち、肌は有り得ないほど白い。顔は上の中。

her favorite thing：人と話すこと

her hate thing：幽霊

her word：「どうも」。皆さん仲良くしてください。」

name：サクリファイス

age：???

sex：男

birthday：???

detail：魔人。現在は魂をカゲロウに宿し、文字通り2人で1つとなっている。が、普段は意識の奥底で眠っている。魂を宿す理由は、カゲロウが2度と死の淵まで追い詰められないように「犠牲(sacrifice)」となって戦うからである。

カゲロウとは話し方がはつきり分かれており、また意識が変わるときは髪が赤く染まる。戦闘能力は格段に跳ね上がり、魔法も覚えてる限りなら全て使えるようになる。戦闘時は一切加減が無いが、魂を宿した理由から分かるように、案外情もあつたりする。

looks：???

his favorite thing：戦闘

his hate thing：敗北、カゲロウへの精神的ダメージを与える人間

his word：『最近暴れてねえからな、誰でもいいから戦え！』

……後で僕が相手してやるから（汗）  
さて、後はいないよね？

ホリユウ「オイ！」

ではでは♪

ホリユウ「噛み殺す!!」

……ノードメージ 反射能力（全ての攻撃を反射する能力。その力の強大さゆえ体力の消耗が激しく、1日5回が限度）。

ホリユウ「がつ!?!」

あ、歯折れた（笑）

ま、それはほつといて、何かうるさくなりそうなのでやっぱり紹介へ。

name：ホリユウ

age：恐らく4、5歳？

sex：オス

birthday：1/21

detail：白い、柴犬に似た犬。小さい頃に食料を得ようと様々なものを食っていった結果、歯は有り得ないほど丈夫になり、胃もかなり頑丈に。「ふざけんじゃねエよッ!」のように、長母音と「ん」、「っ」がカタカナ表記である。喋る言葉もかなり物騒だったり。

looks：白い柴犬。以上。

his favorite thing：食うこと。

his hate thing：空腹。

h i s w o r d : 「……あのクソ作者、いつか絶対に殺す……！」

やれるものならやってみなさい♪

「ンだとコラア……！」

ドッヘルゲンガー  
自己多数（自分の分身を最大100万體まで作る技。ただし、ダメージをある程度喰らうと分身は消滅する）。

「……ッ！どこ行きやがったア！」

……では、今日はこの辺で失礼します（笑）

program 12 意味不明な暴走

隼人の家を漁る騒動があつた次の日。

今日は……、何曜日？

「聞くなよ……。」

いや、だって小説内だと一切分からないもん、曜日とか日付も。

「ふわ……、月曜日から日曜日のどれかだ。」

……  
タッチカット  
触部裂傷で切り刻むよ？

「わ、分かったよ……。……あれ？金曜日？」

あ、そうだ、時間の流れを変えたんだっけ♪

「もう何でも有りだなオイ。」

いいじゃん。ってか、本編に戻らなくては。

そんなこんなで、今日も学校である。しかも、一週間で最後の。  
そんな日は休日に目を向けて、何をしようかなど考える人もいる

だろう。いなかったらゴメンナサイ……。しかし、隼人の家に平穏などあるはず無く。

……。

……。

……。

……。

……。

…… 平穏はあった。

「……あれ？」

いつもなら、朝からパワー全快でアヤメが朝の目覚まし係を（自主的に）しているのだが、今日は無い。それどころか、物音1つしない。

「どうしたんだ？」

と、食事の用意をやめ、寝室へと足を運んでみる。まだ寝ているのか、扉を開けると、

やはり、マホとカゲロウが地面で雑魚寝をしていた。

マホは、もはやパジャマがめくれ上がってへそが見えているし、カ

ゲロウはマホの足を枕にして布団をかぶらずに寝ている。

「……………え〜と、起きろ〜。」

初めは声をかけてみるが、当然返事は無い。  
そして、

「……………、やっぱり、アヤメが来ない。」

一体全体、どうしたことだろう。

そう思っ、充電機械があるところに行ってみる。  
隼人は薄々気付いていたが、アヤメは、一度受電すれば500年は大丈夫と言っていたが、それは何もしなければの話。腕を武器に変えたり、攻撃を防いだりするのにも恐らくエネルギーは使わんじやないか、そう思っ、の結論だった。

そして、その場所に着いた。家の中なので当然10秒ほどで。  
確かに、アヤメはいた。が、動いていない。

「お、お〜い、お茶。」

つまらぬギャグを交えて起こそうとしてみる。  
が、一向に起きない。いや、起きないというよりは、作動しないの  
だろう。

「……………、お〜〜〜〜〜い！」

大声で叫んでみる。

『…………。』

やはり返事は無い。

「こ、これはまずいかな…………？」

隼人が少し慌てたが、今どうこうできる問題じゃないと判断し、そのまま去ろうとした。

が、アヤメが今度は立ち上がった。

「…………！お、起きたのか、アヤメ。」

しかし、返事は無い。

いつもなら、脅迫交じりに剣を突きつけてきそうなのだが。

「だ、大丈夫か？」

その言葉を言った瞬間、アヤメはふらふらと歩き、こう言った。

『a g h e u 8 8 7 k i e d a g a . m i n . m a x . p @ d o k  
i u n i 愛 7 7 4 6 5 H H Y T U I G F J K ルー t h a t i k o f  
i t a 0 0 1 ↓ u 4 4 4 4 4 4 4 4 6 n i k a s i a k w o m  
x k , z / s s 3 3 \$ u u y & a m p ; i & a m p ; % % ……』

突然、意味不明な言語で喋り始めた。

それも機械的に吐かれている。

「お、おい……?」

声をもう一度かけた刹那、

ゴツ、と扉が何らかの銃器によってこじ開けられた。  
そして、そのままアヤメは外へと出て行く。

「……な、何……? ふわあああ~~~~~……。」「  
「何ですか、今の音。」「

眠たげなパジャマ姿の2人が来た。  
が、隼人はすぐ目を逸らした。  
理由は簡単。

「……まず、パジャマのボタンを閉める。」「

え?と2人は自分の着ているパジャマをしてみる。  
カゲロウは問題無かったが、マホは、いつの間にか完全に上のパジャマのボタンを全て開けていて……。  
それが何を意味するかを理解する時間は、そう長くは無かった。

「なっ、え、あああああああっ!?!」

マホは壮絶な速さで後ろ向きになり、顔をトマトのように真っ赤にし  
ながらボタンを閉めていた。  
しかし、そんなことは関係ないカゲロウは隼人に何があったのか聞  
いた。

隼人がかくかくしかじか説明をすると、

「なるほど」。では、アヤメちゃんの暴走を止めればいいんですね。」

「ああ。そういうことになるが。今はどこ行ってるんだか……。」

「と、とりあえず、ご飯食べて、着替えて行こう……?」

「いや、俺学校だし。」

「む、家族より学校ですか?」

「お前らを家族と認識した覚えは無いっ!」

そんな口論の末、結局アヤメを探すのに実力派のマホとカゲロウとホリユウ（強制参加）、隼人は学校に行くことにした。

で、数十分後。

隼人は学校に来た。

正確には、『崩壊している学校』に。

「……は？」

思わずこんな声を上げるしかなかった。

幸い、崩壊した時には誰もいなかったのか、救急車が来ている気配はない。

そんなシリアスな展開が待ち受けているであろう状況に、

「はあ~~~~やあ~~~~とお~~~~う~~~~」

超高速で唯が突っ込んでくる。

が、いつものように受け流す、はずだったが、小石が右足に引っかけ、そのまま仰向けに倒れてしまった。

結果、唯の抱きつき地獄の被害者に。

「うわ~~~~！久々に抱きつけた~~~~！！！」

「ちょ、苦しいっ……。」

身体をぎゅ~~~~と絞められているのか息絶え絶えの声を出す隼人。そこへ、賢がやってきた。

「つてか、唯、朝からハイテンションだな……。」

「え？こんなの普通だよ。」

「じゃあ、ハイテンションの時はとんだけ凄いんだよ。」

「地球が響くくらい……！」

「自信を持って言うな逆に怖いから。」

ため息をつく、賢はこう切り出した。

「で、どう思うこの惨状。」

「だ、から、くる、し……。ごえつ。」

「きゃ、きゃああああ！？泡吹いたあああああ！？」

「絞めすぎだ馬鹿。」

「ば、馬鹿じゃないもん！！」

唯が反論しようとするが、

「ククク、確かにこれはやりすぎですねえ……。」

……何だかこのまま隼人が実験動物にされそうな勢いの笑みを見せるマッドサイエンティスト、健哉が言う。

「しかし、これで強制回復！滋養効果の強い薬、名づけて『ホトケ in the ジゴク』！」

「もうちょいましなネーミング付けろや。」

賢が最もな意見を出し、

「そうよ。それにあなたの発明品のことだし、万一悪化したらどうすんの？」

……学校内では珍しく、全身を赤色の服で染めている少女が言う。

次いで、その隣にいる七本の刀を持ち、直垂に括袴をはく平安時代の服装を着る男も。

「拙者もそう思うとった。それはやめた方がええ。」

その男は、何故か武士（<sup>まが</sup>紛い）の口調で喋った。

「何を言うか、<sup>ふみよし</sup>文吉君に<sup>かれん</sup>華蓮君。この薬の効果はミミズで実験済み

だよ。」

「だから、それがいけないんだってば。」

全身を赤色の服で着込んだ少女、きりさき かれん切裂華蓮は抗議するが、

「待て待て、今はそんな話する場合じゃなかるうが。」

武士紛い口調で話す七本刀を持つ男、おだふみよし織田文吉は崩壊した学校を親指で指しながら言う。

「ああ、崩壊した学校を何とかしなきゃな。」

「……それより、たす、け……。」

隼人はまだ息絶え絶えである。こんなんで大丈夫なのだろうか？

「まったく、そんなの軽いもんじゃねえか。」

隼人が痛みに悶えていると、突如そんな声が頭上から聞こえた。そこを見ると、

全身包帯を巻き、杖をついているミイラがいた。

「な、何奴！そんおそがい（恐ろしい）格好しておって！」

もはや方言ぐっちゃぐちゃの文吉が言うが、確かに、恐ろしい。隼人など、痛みのせいもあるがまったく動けない。つか、100%怪我のせい。

「俺は、影士だ。……何か色々怪我しまくったらこんななつちま  
つたんだよ。」

「そうか、それは失敬。だが、今はそんなことに目を向けるわけに  
もいかん。」

「何で、って何で学校がアアアア!？」

「うるせえ、殴り飛ばすぞ！」

そこに、大助が殴り込み。ええ、文字通り『殴り』込み。

「え、ちよつ、」

その後に悲鳴を上げたが、割愛させてもらおう（笑）

「しかし、どうするよ?」

賢が全員に聞く。

確かに、どうにかしないと授業どころではなくなってしまう。

「どうするもこうするも、拙者は犯人を見つけ出すまで！」

文吉は校門から外へと飛び出して行ってしまった。

そして、他の人も何かいかがわしい武器を持って犯人を捜しに出て  
行ってしまった。

という訳で、全員で搜索スタート。

ついでに町の人々にも協力していただきました。

という訳で、総動員で暴れん坊のアヤメを探しに行くことになった。ついでに、隼人は死にかけの影士を担いで、路上に置き去りにしたとか。

そして、破壊神と化したアヤメは今、幽霊屋敷のところであつていた。  
まさにその時。

「おい、ネーちゃん。」

背後から、暴力団の1人が声をかけてきた。  
その暴力団の総数は100人ほど。全員が何かしらの武器を持っている。

「お前、金持つてるか？俺たち生活に困ってんだよ。」

アヤメは、この言葉に首をかしげ、そのままどこかへと立ち去ろうとする。

が、暴力団は当然このような態度は許さないため、数人が鉄パイプでアヤメを殴った。

その鉄パイプで、体は歪んだであろう。

アヤメが、人間ならばの話だが。  
鉄パイプのほうに逆に拉げ、もはや武器として使い物にならなくな  
った。勿論、アヤメは無傷だ。

「クソ……。なめんにやよ！」

少々噛んだ暴力団が、拳銃を取り出して（銃刀法違反が無いため規  
制は受けない）、アヤメに照準を定める。  
そして、撃った。

銃弾は、アヤメの体に当たり、跳ね返って男の腹をぶち抜いた。

「が、アアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

腹を両手で抑えてうずくまる男。  
病院へ行けば何とか直るであろう傷であったが、結構深い。  
そして、その様子にうるたえた他の暴力団どもは、

『.....uyakueknptleaogjakjfdlマイオスuj  
em.z.kjdfoweaw:ディー¥opi0340-8231

```
dsjfkj;as/8349awjkjlkurアンテイep@
ewja:::["@::"]fjjkasdfjuoieゴノサ
jflajel[!;!;!]
```

訳の分からない『声』と、痛みを苦しむ『声』が響き、数秒でその場は大人しくなった。

アヤメは、『ゴミ』という名の元人間を踏みながら、次なる地点へと目指す。

program 12 意味不明な暴走（後書き）

さあ、一体アヤメはどうなってしまったのか？

隼人「つーか、あんな強かったのか？」

さあ？

まあ、これからは新キャラを出しつつ、アヤメの暴走も止めていくという方針で。

という訳で、新キャラがまだ出てくるはずです。

隼人「自分で言うておいてその不明瞭な回答は何だ！？」

気にしない気にしない♪

では、次回もお楽しみに！

### program 13 迎撃&反撃開始

「マホとカゲロウとホリユウ」

その頃、このチームは相変わらずアヤメを探していた。

探し始めて、まだ10分しか経っていないが、色々なところが大破しているのを見ると、被害は相当なものだ。

「ど、どこ行つたのかな……？」

「わ、分からないですけど、この暴走痕を辿っていけば良いんじゃないですか？」

「同感だが、」

ホリユウは、そこで言葉を止め、そして言った。

「会って、勝てんのか？あの化け物に。」

……そう、あの最強となった怪物をとめるには、今ここに在る戦力だけでは足りない。足りなさ過ぎる。

「……無理、だよね……？」

「でも、それでも見つけなきゃまた被害が出てしまいますよー！！」

カゲロウが急かす。

『しっかしよ、さすがに俺は戦いたくないな。ここにいる奴も、カゲロウを除いては戦ったことあるから実力が分かるしな。』

サクリファイスが体から『声』だけを出す。

「そんな弱気で良いんですか！？毎日暴力紛いのことは受けてますが、それでも、曲がりなりにも、仲間ですよ、家族ですよ！見捨てろって言うんですかっ！」

『……気持ちとしちゃ良く分かるが、死んだら元も子もないぞ？』  
「確かにア。」

時が経つにつれて、いつの間にか雰囲気は重くなっていた。

今は、誰一人口を開いていない。  
そんな時。

町中全員が武器やら戦車やらを使って、アヤメを探しているのが200メートル前方で視界に入った。

暴力団でもやっていけそうなくらい気迫が凄かった。

それくらい凄い集団を目にした3人、もとい2人と1匹は、そこに駆けていった。

そして、その暴徒に隼人は組み込まれていた。

参加した、ではなく、あくまでも『組み込まれた』のである。

「この町破壊の元凶は何処いずこにつ!?!」

武士紛いの文吉を先頭にし、元凶、即ちアヤメすなわを探す。

「……しかし、こんなに人動員するってやっぱおかしいだろ、この町。」

そんな状況に1人取り残されたような気分になっている隼人が愚痴をこぼした。

確かに、1人に対してこの量。普通の町ではありえない。

「でも、楽しいじゃん、皆で行動するって。」

隼人と併走している唯が無邪気に笑って隼人に言う。

「まあ、そうだけどな……。」

そんな中、先頭の文吉は、ターゲットを発見した。

「おつた!」

文吉はその元凶に向かって刀を抜いて突進していった。その数、両手に一本ずつ。

「おおおおおおおっ!!」

文吉はアヤメの体の肩に刀を入れ、攻撃の手段を絶とうとした。

しかし、相手はあのアヤメである。

その刀の方が、軽快な音を立てて折れてしまった。

「何っ!？」

文吉は、向かってくるチェーンソーに刀を当てて、その反動で身を退く。

「くっ!」

「ククク、ここでようやくこいつの出番だ……。超熱光線発射アアアアアッ!!!!!!!!!!」

健哉がいつの間に文吉の前に出て、怪しげな銃から怪しげな赤いビームを出し、アヤメに向かって発射した。

さすが、前科何犯かある男。命を奪うことにためらいが無い。いや、それも人間的に見るとどうなのかという話だが。

しかし、そのビームも跳ね返されて、銃に向かう。

「ふむ。」

ビームを跳ね返すのを見て興味深そうに頷きながらその光線を避け

た。

その光線は人を掻き分けて、真っ先に唯の下へ。

「へ？」

唯が間拔けな声を出した瞬間、怪しげな熱光線が唯に襲い掛かった。

しかし、間一髪で隼人が右足をその光線に当てる。

人体だったらその足は見事に溶けただろう。

だが、隼人の右足はそんなに柔<sup>やわ</sup>ではない。その光線をあるうことが打ち消してしまったのだ。

「……一種の賭けだったな、剣が防げるならこれも防げる、と思っただけだし。」

その証拠に、隼人はかなり息が上がっている。  
そして、唯は、

「……………は~~~~や~~~~と~~~~」

思いつきり抱きついた。ボキボキと嫌な音が鳴ったのは気にしない。そして、小説を書いていて初めて♪を二度使ったのも気にしない。

『k s g k r s i e n n e > 』: @: i s h i e k s l t y r y. 』

またも訳の分からぬ言葉を発する。

すると、手近にある家を、片手をレーザー砲台で抹消し、そのままふらふらとした動きで走り去る。

それを追いかける、2名を除く全員。

「……い、いい加減離れろ……、ゴハッ。」

そして、口から泡を吹いて見事にK.O。

さすがに唯も解放したが、時既に遅し。目覚めたのは、それから30分後のことだった。

マホ達は、家が爆発するのを見ると、集団に向かうのを止めてそこに向かって行った。

その数百メートル離れた場所に、案の定アヤメがいた。

『.:@.:@:「.:」080"，&%（\$』

今は両手をマイクロマニピュレーターみたいなものに変えて立って

いる。

そして、先に動いたのはマホだった。

「いくよ！魔界術・七十二 馬鹿力！」

マホは、手近にある瓦礫を片手で掴み、投げ始めた。

しかし、アヤメが怪しげな手を迫り来る瓦礫に向かって差し出すと、

一瞬にして塵になった。

正確には、手からレーザーのようなものを出し、それで消し飛ばした。

「ええっ！？」

そして、その手でマホの体に触れようとする。

咄嗟に体を捻ってかわすと、

「隙有り！魔界術・一 放炎！ほうえん」

マホは右手から炎を生み出し、アヤメに向かって撃つ。

これでアヤメとの距離は取れたが、アヤメにダメージは無い。

さらに、岩を一瞬で塵にした極悪の両手をマホに向けて走ってくる。

「させません！」

カゲロウもアヤメに向かい、影でヤマタノオロチを創ってアヤメに

当てる。

が、それは全く効かず、体に当たったものの傷1つ付かない。そして、今までマホに集中していたのを、カゲロウに集中させ始める。そしてレーザーを放とうとしたが、

「オラオラア、こっちにもいるぞオ!!!」

ホリユウは、その隙を狙って電柱を何本も口に咥えて投げつけ始めた。

しかし、カゲロウに向けて放とうとした正体不明のレーザーによって消されてしまう。

そして、アヤメはホリユウを殴り飛ばす。

「何で俺だけ当たってんだよオ!？」

自分だけ真っ先にぶん殴られたことに不平をこぼしつつ、痛みをこらえるホリユウ。

マホが、このままでは埒があかないと思い、

「くっ、魔界術・八十五 添削壁!」

至る所に壁を作り始めた。高さは優に5メートルは超えている。

(これでこっちの居場所は分からないはず……!)

しかし、その考えについては誤算がある。

あちらがこちらを見れないというのは、逆も成り立つ。つまり、攻撃がどこから来るか分からないのだ。

その時、壁は一瞬にして何枚も消滅した。

もっと言えば、何か光線のようなものが飛んできて、それが壁を消

したのだ。

そして、それはマホにも向かう。

「……嘘！？魔界術・十五 変転！<sup>へんてん</sup>」

マホは、魔法で、そこらにあつた瓦礫と自分の位置を交換した。

そのため、光線は瓦礫に当たり、それは塵と化すが、いつまでもつか分らない。

アヤメは、そのままマホを殺そうとするも、

「おらアッ！」

ホリユウが、マホの立てた巨壁を噛んで掴み、アヤメに放り投げる。その巨大な凶器が、

アヤメではなく、周りに牙をむく。

「ぐっ！」

マホはアヤメに当たって砕け散った壁の破片を受け、後ろに飛ばされた。さらに追撃をする為にアヤメは、マイクロマニピュレーターから、全てを滅する光線をマホに放つ。

恐らく、先程からマホを中心に攻撃されているので、危険だと判断されたからだろう。

マホは光線を避けようとするも、さっきの瓦礫による襲撃で、尻餅をついてしまった為、立てないまま攻撃を受けることになる。

だが、

「させません！」

カゲロウがアヤメの体にタックルし、光線の軌道をずらした。

『……！』

アヤメがカゲロウを攻撃しようすると、何かが腕を掴んだ。

「噛めなくても、投げ飛ばすなら造作も無いことだよなア！！」

そのまま、ホリユウは顎でアヤメを投げ飛ばす。

アヤメはそのまま後退し、埒があかないと思ったのか家という名の障害を碎いてまた去っていく。

しかし、既にマイクロマニピュレーターからチェインソーに両手を変えていたアヤメに逃げることは許されなかった。

七星市市民が武器を持って目の前にいた。

今は、「分割した方が探しやすいよね」と今更かよと思うほど遅い考えにより、いくつかのグループに分かれている。

その一班と運悪く遭遇したのだ。

「……ようやく見つけたわよ……。」

その先頭に立つのは、赤い短髪と浅黒い肌を持つ美少女、切裂華蓮だった。

その手には、いや正確には指と指の間には、一本ずつ小さめのナイフを持っていた。

「さっきの文吉との戦闘見たけど、ここまで殺しがいい有这样的な奴は初めてよ。」

そして、そのナイフを投げようとする動作を見せ、言った。

「……だから、あなたの内臓抉り出して家に飾りたいの。」

につこりと笑って、ナイフをアヤメに投げつける。

が、当然アヤメは飛んできたナイフを全てチェーンソーで弾き返した。

「うふ、やっぱり殺しがいいがあるわ……。」

弾き返されたナイフを、華蓮は正確に一本ずつ素手で取った。この行為からすると、ナイフの扱いには相当慣れているらしい。

「でも、その程度じゃ私に殺されるのも時間の問題ってものよ!」

華蓮はまたナイフを投げつける。先ほどの2倍の量のものをだ。さらに、同じ班で、八百屋を営む平野が片手で次々とアヤメの作った瓦礫をかなりの速度で投げ始める。その攻撃を防ごうとしたアヤ

メだったが、影で作られたサーベルによって邪魔されてしまう。  
その主は、もちろんカゲロウだった。  
今はサクリファイスに入れ替わっているが。

「死ね、化け物がっ！」

『あ、アヤメさんをそんな呼び方で呼ばないで下さいよ！！』

サクリファイスはシャドーサーベルをアヤメに当てる。

アヤメは、その攻撃を剣で防ぐも、襲い掛かる瓦礫とナイフは避けられなかった。

その間に、他の班も到着し、

「喰らえっ！超熱光————線——！」

「織田の名にかけて、貴様を成敗する！」

「悪いけど、倒させてもらっ！」

「……行くわよ。」

「魔界術・二十七 地没<sup>ちぼつ</sup>——！」

「この、くそツたれがア——！さッき殴られた罰を（ry ツてか、  
何で略され（ry」

「そろそろバラバラになりなさい！」

「可哀想だけど、潰してあげるわ」

「お、俺、何すりゃ良いんだよ……。」

台詞順に、健哉が先ほどの光線を放ち、文吉が剣を持ってアヤメに  
迫り、本条が武器屋にあるマシンガンをぶっ放し、菊池がゆらゆら  
と揺れながらパンチを繰り出しに行き、マホがアヤメの立つ地面を  
沈ませて身動きを取れなくし、略されまくったホリユウが歯で尖ら  
せたガードレールを投げつけ、華蓮が追加でナイフを投げ、平野は  
瓦礫を投げ続け、賢は……、うん、何もしていない。  
しかし、これはいい案かもしれない。

さっきの戦いを見れば分かるように、マホとカゲロウとホリユウに攻められた時、1人にしか注意を向けていない、いや向けられないそれはつまり、『1人にしか狙いを定めて殺しの対象にしか出来ない』ということに等しい。だから、1人ずつの攻撃を悉く受けていたのだ。

今回はかなりの数の攻撃が迫っているので、防ぎきれないだろう。向かってくる文吉と菊池を迎撃出来たは良いものの、他の攻撃は防ぎきれずに当たってしまった。

そして、全ての攻撃が当たった途端、アヤメを中心に膨大な爆発を起こして煙と炎を撒き散らす。

「や、やりおったか……？」

文吉はその爆心地を覗こうとするが、

そこから出てきた淡く赤色に光る刃で、腕を貫かれた。  
その主は、アヤメ。

「が、あああああああ！？」

文吉はそこから無理矢理身を退いて、剣を抜く。  
しかし、

「まだやるのね……。」

華蓮はその状況を見てもニヤリと笑ってナイフを構えている。  
他の者もそれに続いて臨戦体勢をとる。  
そして、

「ちくしょ、唯、後で覚えてろよ……。」

「いやー怖いー」

唯に連れられてやって来た全く目立たぬ主人公、隼人と唯の姿が見えた。

「遅い。貴様の所の奴だろう。早く止めてくれ。」

「ああ、でもアヤメは強すぎる。だから、皆協力してくれ！」

隼人の願いに対する返答は、親指を立てた右手だった。

「ありがとう！」

「当然だろ。同じ市民なんだからよ！」

「さあ、行きますよ！」

その声を合図に全員、アヤメに向かって攻撃を開始する。

### program 13 迎撃&反撃開始（後書き）

今回は珍しく5000文字の手前まで書きました（汗）いや、疲れた……。

隼人「つつか、やっぱり目立ってないよな、俺。」

主人公なのにね（笑）

大丈夫、次回は多分出番増えるから。

隼人「マジで!?!」

でも、殺される確率が高くなるのは覚悟しておいてね、

隼人「……。」

では！

program 14 終戦（前書き）

この作品が何故か極度のスランプに陥り、2ヶ月もブランクが……  
（汗）

後は、若干詰め込みすぎた感が……（汗）

マホ「うーん、まあ、気長に行こうよ」

……うん、そんなこと言ってくれたのお前が初めてだよ。  
では、今回で終戦ですよ。

## program 14 終戦

小さな町での、大規模な衝突。

今まさに、町の歴史に残るほどの大バトルが始まる。

今現在、アヤメとその他大勢が対峙していた。

「その他大勢って何だよ。」

賢、つまらないことに突っ込んでる暇あったら、前見る前。

「え？」

そして、いいとこないまま、賢はその他大勢軍団によって踏み潰されていった。

「くそ、俺って、一体……？」

「お、俺の仲間が、いた……。」

そして、置いていかれたはずの影士が戦場に来て同じく踏み潰されたのか、倒れていた。

「お前の仲間には、なりたくなかった……、がくつ。」  
「そ、それ、何気に酷」

はい、作者権限で強制終了

そんな訳で、本題へ戻そう。

「酷iiiiiiiiiiii!!!」

何か絶叫が聞こえたが、そんなのは全員気にしない。

そして、文吉は刀、華蓮はナイフでアヤメに斬りかかる。

「はあああああつ!」

「てやあああああつ!」

ほぼ同タイミングでアヤメを斬りつける。

しかし、そんなのは全く意味を成さない。

逆にアヤメに斬り返されてしまった。

「くつ!」

「うあつ!?!」

文吉は勘でそれを読み取ったのか、斬り返される前に後退し、華蓮はそれはできなかったものの、服の下に仕込んだ大量のナイフによって身を守った。

「はあああつ!」

『f u k i / i i . t o / n n n n b a & a m p ; h e o y o t u  
k a h j f o l u a i e % s u 』

その隙に背後から日本武道……、柔道や空手をしている人達がアヤメに襲い掛かるが、全員アヤメに腹を殴られ、昏倒されていく。

「ふふふ、これは第二号の登場だなッ！」

すると突然、健哉が分かる人には分かる危険ワードを放った。

「出でよ、『ハウス・ウォーカー』!!」

……全員が言葉を失い、アヤメの後ろを見た。  
いつの間に作ったんだ、全員が共通して思った。

そこには、改造されて作られた、直立二足歩行する家が。

「踏み潰せええええ!!」

そして、容赦も無くりモコンで、『踏み潰す』というそのまんまの  
言葉が書かれたボタンを押す。  
家は、目の前にいるアヤメを踏み潰す。

だが、アヤメはそれを指1本で受け止める。

「何!？」

『you ekluahelui ajkdalueamclz / j  
ealuil; ¥: o145%\$, \*+?』

言葉にならない言葉を発して、家の足をこんと叩く。  
すると、家はたちまち輝<sup>ひび</sup>が入り、崩壊した。

「くそっ!!」

健哉は、先程の超熱光線とやらを、銃から発射した。

案の定、1発目と同じ運命を辿る2発目の光線。

またも健哉は軽い身のこなしで避け、その隙にレーザーの当たらない位置にいる健哉の後ろにいた、マシンガンを持った男2人がアヤメに向かって掃射をする。

『gurtha?turhoiuljmlailulea&am  
KUYGKU IU』

アヤメはまたも訳の分からぬ言葉を吐き出し、素手で殆ど<sup>ほとん</sup>の弾丸を受け止めた。

そして、素手で投げ返す。それも、銃で撃ったときと同等のスピードで。

男2人は凶弾に倒れそうになる。  
が、

「何してんの！魔界術・二十三 氷晶突<sup>ひょうしゅうつ</sup>！！」

すると、その二人の前に巨大な氷柱が立ち、銃弾を弾いた。

「す、すげえ……。」

男は、その未知の力にただただ感嘆していた。  
が、マホはそんなことを気にせずアヤメに向かう。

「魔界術・十七 値定<sup>ちてい</sup>！」

それを叫んだが、マホには何の変化も無かった。

『mhr yuakluealk ejaklfai ofk ajfla

wjgoualfaelifewalijfe.i」

いきなりアヤメが古典的な技、目からレーザーをやったのけた。それは当然、マホへと向かう。  
が、

「そんなもの、『値定』の前では痛くも痒くもないのよ！」  
『hyaourora!?!』

アヤメは、僅かながらに動揺しているようだった。  
それもそのはず、この『値定』という技、『相手から受けるダメージを一定時間のみ最弱に設定する』という、かなりの反則技なのだ。

「いつけ〜！魔界術・二十九 竜閃砲りゅうせんぱう！！」

その『値定』という反則技のお陰で、アヤメの眼前まで迫れたマホは、超至近距離で神々しい光線を撃った。

アヤメは、さすがにその攻撃に吹き飛ばされた。

……その後ろに隼人がいるのをお構い無しに。

「なにiiiiiiii!?!」

『urryieklaeahoi!!』

当然、光線の破壊力はアヤメが盾になっていて隼人は受けなかったが、その吹き飛ばされる勢いはたまったものじゃなかった。  
そして、隼人の上にアヤメが重なるようにして倒れた。

『……hyouryoaukehallppp』

アヤメは、隼人の上で起き上がり、そのまま剣で俺の首を刺そうと  
していた。

「くっ！」

『qwzxllaoewklu』

そして、剣は隼人の首へと……！

「いやああああああっ！！」

あまりに突然の出来事に唯は絶叫する。  
しかし、

「か、勝手に、殺すなあああああっ！！」

『jyrowlal!?!』

隼人は、辛うじて生き延びた。

剣が迫る直前に首を横へ動かし、その一撃を逃れられたのだ。  
だが、危機的状況は続いている。

だから、アヤメは今、剣を地から引き抜き、もう一度止めを刺そう  
と狙っている。

「……おい。」

そこで。

隼人は、届くはずも無い言葉をアヤメに浴びせる。

「お前、人、殺して楽しいかよ？」

それでも、言う。

「何が楽しいんだ？言ってみろよ。」

その言葉の後、アヤメはもう一度剣を隼人の首へと刺した。

はずだった。

剣は、俺の首に当たる前に止まっていた。

『／／uyrroa……た、のshik、nanka、nai  
……。』

やっと、言葉が聞こえた。

機械の言葉も混じっているが、人間の言葉が。

『ただ、プログラ、ムに、kumiこmaryuteourak  
leuajfajl；uiafjio；ijaf；pfjpawj  
fe；ftjireufjoiafjioefioaifohje  
aofhjejio！！！！』

だが、それを統制するかのように、アヤメは言葉を吐く。  
そして、剣を再び刺そうと試みる。

ズブツ、と。

隼人の手から音がした。

『??????』

アヤメは、頭に疑問符を浮かべた。

「死んでたまるかよ……。」

隼人は、言う。

苦痛の表情を浮かべて。

「ここで、死んでたまるかってんだよ！」

そして、血塗れの手で、剣を横へと遣る。

それにつられたアヤメも、ようやく隼人の体から離れる。

『……j h y r u a k u ￥ ￥ ￥ ￥ / / ころ、サナきや……。 p r o  
g r a m が……。命令、ヲ……。』

そして、アヤメがそんなことを言い出した。

そう、プログラム。

全てはその下らないものによって引き起こされていたのだ。

そもそも、このアヤメの目的は、『殺すこと』。プログラムに組まれていて当然だ。

だが、この町を持ってしても、『殺し』は認められていない。

『殺す』こともできず。

『殺す』ことをしなければならず。

そのギャップに、とうとう『プログラムが』耐えられなくなったのか、今回突如暴走したわけだ。

「……お前、いい加減にしろよな。」

しかし、隼人はこう言ってやった。

「最初は俺の家壊すわ、俺を殺そうとするわ、戦っては壊し、殺す殺すと毎日毎日……。」

『. k t k w e o u …… u るさ i ……』

ノイズ混じりの声で、アヤメが、いや、『プログラム』が答える。

『とに k a く、お前、を、殺す!!』

ようやく、ほとんど日本語に戻った時の第一声が、これだった。そして、今度こそ殺される、そう思った。

その時、

ドゴツ、という壮絶な音を立ててアヤメは吹き飛んだ。

『g u w p o e i , l z l k u e i a w l k j u / ? ? .』

アヤメは、何が起こったか全く理解できていなかった。それもそのはず、

「……は?」

やった本人である隼人も、困惑しているのだ。分かるはずはない。だが、これは倒すチャンスである。

「死ね、怪物!!」

『だから、そういう呼び方しないであげてください!!』

『y u s u r……!?!』

アヤメは、サクリファイスの意識を持つカゲロウに漆黒の剣で横に吹き飛ばされた。

「はっ、どうした怪物、お前の力はそんなモンかよオ!!」

サクリファイスは建物の影を操り、蛇の形に変形させる。  
そして、それに命令を下す。

「……《蛇よ、邪の根源を食らうべし》！」

『!……《根源食らえば、龍に成らん》!』

その瞬間、蛇はさらに巨大化し、みるみるうちに全長30メートルの龍となった。

「《根源喰らえよ、黒き蛇》！」

『《貴様はまだまだ龍にあらず》!』

そして、その言葉をきっかけにアヤメへと襲い掛かる。

「す、凄い……。」

「な、何なのよこれ……?」

華蓮がどういふことか分かっているマホに聞く。

「ん?あれは『詠唱魔法』<sup>リーディング</sup>って言って、普通の魔法の数倍から数百倍の威力を持つ魔法を使えるんだよ。」

「へ、へ……。」

華蓮は苦笑いで返答する。

一般の人間では、何を言っているのか理解できないのだろう。

「……でも、詠唱には時間がかかる……？」

「そう、その通り！……って、今の言っただの誰！？」

マホがそうして辺りを見渡そうとすると、辛うじて力負けしてしまったサクリファイスが飛んできて、思いっきり体をぶつける。

「にやつ！？」

「くそがつー！！」

そして、アヤメは迫ってくる。

あれだけの攻撃を受けてもなお、平気だと言うのか。

「厄介でござるな……。」

「そうですね。」

文吉の言葉に平野が答える。

「でも、外傷は少しはあるみたいですよ？」

「……何？それは真か！？」

「ええ。左腕の辺りに沢山。」

言われて、全員が見ると、成る程、確かに防ぎきれずに傷がついているようだ。

このくらい強力な技を出し続ければ、いくら強固な体を持ってしても勝てるのでは……？

「だったら、話は早いわね！」

傍で聞いていた華蓮がナイフを取り出すと、

「……『飛翔せよ、持たれし刃<sup>やいば</sup>。貫けよ、彼の体を。』」  
「え？あれっ！？」

すると、どういうことかナイフがするりと手から抜け、左腕の外傷部分へと全て当たっていく。

火花が散り、傷はさらに深くなった。  
が、当然華蓮は叫ぶ。

「い、今やったの誰！？」  
「……はい。」

背後から返事がしたので、振り返ると、銀色の長髪と緑色の瞳を持ち、傍から見たら倒れてしまつのではというほど病弱そうな体をしている少女がいた。

「ふん、これまた興味深い。お前は何者だ？」  
「……春本。」  
「……は？同姓か？」  
「……後ろ。『身を守りし盾よ、具現化せよ。』」  
「何？」

そう言うってから振り返ると、アヤメが迫ってきていて、しかも右腕を得意とするチェンソーに変えていた。しかし、健哉の前には変な色をしたバリアのようなものが張られ、見事に攻撃を防いでいた。超常現象を前にして、健哉も黙っているしかなかった。

「……ていうか、あんた本当に誰？そんな詠唱、聞いたことが無い

んだけど。」

マホが訝しげに聞くが、

「……そんな暇あったら、前見て前。」

「何を……。って、うひゃあっ!!」

少女の警告のお陰で、何とか何かしらの光線を避けることができ、

「つたく、聞くのは後ね!」

「そうだな、今がチャンスだ。」

マホの言葉に、隼人が返す。

「……居候させている身として、俺が片をつける!」

「援護するよ! 魔界術・六十 風神雷神砲!!」

「ヒヤハッ! 終われよ、アヤメ! ナイトメア・バースト!!」

『ちよっ、そんな強力な技撃たないで下さい!!』

「けッ、俺もやッてやらア!! 電柱当たって気絶しやがれ! ホラよ!!」

隼人達に続くようにして各々も攻撃し始めた。

「いざ、止めを!……火縄銃!!」

「どこから持ってきたそんなモン!？」

「私も、そろそろコレクション増やしたいし……行け、1000本ナイフ!!」

「多いっ! てか、何処に隠し持ってるんだろっな!？」

「柔道暦1日……、我、参らん!!」

「弱いなおい!」

「戦車」ゝ戦車」ゝ」

「誰だ、口ずさみながらドカンドカン大砲で撃ってる奴!!」

「メラ。ーマ!!」

「ドラ。エ!?!?てか、ふざける人多くなってるないか!?!」

「ぎゃあああああああつ!!」

「ああつ、メラ。ーマで柔道暦1日の男が焼かれた!!?!てか、本当に撃ったのかよ!!」

「いや、ただの火炎放射器。」

「つて、健哉、てめえか!」

「火を噴けマシンガン!……だだだだだ、だだだだだ、だだだー、だつたつ。」

「どこからか世にも奇。な物語のオープニングが!てか、そろそろ真面目に……!」

……長くなるので、この先省略。

ツツコミ兼実況は、声だけなら元気そうに聞こえる、実際には皆に踏まれてもう立ち上がれない賢でした。

という訳で、皆上記のようにふざけながらも着々とダメージを与えていく。

それは逆に言えば、ふざけながら戦う余裕が残っているということになる。この町がいかに戦闘慣れした最強の集まりかが分かるだろう。

しかし、

『hiruakroakwao』

アヤメも負けてはいない。

もはや修復不可能な弱点と化した左腕をかばいながらも次々と攻撃をなぎ払っていく。

火縄銃の弾を弾いて逆に火縄銃を爆発させ、ナイフは当たらないように避け、戦車の弾は切り捨て、魔法はすべて体で受け止める。が、しかし、隼人の攻撃だけは受け止めきれない。ただの蹴りのはずなのに。

『jyr uak illk e idie k illhaurkal  
uiwoakz , jka eli wuppqzxvnb sdler!』

それに怒って隼人に突っ込もうとすると、他の奴らが攻撃して次々と邪魔をし、隼人に攻撃の余裕を与えてしまう。そして、

『アヤメエエエエエエッ!』

止めを刺そうと、駆けて来る。

ヤメロ。

クルナ。

プログラムがそう願っても、隼人は迫ってくる。

タスケテ。

タオシテ。

アヤメの本心が願うように、隼人は迫ってくる。

右足を、見間違いかもしれないが、少しばかり光らせながら。

『目エ覚ませエエエエエエエッ!』

そして。

とうとう、アヤメに止めが刺された。

蹴りによってアヤメの体は吹き飛び、町を相当壊してから、ようやく止まり、それ以上動かなかった。

これにて、戦いは終了した。

## program 14 終戦（後書き）

終わった終わった（汗）

今度からは気をつけます……。

今回は、まあ、説明とか事後処理とか色々です。

**p r o g r a m 1 5 戦 闘 後 の お 話 と 開 戦 の 予 感 ( ? ) ( 前 書 き )**

どうも、お久しぶりです（汗）

5ヶ月も放置してしまい、申し訳ありませんでした……。。

## program 15 戦闘後のお話と開戦の予感(?)

ようやく、1体のロボットを押さえる大騒動は幕を下ろし、今は町に平和が戻っていた。

しかし、色々吹き飛んではいるが。

そして、そんな中、隼人達は家でアヤメに話をしていた。

「……お前、自分のしたこと覚えてるか？」

「……ああ、何となくは。私が暴れて、それをこの町人全員で押さえつけたのだろう？」

アヤメは答えた。

「どうやら、ロボットは人間のように、我を失っても記憶は残るらしい。」

「もー、大変だったんだからね!？」

「……く……。」

「おいおい、起きろよ。」

「しっかしよオ、ヤッぱお前化け物だな。」

マホ達も口々に言う。

しかし、隼人はそれを全て無視して、聞きたいことをアヤメに聞いた。

「なあ、お前、『プログラム』とやらを誰に埋められたか分かるか？」

「……知らない。」

「じゃあ、それを破壊することは……。」

「しようとするれば私の身体が飛ぶように出来てる。停止も同理由で

出来ない。他人がやろうとしても、小さすぎて見つけれないだろうしな。』

「うわ、都合のいいプログラムだー……。」

正直な感想をマホはこぼした。

確かにその通りだ。自他共に破壊が不可能なものなのだから。

「……だとすると、また暴走する事も……。」

『有り得ない話ではない。』

「その時は、また止めなければならないのですか……？」

『まあ、頑張れ。』

いやいや、何で上から目線？

隼人達は言葉に出そうとして止めた。どうせ殺されるのがオチだ、と思つて。

『ところで、』

その時、アヤメが尋ねた。

『私は、ここにいられるのか？』

「ああ、その事が……。」

隼人は、その言葉の返答に戸惑っていた。

確かに、これだけの騒ぎを起こして、町にしよう等とは言えまい。が仮に追い返したとしても、ここ以外に居場所はないかもしれない。今、アヤメを居候させられるのは、この町に『そういった』人達が多いからであつて、他の所では恐れられて誰も相手しないかもしれないのだ。

だが、隼人は言つてやった。

「問題ないだろ。今まで通りここに住めよ。」  
「……………」

アヤメは、さすがに首を傾げた。  
何故、そんなことが言えるのか。論理的にも、もうここにはいてはいけないのに。  
そんな疑問に隼人は答える。

「いや、何というか、この町の人々が……………」

そして、隼人はその理由を話し始める。

それは、アヤメとの戦闘を終えて数分経ってからのことだった。

「ふ……………」

隼人は、何とか苦難を乗り切ったという感じで、緊張の糸が切れたのか、尻餅をついてしまった。  
唯が寄ってきて手を貸し、隼人は恥ずかしながらもそれを掴んで何

とか起き上がる。

「何とか、終わったね。」

「ああ……。」

そんな時に、誰かがアヤメを指して言った。

「そういえば、こいつ、どうするの？」

そう。アヤメをこの後どうするか、ということについてだ。

これだけ町を破壊し、町人にも怪我が出来てしまったことに関しては、即刻追い出すべき存在であろう。

あわよくば、今ここで完全に壊してしまってもいいくらいだったが、

「壊さなくていいんじゃない？それに、ここに留めておいても大丈夫でしょ。」

華蓮がそんなことを言い出した。

皆が少し驚きの表情で華蓮を見つめるが、そんなことも気にせず、ただこれだけ言った。

「だって、楽しかったし♪」

その言葉に、町人は。

「……ま、まあ、楽しかった、かな……。」

「俺は楽しかったぜ。あの巨大家型ロボットを稼働できたからなあ！」

「拙者も同じく。久々にこんなに体を動かせたしな。」

と、次々に同意していき、最終的には全員が肯定した。  
まあ、この町の性格ならではだろう。

「んじゃ、隼人。」

そして、賢が隼人に言う。

「こいつを頼むぞ。」

その言葉に、隼人は「ああ。」と言って頷いた。

「……つてことd」

瞬間、顔の横を何かが通り過ぎた。

いや、掠ったという表現が正しいかもしれない。頬には切り傷が出来ていて、そこから少しばかり血が出ている。  
そして、その犯人は勿論。

「……お前、久々にこれかよ!!」

『ふむ、お前の話はもっと簡略化できるのに、わざわざ長い話を聞かせるな。』

「そんなに長くもない!」

『黙れ。焼き肉屋のメニューにでもなりたくなければな。』

その言葉に隼人は謝り、しかしアヤメは容赦なく襲い掛かり、その他の居候達もアヤメから逃げ。

しかし、どこか楽しげだった。

また、いつもの日常が戻ってきたのだから。いや、危険だけど。

「……という訳です。お騒がせしてすみません。」

「いやあ、まあ、いいんじゃないの？」

その頃、とあるボロボロの一軒家にて、1人の若い男と1人の男の老人が椅子に座って対面していた。

関係で言うならば、秘書と市長である。

秘書の方は少し太った、戦闘はからきし出来なさそうな感じの男で、市長の方は老人にしてはよく鍛えられた体を持ち、普通に歩けるどころか走れるので必要のない『かなり重い鉄製の』杖を片手で持つて床をゴン、ゴンと叩く。

秘書はその音に恐怖心を覚えつつも、さらに言葉を続ける。

「それと、判明したことが1つ。」

「ほお、何だねえ？」

市長は尋ね、秘書がそれに淡々と答える。

「小倉隼人。彼の家には、いえ、正確には彼の『地下室』には、3人の居候と1匹の犬がいる模様です。それも、居候達は全員学校に行っていないと……。」

「成る程お。それでえ？」

「そこですね、居候達も早くこの町に溶け込めるよう、いや、もう大分溶け込んでいるみたいですが、一応学校に通わせてみてはいかがかと。戦闘を見ても、中々面白い技を使いましたし。」

「ほお、どんなあ？」

市長は興味を持って興奮してきたのか、杖が床を叩く音がだんだんと強くなっていく。

秘書は怯みつつも伝える。

「まず、今回の騒ぎの発端となった、アヤメ。こいつは腕を武器などに自在に変えたり、一切の攻撃を受け付けないというものです。次に外国人の少女のようなその子はマホメット<sup>すがわいめい</sup>＝オールドラン。通称マホ。菅原瑠璃<sup>すがわいり</sup>のように、どうやら魔法が使えるみたいです。さらにその大人しそうな少女はカゲロウ。この子も魔法を使えますが、どうやら二重人格のような感じで、戦闘時にかなり口調も行動のキレも変わっていました。最後にその柴犬みたいな白い犬はホリユウ。何でも噛み砕き、何でも消化する。1つ前の騒ぎもこいつの仕業です。」

ふむ、と市長は笑みを浮かべながら考え、それから言った。

「分かったあ。そいつらを学校に通わせてみるお。負担はワシが受

け持つう。」

「はい、分かりました。」

「ああ、それとなあ。」

「??？」

秘書は市長に呼び止められたことに疑問符を浮かべ、しかし直ぐに何を言おうとしているのか分かり、少し顔が青ざめる。

「あ、あれは今年はやめた方が……！」

「いやいやあ、今年もやろうぜえ。ワシの暴れる舞台があ、あそこしか無いんだからなあ。」

「し、しかし、さっき言った者達も参加するのは、少々危険では……。」

「構わないぜえ。やろうぜえ。」

「……しかし、」

と、その時、市長は鉄の杖で、床を一思いに突き破った。

バゴツ、と壮絶な音と共に、破片が飛び散る。

これで完全に不意打ちを喰らった秘書は尻餅をつき、しかしそのお陰で鉄の杖が、もし立っていたら男の急所に当たったかもしれないところを頭上が通過していき、後方の壁を壊す。

「やろうぜえ。」

「わ、わわ、分かりました……。」

もう逆らえないと悟った秘書は、涙目でこくこく頷いた。

（ああ、また始まるのか……。どうせ今年もこの人が優勝だろう。）

そして秘書は思う。

（この人、『首相を脅して、銃刀法違反だけ法律適用外にした人』だから……。）

それから、秘書は市長にばれない様に静かに溜息をついた。

program 15 戦闘後のお話と開戦の予感(?) (後書き)

次回からは、ようやく日常に戻ります。  
最後のあの会話は、もう少ししてから。

program 16 初授業 その1

あの事件からたった数日。

少々荒れた町は、町人の力によってほぼ元通りとなっていた。

異常なまでに早く修復できたのは、力持ちの人が、いや、力を持ちすぎた人が集まっているからであろう。金の工面はどうしたかは知らないが。

そんな訳で、ようやく隼人も学校へと通うことが出来るようになり、いつも通り登校をする。

だが、いつもとは違う点が1つだけ。

「……何でお前らも学校に行くことになったんだ……？」

「えゝ、いいじゃん！退屈しのぎにはなりそうだし！」

『まあ、そうだな。それにお前もあの住処が崩壊するのはさすがに望まないだろう？』

「崩壊させる前提で言うな！！」

「でも、学校に行くの久々な気がしますね……。」

『まあ、死んでから行ってないからな。今度は俺が『憑いてる』し、いじめにあっても大抵は追い返せるだろ。』

「……サクリファイス、くれぐれも殺すなよ？」

『へいへい、分かってらあ。』

そう、突然の市長からの命令により、どんな手回しをしたのやら、居候組が高校に通うことが出来るようになったのだ。ホリユウは留

守番となってしまうが、1匹で町を徘徊するから、とか言っ出て行ってしまったので、恐らく大丈夫だろう。  
しかし、隼人は思う。

（何だって、こいつらの登校を許したんだ？）

そう、ただそれだけ。

突然にアヤメ達に登校させるように言った理由は一切分からない。  
だが、そんなことを思っいても仕方がなく、学校へと話しながら歩いていった。

そして学校。

「はーやーとー」

「よつと。」

「ふぎやっ!?!」

唯の飛びつきを避けて教室に入る。

「……久々に見たな。今のやり取り。」

「まあな。数日間も休みだったからな。そう思っても仕方ないだろ。」

そして、自分の席へ向かい、近くにいた賢と話す。

「賢と話すのも久方ぶりだな。」

「ああ。そして後ろに注意。」

「隼人く！」

「分かってる、よつと。」

「みぎやつ！？」

後ろから飛び掛ってきた唯を避け、唯はそのまま地面に激突した。

「ううつ！何で避けるのさ！？」

「……お前な、教室で抱きつくつてのは……。」

「何でよ！？大体そんなこと言ってるからダメなんだよ！人間はもつと触れ合って、スキンシップをとっていくべきなんだよ！それがないから意思疎通が……！」

「現代文の教科書の受け売りだろ、それ。」

「うん。悪い？」

「まあまあ、落ち着け。」

そんな他愛もないやり取りをしていると、先生が入ってきた。いつも通り、柔道着を身に纏った近藤桔梗だ。

「よし、全員座れ！！」

いつも通りの大声で、全員を一喝して座らせる。そして、いつも通りの授業が始まると思いきや。

「えー、今日は、新たに転入生が入ったので紹介する！入れ！！」

前置きも何もなく、突然転入生の話を持ち出し、さらに入れと言う。さすがにいきなりすぎるだろ、と全員が思ったが、一体誰が来るのか想像をしていた。

そして。

突如、ズガン、という轟音と共に扉が吹き飛び、桔梗に向かう。  
桔梗は合気道の技を使って扉を受け流し、事なきを得た。  
そして、

『……チツ、当たらないか。』

「な、何してるのさ急に!？」

「そ、そうですよ! 仮にも先生……。」

『黙れ。殺すぞ。』

「……すみませんでした……。」「」

そんなやりとりを交わしながら、3人の美少女が入ってきた。  
あまりの登場シーンにも関わらず、この町の特性だからかあまり扉  
が飛んだことには驚かず、彼女らを見るクラスメイト。  
そして、桔梗が3人に自己紹介するよう促す。

『私はアヤメ。名前はこれだけだ。まあ、今後ともよろしく。』

「私はマホメット<sup>マホ</sup>ールドラン。マホって呼んでね<sup>マホ</sup>」

「わ、私は、カゲロウ<sup>あかのめろ</sup>って言います。本名は暁陽炎<sup>あかつひ</sup>です。どうぞ  
よろしくっ!」

『落ち着けよ。』

そして、3人が自己紹介を終えると、クラスの皆が、男子も女子も

湧き上がった。

しかし、それを制止して桔梗が続ける。

「はいはい静かに！！まあ、この3人とも色々と話したいだろうし、今日は授業を取りやめにして、1時間目は自由に過ごしてよし！！以上！！」

と、いうわけで。

教師にあるまじき言葉を発し、桔梗は教室を出て行き、生徒達はアヤメ達に寄って行った。

「ねえ、アヤメ？あなた強かったわよね、あの戦いで。何であんなに強いのか？」

と、1人の女子が聞いた。

しかし、その質問に、こう切り返す。

『実際に戦ってみれば分かるだろ。』

「お、やる？」

と、その女子は突如銃を取り出し、アヤメに発砲する。勿論、当たっても死なないようなところだ。ところが、アヤメはそれを視認し、親指と人差し指で『銃弾を摘んで』止める。

「え……？」

『そら。』

続けて、それをデコピンの要領で弾き、銃で発砲したのとさほど変わりはない速度で銃弾が飛んでいく。

その女子は何とか避け、その銃弾は黒板を突き抜けて隣の教室へ。

「……………」

『これで分かったか？私は『人間』などといった生易しいものではないのだ。』

「……………」

アヤメは、これで怖気づいてしまったのかと思ったが、その予想を裏切るようにその女子は言う。

「凄い！人じゃないとそんなことも出来るんだね！」

『……………』

アヤメは正直驚いた。

これで怖気づかないとは、中々凄い町だな、とも思った。  
と、その時。

「ちょっといいかしら？」

その声と同時に、ガラガラと扉が開く。

そこには、切裂華蓮が立っていた。

「この銃弾、一体どういうこと？」

『ああ、私が指で弾き飛ばした奴か。悪かったな。』

「ゆ、指で……………？まあ、いいわ。それよりあなた、新入生ね。それも暴走の中心となった。」

『まあ、そうだが。』

その返答に、嬉しそうに笑みを浮かべこう言う。

「あら、丁度いい理由が出来たわ。だったら今すぐ殺されて私のコレクションと化しなさい」

と、華蓮は服の中から常に常備している小さなナイフを取り出して、アヤメに切りかかる。

何とも血の気の多い連中だ。しかし、そんな攻撃など諸ともしないといった感じで、ナイフを素手で、いや、手のひらで受け止める。

「そんなの想像の範疇内よ！」

と、ナイフを重心の軸として飛び上がり、そのままアヤメの脳天を蹴りつける。

『……やはりこんなものが、人間は。』

アヤメはその蹴りを喰らう直前に足を掴み、そのまま投げ飛ばす。

華蓮も負けじと投げ飛ばされた際にナイフを数本投げつける。アヤメはそれを片手で全て掴み、投げ返す。

そして、華蓮は綺麗に机の上に着地し、投げられたナイフを道化師のように全て用意に捕らえる。

「あらあら、そんなんじゃ、『切り裂きジャック』の遠い子孫である私には勝てないわよ」

さらつと凄いことを吐いて、投げられたナイフに加え、さらに多くのナイフを投げ飛ばそうとする華蓮が、

「ストップだ、貴様ら！！！」

グッドタイミングで桔梗が入ってきた。

「何ですか桔梗先生。まだバトル中なのですが。」

「うるさい！今すぐ戦闘をやめないと退学にさせるぞ！」

「……はいはい。」

楽しみを奪われたような表情をしながら桔梗に頷き、アヤメに笑いかける。

「あなた、強いわね♪」

『お前も中々器用なナイフ使いをするな。』

「いやあ、あの人の天才的なナイフ使いのお陰よ。とはいっても、娼婦を切り殺した残忍な人だけど。」

そんな会話を交わした後、じゃあねー、と無邪気にその手を振りながら教室を出て行った。

「まったく、アヤメは何でも戦いたがるんだから……。TPOは考えようよ。」

『五月蠅い。殺すぞ。』

「殺したらお前を警察に連れて行くだけだがな！」

『その前にお前も殺す。』

「ほほう。」

どうやら、アヤメは今、桔梗に喧嘩を売ったようだ。しかし、実力からして違うことは先程から桔梗は悟っているため、これ以上は乱闘にはならなかったが。

とにもかくにも、乱闘ありの1時間目はあっという間に過ぎ、授業が本格的に始まる。

2時間目は、英語。

高校生になったばかりの3人の様子はというと。

「では、この熟語の例文を……、アヤメ！訳すがよいわ！」  
「……はい。」

どこの悪の大王ですか、という口で話す英語教師。  
その英文は、

『If you put yourself in my shoes, you will see how sad I am.』  
とある。

そして、指されたアヤメは、何やら黙り込んでいる。  
が、すぐに口を開いて答えを言う。

『もしあなたが私の靴に入っていれば、あなたは私がどれだけ悲しいか見えるだろうに。』

「……全然違うッ！！」  
『おかしいな、翻訳サイトに頼ったはずなのだが……。』

それが原因だ、と隣で聞いていた隼人は思う。

「では、次は……カゲロウ！」

しかし、返事が無い。  
皆がカゲロウの方を見ると。

「……むにゃむにゃ……。」  
『……おい、カゲロウ……。』

サクリファイスが声をかけるも、応答なし。

その理由は明白。

幸せそうな、しかし可愛らしい表情で眠っているカゲロウの姿が、これを見て、不覚にも可愛いと思った生徒も少なくないはずだ。しかし、

「おい、カゲロウ!!」

『おいおい、起きろって、先生のオーラが何か凄えことになってきてっから!!』

先生にも、サクリファイスにも応答せず、ただただ眠り続ける。だが、先生もとうとう耐え切れなくなり、カゲロウの方へと寄り、起こそうとする。ところが、

『いい加減起きろ!!!!!!』

という、一般人にも響きわたって聞こえてしまうほどの音声でサクリファイスが叫び、ようやくカゲロウが目を覚ます。

が、当然問題など答えられる筈も無く、次なる生徒へと解答権が移る羽目に。

しかし、生徒達は先程の叫びの主が何なのか気になって仕方が無く、解答権などどうでもいいといった雰囲気になっ少していた。

それでも先生は、1人の生徒を指す。

「それでは、マホメット!!」

「はい」

マホメットは、英文を見つけ、そして和訳する。

「『もしあなたが私の立場に立てば、私がどれだけ悲しんでいるか分かるでしょう。』で、いいですか?」

ほとんど無邪気に聞くマホメット。

しかし、正解である。

その理由は明白だ。ずば抜けた記憶能力である。

隼人の家でも、辞書の言葉を丸々覚えてしまったほどだからだ。(

program 4 参照)

魔法を多く覚えているのも、そのためなのだろうか。

ともかく、色々あった英語の時間も終わりを告げた。

……授業は、まだまだ続く。

program 16 初授業 その1（後書き）

……ロボット、魔女、亡霊が学校にいること自体まず想像もつかないですね（汗）

アヤメ『いいじゃないか。認めたって。』

いや、地球はそれほど技術力がないから、アヤメのようなロボットはいない（汗）

マホ「魔女だって。」

まずいない（汗）

カゲロウ「亡霊だってそうですよ。」

サクリファイス『同意見だ。』

だからいないっての（汗）

……こんなはちゃめちゃんな授業は、まだまだ続きます……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2178i/>

---

日常→非日常

2011年10月5日17時17分発行